
【アッチノ世界】

anzy.an-jyu.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【アッチノ世界】

【コード】

N67800

【作者名】

anzy・anjyu・

【あらすじ】

アタシの夢に出てくるもうひとつの世界。

そこでの出来事をお話していきたいと思えます。

【アッチノ世界】

> i 1 3 5 4 4 | 1 8 9 2 <

アタシが見る夢にはいくつか種類がある。

なんでもない日常的な夢と【アッチノ世界】と呼んでいる夢。

それはまるで小さな街で起きた出来事のように共通の建物などが存在していて、違う日に見た夢と夢が形を変えてリンクしている。

上手く説明出来ていませんが……

【アッチノ世界】に出てくる建物や見た夢の話を此処に載せて行くかと思いません。

自分なりの表現方法なので伝わりにくかったり、間違っていたりすることも多々あると思います。

そんな時は、ゴメンナサイ。

アタシの夢の世界を少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

【アッチノ世界地図】

> i 2 9 6 1 5 | 1 8 9 2 <

これはアタシの夢の世界に出てくる建物などの配置図みたいなもの。黒い部分に書いてあるのは、どこにあるのかわからないモノです。

新しい建物が出てきた時など、変化があった場合は更新します。

【百鬼夜行】

> i 1 3 5 5 4 — 1 8 9 2 <

暗闇に続くのはデコボコな一本道。

幼いアタシは一人立っていた。

前触れもなく風が吹いて引き寄せられるように振り返ると、遠くに丸い光が浮いていた。

ゆらゆらと近づくと光に見とれていたら、また前触れもなく風が吹く。

今度は目隠しするようにアタシを包み込んだ。

デコボコ道すら見えない真っ暗闇で、アタシの耳元に聞こえてきたのは、たくさんの足音と笑い声。

そっと目を開けてみると、目の前には不思議な姿をした生き物達が一列を作って歩いていた。

先頭には籠もどき。

さっきの光を提灯のように持っている。

どんと近づいてくる行列にぶつかるとどうか……

そんな寸前のところで目が覚めた。

幼かったアタシにとってはただの怖い夢。

寝る前に見た本やテレビの影響なのかもしれないけれど、まるで百鬼夜行に遭遇したかのような夢だったと今は思う。

これが記憶にある中で一番、古い夢。

【アッチノ世界】へのきっかけだと感じる夢。

【夕暮れの六丁目】

> i 1 3 5 4 6 — 1 8 9 2 <

我が家は六丁目にある。

【アッチノ世界】の我が家は、何丁目にあるのかわからない。

玄関から一步出ると、ちゃんと六丁目の風景になっている。

【アッチノ世界】での我が家周辺は、いつも夕暮れ。

たまに曇り空だったり、真夏だったりするけれど……

それは本当に珍しい。

夜さえ来ない。

朝日も見えない。

まるで夕暮れを最後に時間が停まってしまったかのような世界。

そんな我が家を中心に【アッチノ世界】は繋がっている。

【三階建ての我が家】

> i 1 3 5 4 5 — 1 8 9 2 <

我が家は三階建て。

【アッチノ世界】でもやっぱり我が家は三階建て。

キッチンとリビングのある三階には、地球外生物がよく登場する。

寝室が並ぶ二階から夢が始まると、殺人鬼に遭遇したり……何処かへ迷い込んだり……

恐怖が生まれることが多い。

玄関のある一階は、何故か見える物全てがセピア色。

いつも古い写真や映像のようにならざらと荒く存在している。

【アッチノ世界】の我が家で落ち着くなんて、皆無だと言える。

【黄色いサル】

> i 1 3 5 4 9 — 1 8 9 2 <

我が家の二階から始まった。

そんな夜はやっぱり普通ではなかった。

夢の中で目覚めたアタシを部屋の前で巨大な何かが待ち伏せをしていた。

アタシは動かずにじっと様子を見ていたら……

突然、その何かが猛スピードでキッチンのある三階へ向かった。

巨大なモノが現れたせいか三階からはお皿が割れる音や騒がしい物音が響く。

慌てて階段を駆け上がりキッチンを覗いてみると、物音一つせず何事もなかったかのように部屋も綺麗なままだった。

キッチンには女の人がいた。それが誰なのか思い出せない。

その誰かをAさんと呼ぶことにして……

Aさんはキッチンにある椅子に座ってお茶を飲んでいた。

(何も知らないのだろうか……。)

驚かせたくはなかったので、アタシはAさんには巨大な何かのことは聞かずにシンクにあった食器を洗いながら二人で話をしていた。

そんな時

『キヤーツ!!』

いきなり後ろからAさんの悲鳴が聞こえてきた。

慌てて振り返ると、テーブルの上には緑色の眼をした毛の黄色い人形のようなサルがちょこんと座っていた。

『この黄色いサルは鳴くと変な仲間を呼ぶのよ!』

その黄色いサルを見て悲鳴をあげていたAさんがそう叫んだ。

その瞬間

?キヤーツ!!?

テーブルに座っていたサルが大きな歯を食いしばり物凄い金切り声をあげた。

『キヤーツ!!』

それと同時にまたAさんの叫ぶ声が隣のリビングから聞こえてきた。リビングに向かうとベランダ側にある障子いっぱい巨大な何かの影が映っている。さっきアタシの部屋の前で待ち伏せしていたやつに見える。

(黄色いサルが呼ぶのはこいつか! もっといっぱい来ちゃったら怖いじゃない……始末しなきゃ!)

なんて思ったアタシはパニック状態。

キッチンへ戻り、鳴き止まない黄色いサルを掴んでブンブン振り回した。

それでも負けないサルを冷蔵庫やシンクの角に何度も叩きつける危ないアタシ。

叩きつけられても鳴くのを止めないサルに焦ったアタシは気が狂ったのか、さっきまで使っていた食器用洗剤をサルの顔や体中にかけて物凄い力でゴシゴシ洗いながら水を浴びせ続ける。

無我夢中でその作業を何度も繰り返すアタシ。

気づいた頃にはボロボロに毛も洗い流され、黄色いサルは静かにくったりとしていた。

(よし！ サル討ち取ったり！)

なんて興奮しつつリビングに戻ると巨大な影は消えていた。

叫んでいたAさんはベランダに出ていた。

アタシもベランダに出てみると、外は曇り空でポツポツと雨が降ってきている。

ベランダから家の前を見下ろすと、道路には雨の跡と巨大な何かが移動したような跡が遠くまで続いていた。

(もう終わったんだ……。)

ホッとしてAさんに黄色いサルとの死闘を自慢げに報告していたその時だった。

外を見ながら話を聞いていたAさんが震えながら後ずさった。

指した先に見えたのは 見覚えのある黄色いサル。

振り返り見たキッチンにもハゲ散らかした黄色いサル……。

何だか嫌な予感がして辺りを見渡してみると……

ベランダから見える全ての家の窓際に、行儀良く座った黄色いサルが我が家へ向けて歯軋りしながら待っていました。

数で挑んでくる黄色いサルに一本の食器用洗剤じゃ勝てないということ を 学びました。

【鏡越しの双子】

> i 1 3 5 5 0 — 1 8 9 2 <

その日の夢は一階へ続く階段前から始まった。

我が家の一階には玄関と階段下の収納スペース、洋室が一つある。

階段を下りていく途中で見える景色はセピア色に変わっていた。

でもね、いくつか違っていたことがある。

アタシは一人で下りてきたはずなのに、いつの間にか目の前にはもう一人。

階段を下りた正面にある大きな鏡には、そのもう一人と同じ容姿をしたアタシが並んで映っていた。

双子……。

どっちが姉だか妹だかわからないけれど、隣にいたもう一人は鏡の中で微笑みながらアタシに何かを言っている。

真横にいるのに特有のノイズ音で聞こえない。

口元を見ても、ざらついた一階の世界では無意味だった。

何かを言い終わると満足したのか、嬉しそうに鏡の横にある洋室のドアを開けた。

開きかけた隙間からは、ざわざわとつごめく様な暗闇しか見えない。

それが当たり前なのか……

もう一人はアタシの手を取り、そのまま洋室へ入っていきこうとする。でも、何があるのかわからない。

そんな部屋に入るのがアタシは怖くなって、もう一人の手を振り払い猛ダツシユで階段を駆け上がった。

怒ったり、悲しんだり……それとも無表情なのか……。

置いていかれたアノコはきつとアタシを見ていたと思う。

鏡越しでしか見ていないアノコを直接見るのが何だか怖くて振り返れなかった。

?パタン?

最初に立っていた二階の階段前まで辿り着くと静かにドアの閉まる音が聴こえた。

アノコはどうなったんだろう……。。

【小さいチップく大きいミッキー】

> i 1 3 5 5 1 — 1 8 9 2 <

我が家には二匹の猫がいる。
父猫のチップと息子猫のミッキー。
牛柄の親子だ。

ある日の夢は我が家の二階から始まった。
また夢の中で目覚めたアタシ。

(このパターン……。)

数日前に黄色いサルの夢を見たばかり。
また巨大な何かがいるのではないかと部屋の前を見た。

何もいない。

安心していたら扉の外で物音が聞こえる。

そーっと扉を開けてみるとチップが座っていた。
いつもは三階にいて二階には下りてこない。
珍しいと思いつつも寝床に連れて行こうとチップを抱っこして三階
へ向った。

今度は階段を上りきったところにミッキーが座っていた。
ミッキーの姿が見えた途端にチップがアタシの腕から無理矢理下り
た。

二匹揃ってリビングの方へ走っていったので気になって追いかけてよ
うとしたらキッチンから？ガサガサ？と何か音がする。
電気を点けてみるとテーブルの上にチップが座っていた。
でも、子猫のように小さい。

その小ささに驚いていたら突然、ふくらはぎに？ドン！！？とよる
けるぐらいの衝撃
慌てて足元を見ると中型犬サイズのミッキーがスリスリしている。

見慣れない大きさに思わず後ずさるアタシ。
ジリジリと追い詰められるように背中からリビングへ一歩入った瞬
間

沢山の猫の鳴き声が一斉に聴こえてきた。

慌てて振り返るとリビングのアチラコチラにたくさんのチップとミ
ッキー。
でも、みんな模様も色も大きさもバラバラ……

(どの猫が普通のチップとミッキーかわからなくなっちゃう！)

なんて思ったアタシは掻き分けるように探してみた。

マトリョーシカのように並ぶ中から普通のサイズのチップを発見！
そう思って抱っこしてみると顔はチップなのに模様がミッキー。

またまた発見！！

抱っこしてみると、チップだけど今度は尻尾が短い。

探しても……探しても……なかなか見つからない。

それでも一生懸命探していたら突然

?コンコン……コンコン……?

どこからか音がする。

まるで猫缶を叩くような……。

そんなこと考えている間にサイズのバラバラなチップとミッキーが
一斉に階段の方へ走り出した!

二階から音がするのか、次々と下りて行ってしまふ。

アタシもつられて追いかけようとしたら目が覚めた。

起きてすぐにチップとミッキーの模様と尻尾を確認。

何ともなくて安心したけれど……

どこかに小さいのがあるんじゃないかと、今でもたまたま戸棚の扉を
開け閉めしてしまいます。

【アッチノ世界】で大群のマトリョーシカみたいな猫達に遭遇し
たら、猫缶の音が聴こえてくるのを待つてみてください。

幸運の猫缶の囁きに彼等は貪欲に反応してしまいます。

【神社公園】

> i 1 3 5 5 9 | 1 8 9 2 <

【アッチノ世界】では、我が家を中心に様々な場所へ繋がっている。

我が家の玄関を右手にすると、大きく分けて三本の分かれ道が伸びている。

そのうちの一つ。

我が家の玄関と正反対の左手側にある道。

そっちへ歩いていくと大きな木が見えてくる。

そのまま進んでいくと砂利道になっていって、神社と公園が合体したような場所に辿り着く。

そこはコッチノ世界にもあって、近所では『神社公園』と呼ばれている古い小さな公園。

でも、【アッチノ世界】では、やっぱり普通じゃなかった。

ある日の夢では

神社公園の近くの道に立っていたアタシ。

早朝なのか辺りが見えないくらい朝靄が広がっていた。

見渡していると神社公園の方から子供の笑う声と何かが聴こえる。

声のする方へ向かうと神社公園の前に広がるちよつとした広場に子供の姿が見えた。

笑い声と一緒に聴こえていたのはラジオ体操の音楽。

音は聴こえるのにラジオや音を流すモノは何処にも見当たらない。

気にせず音楽に合わせて体操をしている子供達はなぜかみんな不思議なお面をしていた。

白い長方形のお面には赤い墨で描かれた笑い顔。それぞれ異なる笑顔。

離れたところでポーッと見ていたアタシの手に何か触れた。

下を向くと小さな子供がアタシの手を握っていた。

何故かその子供だけ白い狐のようなお面をしていた。

『狐？』

思わずそう問いかけたアタシに子供は何も答えず首を傾げた瞬間、目が覚めた。

また違うある日の夢では

やっぱり神社公園の近くに立っていたアタシ。

今度は朝ではなく夜だった。

ガヤガヤとした人の話し声と太鼓の音が響く。

神社公園の辺りが灯りで光っている。

気になって明るい方へ向ってみると、神社公園と広場の間を通る砂利道を挟むように縁日の屋台が並んでいた。

屋台の前には沢山の子供や大人がいて、ゆらゆらと残像を残しながらゆっくりと動く。

どの人の顔にもやっぱりあの不思議なお面がつけられていた。

ラジオ体操の時と同じように太鼓の音はするのに太鼓は見当たらない。

コッチノ世界では【アッチノ世界】と違って、砂利道を真っ直ぐ向かった先にある円形の墓地の中でお祭りが開かれる。

（太鼓はそこにあるのかもしれない。）

そう思って墓地の方へ向かってみた。

徐々に近づいて見えてきたモノ。

それは丸い墓地ではなく、森のようにも見える沢山の木だった。

【アッチノ世界】では丸い墓地は存在しない。

あるはずの場所には、見たことの無い下りの坂道が続いていた。トンネルのように木が囲む先の見えない坂道を下りようとした瞬間

後ろから鈴の音が聴こえて、振り返ると目が覚めた。

あの時、そのまま坂道を下りていたら……

どうなっていたんだろう。

【スケルトンハウス】

【アッチノ世界】では我が家を中心に様々な場所へ繋がっている。

我が家の玄関側にある道を右手にすると、正面に大きく分けて三本の別れ道が伸びている。

【神社公園】のある道は左手。

残るド真ん中の道を進んでいくと、途中で家がU字型に並んでいる横道がある。

その横道はコッチノ世界にも存在する場所。

ある日の夢は、その横道に立っていた。

すぐに【アッチノ世界】だと思わされた。

何故なら、並んでいる全ての家が透けているから。

プラスチックで出来たような透明の家ばかり。

どの家も中が丸見えだった。

ご飯を食べていたり、テレビを見ていたり、あんなことやこんなこと。

夢だから容赦なく恥ずかしいことまで丸見え。

見えてしまうのが失礼な気がして、その横道から出ようと思った。

方向転換して数歩……。

歩き出したアタシの背中を何かが引っ張る。

恐る恐る振り返ると、小さな女の子がアタシの服を掴んでいた。

『どっしたの？』

声をかけてみた。

『どこへ行っちゃうの？ ママ』

『ママ?!』

『パパも待っているよ』

そう言うと女の子は振り向いて家を指さした。

指された家の前では、男の人が手を振っている。

『あの方がアタシの旦那さん？ アタシもあの家に住んでいるの？』

なんてブツブツと呟いていたら、女の子が今度はアタシの腕を掴んで家の方へ引っ張っていく。

『ちょっと待って！ 待って!』

『早くお家に帰って一緒にお風呂入ろうよ』

慌てるアタシを無視して笑顔の女の子。

まだ小学校にも入っていないなさそうな幼い女の子なのに異常に力が強い。

『いや……いや……いや……』

駄々をこねる子供のようにながみ込んでいたら目が覚めた。

いくら夢でもねえ。

丸見えでお風呂はちょっと……。

透けている家を見つけた時は、捕まる前に逃げたほうが賢明です。

【追われる右ロード】

> i 1 3 5 5 2 | 1 8 9 2 <

【アツチノ世界】にある三本の分かれ道。

そのうちの一つ。

我が家の玄関側にある道。

そこから始まる夢は絶対と言っていいほど何かを追いかけてくる。巨大なロボットや一輪車に乗ったオッサンなど……何でもいいらしい。

この道の恐ろしいところは、そこから始まった夢じゃなくても受け入れてしまうこと。

何かに追われて街中を走っていたり、右の角を曲がったり……不意に右に向って逃げたりすると自然とその道に繋がってしまうことが多い。

まるで犬に追いかけられているかのように、逃げれば逃げるほど何処までも追いかけてくる。

【アツチノ世界】で何かに追われた時。

立ち止まったり……隠れてみたり……

走らないでゆっくり移動したほうが意外に逃げ切れるかもしれない。
毎回、そう思うくせに実行できないチキンなアタシです。

【再会ロード】：救世主なドンちゃん（前書き）

【アッチノ世界】にある三本の分かれ道。

そのうちの一つ。

真ん中の道を進み【スケルトンハウス】を通り過ぎて更に真っ直ぐ進むと、今度は十字路の分かれ道が現れる。

十字路の右側は【追われる右ロード】に繋がっている。

反対の左側は【再会ロード】と呼んでいる。

思いがけない存在に会える不思議な道。

【再会ロード : 救世主なドンちゃん】

ある日の夢。

真ん中の道を歩いていたアタシ。

十字路を右に曲がろうと一歩入った瞬間、右側から野犬のような動物が大群で走ってきた。

アタシは慌ててUターン。

真ん中の道には戻らず、そのまま真っ直ぐ左側の道に走っていった。

左側の道は霧なのかスモークを焚いているかのように白い煙で何も見えない。

でも、野犬が追いかけてくるのが鳴き声や足音でわかった。

焦ったアタシは無我夢中で走る。

そして思いつきり転んだ。

かなりの衝撃にすぐには立ち上がれなかった。

振り向くと白い煙の中から野犬の口が見えた。

（咬まれる!!）

身構えた瞬間

?チリン……リン……? ?

何処からか小さな鈴の音が聞こえる。
野犬も音に気を取られて一瞬止まったけれど、また牙を剥き出して近づいてきた。

また？チリン……リン……？

野犬が少しずつ近づぐことに鈴の音も大きく響く。

突然、野犬が跳びついてきた。

息も感じられそうなくらい間近に迫った瞬間

？……ウゝワンッ！？

『ワン？？』

振り返ると白い煙の中から救世主が

『ドンちゃん！…！』

ドンちゃんは昔、我が家で飼っていたポメラニアンの子。

夢の中のドンちゃんは首に小さな鈴のついた青いリボンを巻いていた。

？チリン……チリン……チリン……？

小刻みに走ってくるドンちゃんに合わせて鈴が鳴る。

もう随分前に亡くなったドンちゃん。

（夢の中でアタシが危ないからって助けに来てくれたのね。それで格好良く登場しようとしたのに自分の歩幅と野犬の迫り具合がズレちゃったから、思わず吠えちゃったのね……。何だかドンちゃんらしい。）

なんて夢の中で思ったアタシ。

アタシの側に来てウルウルした瞳で見つめてくれるドンちゃん。擦り剥いた脚をペロっと舐めてくれた。

そのまま野犬の方へ走っていくドンちゃん。
生前も走るのが物凄く早かったドンちゃん。

野犬をどんどん引き連れて白い煙の中へ消えていってしまった。
まるで自分がおとりになるかのように。

それが嬉しいけど何故か悲しくて……
アタシはその場でドンちゃんの名前を叫びながら号泣。

目が覚めると涙で枕が大変なことになっていました。

ずっと優しくかったドンちゃん。

今でも大好きです。

【再会ロード：お祖母ちゃんと自転車】

現実の世界で嫌なことがあって、死にたいとまで思っていた時期がある。

そんな頃に見たある日の夢

その日は夜だった。

家にも帰りたくなくてトボトボと、その道を歩いていた。一本だけある街灯が遠くからも見える。

その奥から自転車に乗った人が近づいてきた。

街灯の下を通った瞬間、灯りで自転車に乗った人の顔が見えた。

『お祖母ちゃん？』

自転車に乗っていたのは母方の亡くなった祖母だった。

『あなたなら大丈夫よ。頑張っつてね』

アタシの横に来て、すれ違いざまにそう言ってお祖母ちゃんは笑いながら自転車で暗闇の中を去っていった。

目が覚めてから暫く何も考えられなかった。

落ち着いてから家族にその話をすると『今日はお祖母ちゃんの日だから会いに来てくれたのかもね』と言われて涙が止まらなかった。

あの言葉はどういう意味だったのだろう……。。

【迷路街】と【商業ビル地帯】（前書き）

【アッチノ世界】の夢は繋がっている。

映画のセットのように同じ場所で色んな夢を見る。

その中の一つに【迷路街】と呼んでいる場所がある。

迷路街には主に不可思議な住宅と、小さなお店が所々に存在している。

迷路みたいに入り組む道。

迷ってしまう度に様々な建物やお店に辿り着く。

良い人に出会う時もある……

悪い場所に引き寄せられることも……

その時の運で決まるクジ引きのような街。

【迷路街】と【商業ビル地帯】

> i 1 3 5 6 0 | 1 8 9 2 <

【迷路街】の近くに【商業ビル地帯】と呼んでいる場所がある。

【迷路街】が住宅なら呼び名の通り、此処はビルが迷路のように幾つも隣接している。

【アッチノ世界】の人口はとても少ない。

その中で此処は人が一番多く歩いている場所だと思う。

日本の駅ビルのようにパチンコやゲームセンターみたいなお店も並んでいるけれど、それよりも出店が目立つ。

なんて言うか、外国映画に出てきそうな……ちょっと間違っちゃった日本。

そんな街並みに思える。

【アッチノ世界地図】では離れて見えるけれど、【迷路街】と商業ビル地帯は凄く近いはず。

言い切れないのは商業ビル地帯という場所がとても奇妙だから。

【迷路街】を歩いていたのに、気が付いたら商業ビル地帯にいた

なんてことはよくある。

ある日の違う夢では、端と端ほど遠い場所にいるはずなのに、扉を一つ開けると商業ビル地帯

なんてことも。

夢なんだから、アチラコチラに移動できるのは誰でもよくあることだと思う。

でも毎回、変な感覚に支配される。

まるでサメのように音も無く近づいてきて、隙があればアリジゴクのように、商業ビル地帯というテリトリーに誘い込まれているような気がしてならない。

ビルや路地の一つ一つにザワザワと……

自我のようなモノを感じる。

生きた場所なのかもしれない。

【ロールケーキ屋】

ある日の夢はアタシの部屋から始まった。

【アッチノ世界】の我が家の二階から始まったのに、いつも出てくる地球外生物は現れず……

怖い夢でもなさそうな雰囲気だった。

アタシの部屋に知らない女の子が来た。

その子が美味しいロールケーキを買ってきてくれたらしい。

『早速、食べよう！』

部屋に来てすぐに箱から出してくれた。

本当に美味しそうな白いロールケーキ。

例えば【アッチノ世界】で食事をしたことは、ほとんどなかった気がする。

美味しそうな食べ物があっても、食べる寸前で目が覚めたり、何かに邪魔をされたり、食べる寸前で目が覚めたり……

食して味わうことなんて出来なかった。

(今日も食べられないんだらうな……。)

今回もそう思っていた。

でも、暫く様子を伺っていても誰にも何からにも邪魔をされない。

(え……本当に食べちゃうけど……いいの?)

なんて心の内でドキドキしながら一口。

(……美味しい!)

今回は珍しく普通に食べることが出来て大満足。

このロールケーキ屋は【迷路街】と【再会ロード】の近くにあるらしい。

(どんなお店が見に行ってみたいけれど、間違えて【殺人ロード】に入ってしまったら怖い夢になってしまう……。)

なんて考えていたら目が覚めた。

夢の中で美味しいロールケーキ屋を見つけた方、ありましたらご一報願います!

【XXロード】

【ロールケーキ屋】のお話の中でちょっとだけ出てきた【殺人ロード】

それは【迷路街】の中にある厄介な場所。

得体の知れない何かに遭遇して、追いかけられるだけでも寝起きに嫌な汗を感じるのに……

【殺人ロード】に出てしまうと、そこにいるだけで殺されそうになる。

無差別殺人に巻き込まれたり、謎な人物に追い回されて最後は殺されたり……

その時々で殺され方は変わる。

一度、殺されてしまうと巻き戻したかのようにまた生き返って、何回も同じ夢を繰り返す。

一度目にこんな風に殺されたから、次はこっちへ逃げよう……

なんて行動を変えてみても違う方法で殺人鬼は現れる。

コッチノ世界のアタシが強制的に現実へ引きずり出してくれるまで、その悪夢からは逃れられない。

例え一歩でも入ってしまったくない。

最悪の場所。

殺人鬼に追いかけられている眼鏡娘を夢の中で見かけたら、是非助けてください。

【XXロード】：危ない隠し芸】

【殺人ロード】が危険な場所だとまだ確信していなかった頃。
殺人ロードの近くにある駅に向おうとしていたアタシ。

駅の前にある道路を渡ろうと待っていたら、空から轟音がして白い物体が落ちてきた。

周りのアスファルトはボコボコ。

ブワツと舞う粉塵の中から現れたのはSF映画に出てきそうな人型ロボット。

ゆっくり立ち上がったと思ったら、両腕を左右に広げて構えた。

その瞬間、腕からマシンガンのような武器が現れて振り回しながら辺りに乱射。

しゃがんで避けられたと思ったけれど……

?ドンツ!?!?

衝撃を受けて視界が真っ暗になった。

目を開けると目の前には、さっきと同じようにゆっくりと立ち上がるロボットの姿が

とっさにアタシは近くの建物の影に隠れた。

耳を澄ますとパラパラと粉塵の落ちる音は聴こえるのに、マシンガ

ンを乱射するような音は聴こえない。

(どこかへ行ってしまったのだろうか……。)

そつと覗いてみるとロボットは左腕で支えた右腕をアタシに向けて構えていた。

(見なければ良かった……。)

後悔する暇も無くロボットの右腕はロケットランチャーのように吹っ飛んできて？ドカンッ!!？と聴こえる前に視界がまた真っ暗になった。

恐る恐る目を開けてみると……やっぱり、ゆっくりと立ち上がるロボット。

今度はしゃがみもせず、隠れもせず、駅とは違う方向へ無我夢中で走った。

走って、走って、ついチラッと……

(好奇心で振り向かなければ良かった。)

ロボットは模範演技のような美しいフォームで追いかけてきた。乱れることなく交互に前へ出される両腕。

その左腕の外側が分解されるようにポロボロと後ろへ吹っ飛んで行ったかと思うと、残った内側には鋭い光る物が……。

サーベルのような鋭い物をブンブン！ブンブン！容赦なく振り回してくるロボット。

振り向きながら避けていたアタシ。

不意にロボットの一振りが胸元のボタンか何かに引っ掛かった瞬間
驚いたせいか脚がもつれて激しく後ろに転倒。

その衝撃なのかわからないけれど、ビクッ！と体が動いて目が覚めた。

これでもし起きていなかったら……

あのロボットは後何回、危ない隠し芸を披露していたのだろうか。

【XXロード】： 天使と悪魔】

月日はだいぶ経って……

【殺人ロード】にて散々な隠し芸を披露されたことを忘れてしまっていた頃の夢。

コッチノ世界でお世話になっている方達とbarのような場所で呑んでいた。

みんなでワイワイ楽しんでいるところに謎な男が入ってきた。

無言でお店の真ん中ぐらいまで来ると……突然、男が爆発。

ふと気付くと男が入ってくる前の状況に戻っていた。

(こんな夢、前にも見たな……)

そんなことを思っていたら、男が来る前に店を出て運よく爆発に巻き込まれなかった人を見つけた。

さつきは気にも留めていなかったことなのに……

その決定的瞬間がスローモーションのように目に映る。

まるでアタシも真似して逃げると言われている気がした。

慌ててその人の後にお店を出ると驚かれた。

『どっしたの?』

『少ししたらお店に変な男が入って来て、いきなり爆発してみんな

が巻き込まれちゃう！』

そう必死で訴えたけれど、さっき助かった彼女は『そんなことあるわけないでしょ！』と笑って信じてはくれなかった。

信じてくれないのなら自分だけでも逃げようと思った薄情者なアタシ。

お店の前の道を少し歩くと広い場所に出た。
辺りを見渡した瞬間、昔見た夢の映像が浮かぶ。

(前にロボットが落ちてきた場所に似ている……)

前の夢でロボットが立っていたような場所。

その奥にトンネルが見える。

入り口に積み重ねられた赤茶色のレンガが飲み込まれそうなくらい……先の見えない暗闇が続いていた。

トンネルの上には線路と小さな駅。

(やっぱり此処はあの時の場所)

?コツン……コツン……?

そう確信するのを待っていたかのようにトンネルの奥から足音が聴こえてきた。

暗闇から現れたのは、さっきお店で爆発した男。

両手にはサバイバルナイフ。

トンネルを抜け切ると同時に、近くにいる人達を次々と切りつけていく。

徐々にスピードを上げながら踊るように近づいてくる男。

アタシは一目散に【迷路街】の奥へ行こうと走った。

?コツン…………コツン…………コツ…………コツ…………コツ…………コツ…………コツ…………コツ…………
…?

追いかけてくる足音が後ろから聴こえる。

振り向かずに走って…………走って…………気がつく足音が止んでいた。

(どうにか振り切れたみたい…………)

振り返っても誰もいない。

少しホツとして、呼吸を落ち着かせるために立ち止まった。

自分の心臓の鼓動が内側から響く。

?ドクン…………ドクン…………コツン…………コツン…………?

(…………アイツだ)

再び走ろうとしたら、足音は前から聴こえる。

(ヤバい。先回りされたんだ!!)

逆方向に逃げようと慌てて振り返った瞬間

目の前には殺人鬼の男が立っていた。

振り返りを浴びた緑色のモッズコート。

目元を隠すようにフードを深々と被り、ニヤツと笑う。

笑ったままの口で男が?フーツ?と息を吹くと

?ザクツ……!?

何とも言えない衝撃。

脇腹を見てみると血塗れのサバイバルナイフが刺さっていた。そのまま倒れながら視界が真っ暗になった。

次に目を開けると刺された場所に立っていた。

そこは住宅街の中にある真っ直ぐな一本道。

殺人鬼は絶対にまた現れる。

でも、さっきみたいに前から来るのか……逃げてきた方から来るのか……

アタシには見当もつかない。

ふと近くにあった家を見上げた。

(これって自分の夢なんだから、飛んだり出来ないのかな……)

急に思い付くアタシ。

鳥のように……とまではいかなくても強く願えば、忍者のように屋根から屋根へ……ぐらいは出来るのではないかと思いついた。

早速、挑戦! いざジャンプ!

見ている人なんていないんだから、思い切ってやればいいのに……恥ずかしさに勝てないチキンなアタシ。

(いくら夢でも、やっぱり飛べるはずないよねえ……)

なんて自分を誤魔化すように言い聞かせていたら

?…コツン……コツン……?

(来た!)

そう思った瞬間、扉を引つ掻きながら駆け上がるようにジャンプ!
ブワツと跳んで屋根へ。

(おおー。跳べちゃったよ……)

驚きつつも興奮していると

?ガシヤンツ!?

突然、音がした。

そーっと下を覗いてみると、駆け上がってきた扉に男が脚立を立てかけていた。

(脚立で来たか……)

追いつかれると思ったアタシは明るい場所へ逃げようと屋根から屋根へ華麗に跳ぶ。

途中でツルツと滑りながらも夕暮れ色に染まる我が家を目指してジャンプ!

目の前の屋根に見事着地!!

(後、もう少し……)

そう思つて顔を上げると見えていた夕方の風景は消えていた。

アタシの目に映ったのは暗い夜の駅前。

視界の端には赤茶色のレンガ。

(なんでまた此処に……離れたはずなのに……)

状況が理解できず、パニックになっていると

?……コツン……コツン……?

アチラコチラから聴こえてくる。

どんな形で逃げてても殺人鬼に辿り着いてしまう。

こうなつたらアタシも応戦するしかない。

その為には何か武器が必要だと思ひ動こうとした瞬間

?ドスツ!?

よろけてしまつぐらいの衝撃。

違和感のある左側の脇腹を見てみると細長い物が刺さっていた。

アタシは脇腹を押さえたまま崩れるように倒れた。

?コツン……コツン……?

足音はトンネルの方から聴こえる。

ゆっくりと暗闇の中から姿を現した殺人鬼。

手にはボーガンのような物を持っていた。

(なんで脇腹ばかり……)

薄れ行く意識の中。

『お〜い！ 辛いのがえ〜』

(この声は……)

最初にいたbarで一緒にみんなと呑んでいたTさんの声。目を開けてみるとやっぱりTさんがいた。辛いのはTさんにいつもあげていた物。

『せつかくだから全部貰っていくぞ!』

辛いのをアタシのバッグから引つ張り出して手に持って笑っていた。

『お前の為に他の奴等までやっちまったけど、寂しくないからいいだろ?』

いつもと変わらない口調で、とんでもないことを言い出したTさん。

(あの殺人鬼の黒幕はTさんで……Tさんにアタシは狙われていたんだ……)

再び薄れ行く意識の中、ショックを受けていたら突然ガシッ!とアタシの脚を誰かが強く掴んだ。

頭を上げて見てみると足元にTさんがいた。目線を戻した先にもTさん。

二人いる……。

『まだ死なせはしないぞ！ こいつにはまだやらなきゃいけないことがあるんだ。せつかくさつき生き返らせたのに……』

足元にいるＴさんが黒幕のＴさんに向かって怒鳴っている。

救世主風なＴさんを無視して、黒幕のＴさんは楽しそうにアタシの顔を覗く。

『もうお前の使命はいいんだよ。上へ帰れ……。アシュラ』

そう呟いて笑った。

シヨックのせいで悲しいのか、涙が溢れて止まらなかった。

泣きながら黒幕のＴさんを見つめていたら、そのまま夢から覚めてしまった。

目を開けると涙がボタボタと枕に落ちる。

その時はアシュラとは何のことなのか、全く思い浮かばなかった。気になってＴさんに夢の話をしてみると『アシュラ』阿修羅だろ。自分の中に阿修羅を感じ、それを一番退治して欲しい人を登場させたんじゃないかなあ……って俺かよっ!!』

なんて笑って言うてくれたけれど。

納得出来たようないないような……

この夢を思い出す度にモヤモヤしております。

もし夢の世界でモッズコートを着た殺人鬼に遭遇したら

逃げつつも応戦できる武器を探してみてください。

レアな武器を見つけたら、やられっぱなしの状況を打破出来るかも

しれません！

……たぶん。

【青い廃墟ビル】と【白い布に包まれた家】

前回の【殺人ロード】で遭遇した殺人鬼から逃げるため【迷路街】にある住宅の屋根を忍者のように跳んでいたアタシ。

その時に【迷路街】ならではの住宅を見掛けた。

【青い廃墟ビル】と【白い布に包まれた家】

二つともアタシが幼い時の夢に出てきた建物。

前にも違う夢で【青い廃墟ビル】と【白い布に包まれた家】の前を
通って眺めたことがある。

本当に昔の夢だから、うる覚えも何も全く覚えていなかったのに……
数軒離れた屋根から並んだ二つを見つけた時、また昔に見た夢の映
像が頭に浮かんだ。

【青い廃墟ビル】は【商業ビル地帯】の中にありそうな雑居ビル。

【迷路街】の住宅ばかり建っている場所に何故が存在している。

夢の始まりはビルの中に立っていた。

立っていた場所は入り口のすぐ近く。

入り口の扉のガラスは粉々に割れて、辺りに散らばっていた。

誰にも使われていない廃墟ビル。

ビルの中は電気も通ってなさそうで暗い。
入り口のすぐ左側には受け付けだと思われる小さなL字型のカウンター。

カウンターの中や外、奥に続いている廊下にも異常な数の細長いロツカーが乱雑に並んでいた。
ロツカーの他に砕けたコンクリートや書類のような紙くずなどがアチラコチラに落ちている。

中の様子を照らし出すのは、入り口から入る外の明かりと大量に置かれたロツカーの隙間から漏れる窓の光だけ。

正面の廊下には大量のロツカーと一緒にソファアや机などがゴチャゴチャと積み重ねながら続いていた。

? シャン…… シャン…… シャン…… シャン…… ?

廊下の奥から奇妙な音が聴こえてきた。

積み重ねたソファアに近づいて奥を覗いてみると、廊下の突き当たりに扉が見える。

その扉の前で小さなシンバルを持ったサルのオモチャが小刻みに動いていた。

全身の毛は黄色く赤いトンガリ帽子を被り、シンバルに合わせて大きな歯をカチカチと鳴らす……

今思えば、【黄色いサル】に出てきたサルに凄く似ていた気がする。

幼かったアタシは好奇心のままにサルのいる奥を目指した。

ソファアを乗り越え、机の下を潜り、ロツカーの間を突き進んでいくと扉の前に辿り着いた。

でも、オモチャのサルはいなかった。

サルのいた場所に座っていたのは、両腕を上げた古いフランス人形。近づいてフランス人形を見ていると

? シャン…… シャン…… シャン…… シャン…… シャン…… ?

音は扉の中から聴こえてくる。

アタシはフランス人形を横目に扉を開けようとした。けれども、鍵が掛かっているのか開かない。

諦めて戻ろうと一歩後ろに下がった瞬間、音も無くフランス人形がゆっくりと横に倒れた。

? カチン?

同時に扉から音が鳴った。

フランス人形の両腕は扉を指差しているように見える。そっと近づき扉を押してみると、すんなりと開いてしまった。

扉の内側には青みがかった薄暗い大部屋が一つ。

この部屋にもロッカーがたくさん置かれていたけれど、ロッカーよりも目を引いたのは角張ったダクトのような細長い鉄製の物が床いっばいに広がっていた。

まるで迷路のようにクネクネと。

? シャン…… シャン…… シャン…… シャン…… シャン…… ?

音は細長い物の中から聴こえる。

扉のすぐ横から中に入れそうだった。

(入ってみたいけれど、中が真っ暗だったらどうする……)

そんな不安に嘯かれながら恐る恐る覗いてみると、途中途中に穴が開いているのか思っていたほど真っ暗ではなかった。

(これなら大丈夫……)

そう思った途端にアタシの不安は薄れ、サルを見つけることが宝探しのように思えて楽しくなっていた。

入ってみると、細長い物の中は身動きが取れないほど狭くはなかった。

けれど、四つん這いにならないと進み難い高さではあった。

少し湿っぽくて、床に触れる手の平や膝がベタベタとして嫌な感じがする。

それでも？シャン……シャン……？と手招きするサルを探すことに頭がいつぱいだった。

少し進むと穴だと思っていた場所に到着。

切り抜かれた鉄板部分に無理矢理縫い付けられたような太い網が部屋に光を入れていた。

その網は数メートルおきに見える。

？シャン……シャン……？

継ぎ接ぎだらけのデコボコな世界で響く音。

それと一緒に

?カン……カン……?

上を歩く足音のような音がする。

その音はアタシを追いかけてくるかのように後ろからゆっくりと追
つて来る。

目の前には真っ直ぐと横に伸びた二つの分かれ道があった。
アタシは慌てて近くの横道を曲がったけれど、先は網があつて行き
止まり。

網の外に部屋が見えて止まった瞬間

さつき扉の前にいたフランス人形が覗くように顔を出した。

ダラリと両腕を出したかと思うと

?ガシヤン!! ガシヤン!!?

網を握り締めて無表情で激しく揺さぶり出した。

驚いたアタシは天井に頭をぶつけながら後ずさる。

急いで向きを変えて真っ直ぐ進もうとしたら

?カン……カン……カッカン!?

今度は前から聴こえてくる。

まるで楽しそうにスキップしているかのような音。

怖くなって、後ろ向きで来た道に戻ると

?ガシヤン!! ガシヤン!!?

光を入れていた真横の網からフランス人形。焦ったアタシは前から来る音を無視して通過！ 勢い良く進んだ先にも再び、フランス人形。

? シャン…… シャン…… ?

? カン…… カン…… ?

? ガシャン!! ガシャン!! ?

アタシをからかっているかのように、アチラコチラから音がする。パニツクになったアタシは、フランス人形のいる網を逃げないぐらい思いつきり蹴り続けた。

何回ぐらい蹴ったのだろうか……。

フランス人形がしがみ付く網は徐々に歪んで? バコン! ? と外れた。フランス人形と一緒に網は勢い良く吹っ飛んだ。

網の無くなった隙間から顔を出してみると、薄暗い大部屋ではなく外に繋がっていた。

とにかく外に出ようと這い蹲るように上半身を乗り出した瞬間、目が覚めた。

起きてすぐに『フランス人形の怖い夢を見た』と母に話したら『フランス人形が欲しい』と勘違いされて焦ったのを思い出します。

もう一つ。

【白い布に包まれた家】

そこは簡単に言えば壁の無い家だった。木造の骨組みを大きな白い布で下から包み込んでゆるく縛ってあるような家。

布の中は骨組みと床があつて、普通の家と同じように家具などが各部屋に設置されていた。

階段もあつたけれど二階部分は無くて、天井がとても高かった。

その家には優しそうなお爺さんとお婆さんが住んでいた。

二人ともニコニコ笑ってソファーに座りながらお話をしてくれたけれど

どんな話だったかは思い出せない。

お話を聞いている間、家を包み込む白い布は一度も静まることはなく、？バサバサ？と風に吹かれていた。

まるで風船のように膨らんだり萎んだりしながら揺れる布。

布が膨れる度に隙間から外がチラチラと見える。

布の膨らむ様子も風の音も強風に吹かれているぐらい激しく思えるのに、家の中は全く風を感じない。

夕方時間帯なのだろうか……。

白い布も家の中もキラキラしたオレンジ色に染まっていた。

どう夢が終わったのか思い出せないけれど、とても穏やかな夢だった。

【青い廃墟ビル】と【白い布に包まれた家】

どちらの夢も建物の中にいた。

だから、外観はわからないはずなのに、違う夢で並ぶ二つの建物を正面から眺めた時。

それぞれ前に見た夢と同じ建物だと確信した。

暗い曇り空の下。

赤いサビの目立つ青い壁のビルを見上げると、ヒビの入った窓から二体のフランス人形がへばり付くようにアタシを見下ろしていた。

(此処に入ったら、あの人形達のオモチャにされる……)

そう自分に言い聞かせながら視線をずらすと、風に膨らむ白い布が視界に入った。

緩やかに白い布で包まれた家。

屋根の三角部分には大きな結び目があった。

布が膨らむと隙間から家の中が見えたけれど、あのお爺さんとお婆さんが家の中にいたのかは確認出来なかった。

辺りは曇り空なのに【白い布に包まれた家】のある空間だけは夕方のオレンジ色に輝いていた。

【夕暮れの六丁目】と似ていて不思議だった。

結局、その時の夢はそのまま違う場所に行って目覚めたような気がする。

この夢を見て、自分が見る夢の世界の繋がりを強く意識するようになったと思う。

それにしても子供の頃から追いかける夢ばかり見ているなんて……

これも不思議。

【どこでもトンネル】

【どこでもトンネル】

それは【××ロード・天使と悪魔】に出てくる殺人鬼が通っていたトンネル。

その名前の通り、どこにでも通じている。

いや……。

「どこにでも」という言い方は違うのかもしれない。

正確には「いつ、どこで通じてしまうかわからないトンネル」の方がいいのかな。

不意に我が家の扉を開けると……学校の廊下を歩いていたら……

【どこでもトンネル】の中にいた。

そんな夢を何度か見たことがある。

一度入ってしまうと元いた場所には戻れない。

けれど

【どこでもトンネル】を抜けた先にあるのは【殺人ロード】

それは変わらない。

戻ること出来ず、先へ進むことも躊躇ってしまっイジワルなトネル。

【学校】

【アッチノ世界】には学校もある。

その学校は幾つもの建物をくっ付けたような巨大な学校。

小学校、中学校、高校とアタシが通っていた学校の校舎だと思う。

小学校に似ている部分は教室にも廊下にも誰もいない。

灰色のツルツルとした廊下を歩いて行くと、途中から茶色のフロアリングに変わる。

フロアリングの廊下は中学校。

廊下の変わり目には階段がある。

何回下りても同じ階に戻ってしまう階段。

幾度も挑戦して、下りてきた階段を何の気なしに上ってみたら、違う場所に出たことがある。

気紛れな階段なのだ。

中学校に似ている部分の廊下を歩いていると教室から声が聞こえてくる。

聞こえるけれど、教室の扉を開けると誰もいないことが多い。

でも、極まれに人が現れる時もある。

けれど、『此処で会えてよかった！』なんて思う相手との出会いは非常に少ない。

フロアリングの廊下を真っ直ぐ進むと、突き当たりになっている。

突き当たった横には階段があって、下りていくと左右と正面に分かれた廊下が続いている。

前にその階段を使った時、下りてすぐの場所に知らない男の人が立っていたことがある。

『危ないから、この階段は使ってはいけない』

アタシを見てそう言うところかになくなってしまった。

廊下を右に行くと先の見えない真つ暗闇。

その廊下を少しずつ進むと、徐々に床が砂利道に変わっていつて、いつの間にか【どこでもトンネル】に繋がってしまう。

【どこでもトンネル】の先は【殺人ロード】に出してしまうので、確かに危険な場所なのかもしれない。

反対の左側は学校というより病院のような場所に繋がっていた。まだよくわからない未知の場所。

残った正面は渡り廊下になっている。

その廊下はちよつと変わっていた。

普段はなんともない廊下なのに……

たまに廊下の一部がエレベーターホールになっている時がある。

【アッチノ世界】にあるエレベーターにも良い思い出なんて、ほとんど無いので遭遇したくない物の一つ。

渡り廊下を進むと、また階段が現れる。

その階段を上ると高校に似た場所に出る。

見たことのない吹き抜けと奇妙な形の廊下。

似ているけれど、現実とは違う校舎の景色に毎回、違和感を覚えてしまう。

わかり難くてセンスの欠片も無い図で申し訳ないのですが……図の
ような感じです。

> i 1 3 5 5 6 — 1 8 9 2 <

高校の校舎部分には人がたくさんいる。

図にある吹き抜けの周りや矢印の方向に続いている廊下にも生徒が
たくさん立っている。

文化祭をやったり、みんなでスポーツをしたり、学校らしい行事の
夢を見ることが多い。

敷地内には、この校舎の他にお嬢様学校みたいな校舎と寮がある。
校舎と寮の外観も生徒が着ている制服も白色ばかり。

建物の中は対照的な焦げ茶色の木造作りで、
アンティーク調の家具などが置かれている。
とてもお洒落な建物。

敷地内には他にも、森林に繋がっているとされる樹木の茂る広い
校庭。

スポーツ大会などの行事に使われていた大きな競技場。

室内に大量の落ち葉が敷き詰められている真つ暗な謎の体育館。

その落ち葉で出来た緩やかな丘を下ると、いつの間にか外の広場に
出てしまう。

何とも不思議な場所。

そんな学校には門が幾つかある。

正確な数と位置はまだよくわからない。

門を出て少し歩くと小さな駅があり、それに乗って移動する夢を見
ることがある。

校舎の窓から見えるのは都会の街並み。

校舎の門から見えるのは田舎の田園風景。

同じ敷地内にいるはずなのに、全く違う場所に思える。

それぐらい、コロコロと見える景色も変えてしまう……。

本当に気紛れな学校。

【墨色ワールド】

【アッチノ世界地図】の右上に【墨色ワールド】と呼んでいる一角がある。

【アッチの世界】には昼の場所、夕方場所、夜の場所、ちゃんと移り変わりのある場所　と色々ある。

その中で【墨色ワールド】は夜の場所。

此処一帯にある建物や街並みは、停電したかのように真っ暗。

丁度、昼間の場所と夜の場所が重なる一帯は建物の中で昼間の部分があったり夜の部分があったりする。

【墨色ワールド】の奥にある【停電病院】と【美術館】は窓から入る謎の光以外は全く電気が点いていなくて暗い。

昼間の場所に近い【博物館】と【時計塔】の辺りは少し違って、外は夜だけれど建物の電気は点いている。

暗い場所なので『怖い夢になりそう……』なんて思ってしまうけれど、意外にそんなことは無く不思議な体験も多い気がする【墨色ワールド】

【停電病院】

> i 1 3 5 5 3 — 1 8 9 2 <

【墨色ワールド】にある【停電病院】は名前の通り、停電したかのように真っ暗な病院。

ある日の夢はナースステーションから始まった。

深夜なのに看護師さんと二人で話していた。

『着替えてくるね』

看護師さんは友達なのかそう言うと懐中電灯を持って更衣室に向おうとした。

夜の病院……。

『一緒に行く！』

アタシは一人になるのが怖くなって、慌ててついて行った。

不意に振り返ると、出てきたナースステーションの電気が消えて真っ暗。

看護師さんに言おうとしたら、置いていかれそうなら随分先にいた。

アタシは小走りで追いかけた。

でも、看護師さんは全く振り向いてくれない。

『ナースステーションの電気が消えちゃったよ?』

後ろから叫んでみたけれど……

『……………そうなんだ』

あっさりな返事だけ残して、止まりもせずにスタスタと先へ行ってしまう。

それでも話しかけると一応は答えてくれる。

けれども振り向くことは無い。

(更衣室に行けば嫌でも顔を見て話せるだろう……………)。

そう思っただけで行こうとした瞬間

目の前の映像が真ん中からパンと切れて、パラパラと視界の下へ落ちていく。

まるでピン! と張った映画のフィルムをハサミで切ってしまったみたいに…………。

切られてパラパラと落ちていく目の先には真っ暗闇。

『このまま見ていたら、またいつものように可笑しな夢を見るところだったね。次はもっと良い夢を見られるようにしてあげる』

突然、凄いことを言い出す男の人の声が聞こえてきた。

そのまま違う夢を見た気がするけれど…………

全く思い出せない。

こんなことは初めてだったから、目が覚めた後も凄く不思議な感覚

に襲われた。

あの声はきつと黒羽根さんだろっ。

黒羽根さんのお話はまた後ほど……。

【美術館】と【時計塔】

【墨色ワールド】にある【美術館】も【停電病院】のように真っ暗。

ある日の夢は右側に窓が並ぶ細い廊下に立っていた。

月明かりのような光が窓から入って、廊下を照らしている。

窓越しから空を見上げて月は見当たらない。

街灯や建物からの光でもない。

何の光なのかわからなかった。

床も壁も天井にも朱色のペイズリー柄の絨毯が張り巡らされている。

廊下の左側には扉がたくさん並んでいた。

どれも奥まったところに扉がある。

絨毯のせいか扉の前に立つと、威圧的な感じがした。

扉を開けてみると小さな部屋があった。

部屋の壁も一面、廊下と色違いの絨毯になっていた。

正面には大きな窓が二つ。

何だか部屋の大きさは不釣り合いに思えるぐらい大きな窓。

その窓からも月明かりのような光が入っていた。

部屋の壁には、後姿の肖像画がたくさん飾られているのが見える。

奥に行くと扉があったので開けてみた。

先にはまた色違いの絨毯に囲まれた部屋。

大きな窓が一つ。

同じような後姿の肖像画が床に並べられていた。

その部屋の奥にも扉がある。

開けてみると、また色違いの絨毯と小部屋。

小さな窓が二つ。

(この部屋には肖像画が無いのかな……。)

見渡していると、上から小さな蜘蛛が糸を垂らしながら下りてきた。

そのまま上を見上げてみるとビツクリ!!

後姿の肖像画が天井にたくさん貼り付けてあった。

視線を戻すと正面にはまた扉がある。

何だかさつきよりも小さい気がする。

気になりつつも扉を開けてみると、また色違いの絨毯と小部屋。

小さな窓が一つ。

覗いてみると、入って左側の壁一面に後姿の大きな肖像画が描かれていた。

肖像画の周りには大きな額縁もちゃんとある。

正面にはまた小さくなったような扉。

恐る恐る開けてみると

またまたビツクリ!!

今度は正面の壁に肖像画が描かれていた。

窓は無い。

電気も見当たらないから暗いはずなのに、部屋の中がちゃんと見えている。

(窓も無いのに何でこの部屋は明るいんだろう……。)

それに気付くと気持ち悪い感覚に襲われた。

何よりも不気味だったのは正面に描かれている肖像画が後姿ではなく、ほんの少し横向きになっていたこと。

(このまま進んで行ったら、この肖像画が段々と向きを変えるんじゃない……。)

さっきまでそんなに怖くはなかったのに急に怖くなってきた。

それでも気になって、ドアノブを見つめながら扉を開けようか迷っていた。

(前にもこんな風にどんどん暗い場所に進んでいく夢を見た気がする。)

そう思った瞬間

【停電病院】で見た夢の映像が頭に浮かんだ。

(このまま行けば悪夢になるのかもしれない。)

すぐさま方向転換。

来た道を急いで戻ったアタシ。

最初に立っていた廊下まで出ると少しホツとした。でも、夢はまだ終わらない。

他の扉には入らずに、廊下を真っ直ぐ進んでみた。

十メートルぐらい歩くと、また奇妙な場所に出た。

廊下の先はヤドカリの貝殻みたいな形をした建物と繋がっていた。建物の形に合わせるように下へ伸びるスロープ状の通路。壁には正面を向いた肖像画がたくさん並んでいる。

花束や扇子を持っている女の人。

本を読んでいるお爺さん。

シルクハットや仮面を被る紳士淑女。

お城のようなケーキを眺める太った子供。

どの肖像画も物で自分の顔を隠すように描かれていた。

通路から下を見下ろすと、一階部分は殺風景で広く感じる。

真ん中には小さな椅子とテーブルが置いてあった。

肖像画を眺めながら一階部分へ向うと、通路の下には廊下と同じようにたくさん扉が並んでいた。

試しに一つ開けてみると、さっき入った小さな部屋が見える。

静かに閉めて、隣の扉も開けてみた。

でも、やっぱり同じ部屋があった。

(引き返さなきゃ……。)

そう思つて早歩きで通路を登ると さっき出てきた入り口が無い！廊下が見えるはずの場所は壁に変わり、影のように真っ黒な肖像画が飾られていた。

(ヤバい。閉じ込められた?)

ドキドキしながら他に出口は無いか辺りを見渡していると、椅子と

テーブルが目に入った。
二つは月明かりのような光に照らされている。
光の入ってくる上を見ると、大きな丸い穴が開いていた。
まるでヤドカリの貝殻の尖がっている部分を綺麗に切り落としたか
のような穴。
そこから夜空が見えていた。

通路は入り口があつた場所までしかない。
そこからじゃ届かない。

一階に戻り、椅子に座って悩むアタシ。
椅子やテーブルは固定されているのかびくともしない。

(高い場所……高い場所……)

テーブルに突っ伏して呟いていたら【××ロード：天使と悪魔】で
の映像が浮かんだ。

(そっか！ また跳んでしまえばいいんだ!!)

そう思ったアタシは穴の下に立って

(アタシは忍者……跳べる！ おサルのように……)

強く念じてジャンプ!!……跳べない。

(あの時の感覚をイメージしてみたらいけるかな……)

なんて思っただけ殺人鬼に追いかけている場面をイメージ。

?……コッソリ……コッソリ……?

(そうそう……ん?)

音のする方を見てみると、壁に変わっていた入り口が元に戻っていた。

けれど、出入り口の奥が何だか物凄く暗い。

暗いというよりも黒く見える。

奥を覗こうと背伸びをした瞬間 !!

?……ヒューン!! ドス!?

風を感じて後ろを振り返ると……

壁には見覚えのある細長い物が刺さっていた。

(これはもしかして……)。

?……コツン……コツン……?

真っ黒な暗闇から現れたのは緑色のモッズコートを着た殺人鬼。

その右手に持っていたのは、前にアタシを攻撃したボーガンのような武器。

『いや……いや……。アタシはイメージしただけで、ご本人さん登場なんて望んでないですよ。』

ブツブツ一人で呟いていたら

?ガチャリ……?

嫌な音がした。

チラツと見てしまったアタシ。

フードを深々と被り、肖像画みたいに顔の半分を隠しながらニヤツと笑う殺人鬼の口元が見えた。

笑ったままの口で男が？フーツ？と息を吹いて腕を構えた瞬間
壁に刺さった棒を蹴ってジャンプ！！

ブワツと跳びました！！

ブワツと跳んで、目の前にあつたお洒落な扉へ。

（アタシやれば出来る子じゃん……。）

なんて自惚れながら興奮していると

？コツン……コツン……？

また脚立で来られても困るので、近くの家屋根へジャンプ！

少し離れたところから外観を眺めてみた。

さっきの建物は外から見てもヤドカリのような形をしていた。

辺りは深夜のように暗くて、とても静か。

空を見上げると、暗さと明るさの綺麗なグラデーションになっている。
る。

（あのオレンジ色の方角に我が家があるはず……。）

そんな気がして明るい空を目指しながら、少しずつ進んだ。

途中、屋根の上から大きな時計塔が見えた。

(あの高さまで跳べるかしら……。)

突然、無謀な挑戦意欲に駆り立てられたアタシ。

近づいて……いざジャンプ!!……うーん! 届かない!!

下へ落ちると思った瞬間

?ドンツ!!??

どこかにしゃがみ込んだ体勢で着地。

痛むお尻をさすりながら恐る恐る目を開けてみると、よくわからない場所にいた。

風がビュンビュン吹いている。

どうやら、時計部分の下のはみ出た場所に着地したらしい。

受け皿のようなその場所から上へ跳んでみた。

天辺に近いところへ着地できたけれど、風が強くて怖い。

飛ばされないように細長い部分にしがみ付いていた。

美術館のある辺りとは違って、時計塔の周りにある街並みは街灯や建物の灯りがキラキラしていて凄く綺麗に輝いている。

(外国みたい……)

なんて見とれていたら

?……ヒューン!! カンツ!!??

文字盤の近くに何かが当たって落ちた。

息をつく暇も無くまた

?……ヒューン!! カンツ!!?

今度はアタシが立っているすぐ足元!

(なんだよ……。)

イラツとしながら何かが跳んでくる方を見ると、屋根の上から時計台を狙ってボーガンを構える殺人鬼の姿が　!!
思わずビククリして、しがみ付いていた細長い部分から腕を放してしまった。

仰け反るように落ちていくアタシ。

?バンツ!?

そのまま落ちた衝撃に合わせて、ベッドを叩くように飛び起きた。

【アッチノ世界】ではイメージも発言も単純なことではなく慎重にならなければいけないみたいです。

【マネキンショッピングセンター】： 逃走】

ある日の夢は下りのエスカレーターに乗っていた。
下りている途中で、見覚えのある風景が目に入った。

そこは【マネキンショッピングセンター】と呼んでいる場所だった。
名前の通り。お客さんも店員さんも全員、マネキン人形。
ガタガタと音を立てながら動いている。

マネキン人形達が行き交う階で降りると、遠くから明らかにマネキン人形ではない何かのアタシに向かって走ってくるのが見えた。
よく見ると人間の男の人だった。けれど、その顔は只事ではない表情をしている。

アタシは怖くなって、何も考えずに逃げ出した。

【アッチノ世界】で何かに追いかけられる夢を見ると毎回、追いつかれているような気がする。

特にマネキンショッピングセンターだとマネキン人形が邪魔になつて、すぐに追いつかれてしまう。

それにマネキン人形にぶつかつたりでもしたら、敵だと思われてマネキン人形まで追いかけてくる。

そう思っても反射的に逃げてしまうチキンなアタシ。

思ったとおり。

振り返って見てみると男の人は物凄い速さで近づいてくる。

逃げようとしたら、慌てた勢いで目の前にいたマネキン人形に激突してしまった。

崩れるようにマネキン人形が倒れた瞬間
アタシに無関心だったマネキン人形達が一斉に振り向いて男の人と
一緒に追いかけてきた。

捕まりそうになったアタシは、近くにあった扉を開けて外に逃げた。
出た先は、歩道橋みたいな通路になっていた。

側にあつた網状の大きなゴミ箱を扉の前にずらして一呼吸。

上を見上げると空が暗い。

前にもお話したように【アッチの世界】には昼の場所、夕方の場所、
夜の場所がある。

マネキンシヨップिंगセンターは昼の場所と夜の場所が重なる位置
にあるので、同じ建物の中で昼の場所もあれば、夜になっている場
所もある。

【墨色ワールド】に入り込んでしまったら、逃げられなくなりそう
なので避けたい。

(どっしりよう。)

モジモジと考えながら歩いていると……

?ガシャン! ガシャン!?

扉を揺さ振る音が響く。

考えるのを止めて、とにかく真っ直ぐ走ってみた。

腕を力一杯振って走っていると、正面の空が薄っすら明るいのに気
がついた。

(このまま明るい方角に向かったら、夜の場所から抜けられるかも

しれない……。)

そう思って目の前にあった階段を駆け下りた。

下りきったところで止まってみたけれど、追いかけてくる足音はまだ聴こえてくる。

我武者羅に走って……走って……

目の前にあった細い道に入ると、いつの間にか昼の場所にいた。でも、そこは【迷路街】にある【商業ビル地帯】だった。

迷路みたいに道が入り組んでいて迷う。

けれども、むやみやたらに歩くと【殺人ロード】に出てしまいそうで怖かった。

(極力、移動しないほうがいい。)

挙動不審になりながら少しずつ進むと、また見覚えのある場所を見つけた。

そこは別の夢で入ったことのあるゲームセンター。

(此処なら見つからずに逃げられるかもしれない。)

期待を胸に自動ドアを開けてみた。

自動ドアは外側と内側に二つある。

入ると内側の自動ドアの前には謎のゲーム機が置かれていた。

その横にはバーコードヘアにメガネ、小太りで白のタンクトップに短パンの完全に家着スタイルなオジサンが座っていた。

扉の前にゲーム機があるから中には入れない。

『前と違う……』

『時間が経てばなんでも変わるさ。ゲームやってくの？』

アタシの呟きに答えながら、タバコを取り出し椅子から立ち上がるオジサン。

自動ドアの前に置いてあるゲーム機は昔のアーケードゲームに似ていた。

椅子に座って覗き込むと、画面には漢字のような文字が書かれた札とコインのような丸い札が並べられていた。

麻雀のようにも見えるけれど、麻雀のルールを知らないアタシ。

(アツチノ世界にあるゲームなのかしら……)

始め方がわからず、ボーっと見ていたら……

『お姉ちゃん！もしかしてやり方がわからないのかい？俺が横で教えてあげるから、まずお金を入れてちょうだい』

オジサンがタバコを吸いながら指差す場所を見るとコインを入れる穴が開いていた。

ポケットを探ってみてもお金なんて無い。

諦めてお店を出ようと席を立った瞬間 誰かがお店に入ってくる影が見えた。

さっきの人だと思ったアタシはゲーム機の後ろにあった暗幕カーテンの中に隠れた。

入ってきたのは男の人ではなく、若いカップルだった。

オジサンは何事も無かったかのように振舞う。

『よし！ 勝つぞお！』と張り切る彼氏。

彼女とゲームの話をしながら始めるのかと思ったら突然、ロボットのように一瞬動きが止まった。

携帯を取り出して何かを見ている。

彼女にも携帯を見せて、辺りを見渡す彼氏。

『ねえ、オジサン。此処に隠れているやついない？ 見つけたら連れて行かなきゃいけないんだけど』明らかにアタシが隠れているのをわかっている顔つきで彼氏は言い出した。

（此処の住人の思考と違って、みんな繋がっているのかしら……このままじゃバレるな。）

もうダメだとパニックになっていたら突然 静かにしていたオジサンが誤魔化しだした。

（あれ？ 何で誤魔化してくれているんだろ……）

なんて考える暇も無く、また違うカップルが入ってきた。

先客を見て驚いた顔をしたと思ったら、後から入ってきたカップルも一時停止。

最初のカップルと同じように携帯を見て、今度は何も言わずにアタシが隠れている暗幕に近づいてきた。

（見つかる……！）

そう思った瞬間に目が覚めた。

あの時、なんでオジサンは誤魔化してくれたのだろうか。

【江戸屋敷】：テントウ虫と七三分け【（前書き）

【迷路街】の近くに【江戸屋敷】と呼んでいる建物がある。

そこは【マネキンショッピングセンター】と同じように昼の場所と夜の場所が重なる位置にあるので、同じ建物の中や外で昼の場所もあれば、夜になっている場所もある。

建物の外観は時代劇に出て来そうな長屋。

ある日の夢では忍者のように屋根の上を走り、屋根裏の中で隠密行動。

またある日の夢では侍のように刀を振り回し、勇敢に闘っていたり

……

時には遊女になって男の人の相手をしていたり……

【江戸屋敷】での夢は、恥ずかしくなるぐらい昔風な設定が多い。

【江戸屋敷　：　テントウ虫と七三分け】

ある日の夢は江戸屋敷の二階にいた。

壁も床も焦げ茶色をした木造の六畳ぐらゐの部屋。

部屋には黒ブチメガネをかけた七三分けの和服姿な男の人達が大人
数で座っていた。

（今回はアパートのような設定なのだろうか……。）

開いている部屋の引き戸から、廊下に沿って幾つも並ぶ同じような
引き戸と下りの階段が見える。

『此処は男ばかり。むさ苦しくて何にも無い所だから、お嬢さんに
はつまらないでしょう？　酒が飲めるなら騒ぎたいけれど、まだ
昼間だしなあ。そおだ！　此処の裏に飴やカンザシが売っている店
があるから行ってみるかい？』

近くにいた男の人がアタシに声をかけてきた。

（カンザシ？　時代を感じるわねえ……）

なんて思いながら男の人を見ていたら、彼は立ち上がって『ほら！
此処から見えるんだよ！』と言いながら勢い良く窓側の障子を開
けた。

その瞬間

?ブーンッ!?

物凄い羽音と共に人の顔ぐらいありそうな巨大なテントウ虫が三匹、外から入ってきた。そのままアタシに向かって飛んでくる!!

男の人達が本や座布団で追いついてくれる間に障子を開けた男の人がアタシの手を取った。

『外に出よう!』

そう叫ぶと階段を駆け下りた。

外に出ると側に自転車が置いてあった。それもまた、レトロなデザイン。

『さあ! 乗って!』

普段なら荷台の椅子にまたいで座るくせに、今回は何だか女学生な気分になって、横向きに座っちゃったアタシ。

二人乗りで一本道を進んでいくと、辺りが段々と日差しで真っ白になっていく。

凄く眩しくて目を開けていられなくなったアタシは、男の人の背中に顔を埋めていた。

少しすると、石の跳ねる音や乗っている感覚で砂利道を走っているのがわかった。

そっと顔を上げてみると、目の前には見覚えのある坂道が見えてきた。

それは【神社公園】の奥にある木のトンネルに囲まれた広い坂道。

緩いのか急なのかわからない下り坂。

【神社公園】の夢を見た後から、この坂は色んな夢に時々出てくる

ようになった。

坂を下りると【大草原】や【学校】の近くにある【森林】に繋がっている。

（このまま【大草原】か【学校】に向かうのかしら？）

そう思っていたら、トンネルの木の葉が顔にベチベチ当たって思わず顔を伏せた瞬間
目が覚めて起きてしまいました。

あのまま目覚めなかったら、彼はアタシを何処に連れて行くつもりだったのだろう。

【写真】

【アツチノ世界】の夢かわからないけれど、不思議な夢を見た。

夢の始まりは突然、世界が終わってしまうような設定。

何かが襲ってきているのか……地震が起こったのか……
バラバラとアチラコチラ崩れていく。その光景をアタシは逃げずに
じっくり見ていた。

けれども何故か突然、知っている写真家さんに会わなきゃいけない
気がして街の中を探し始めるアタシ。

やっとの思いで一人の写真家さんに巡り会えたアタシは何を思った
のか、その写真家さんに『一秒でも良いからアタシよりも長く生き
て!』と言い寄った。

『何故?』

凄じい勢いで詰め寄ったのに、写真家さんは慌てることもなく静かに
聞いてきた。

『最後のアタシを貴方に撮って欲しいから』

アタシは写真家さんの手を握りながらとんでもないことを言い出し
てしまう。

無茶なお願いをしたのに、その写真家さんは怒りも驚きもせず溜

息混じりに笑った。

そしてアタシを見つめると、落ち着いた様子で『なるほど。じゃあギリギリまで生きなきゃね』と承諾して一緒に何かから逃げてくださいという可笑しな夢の終わり方だった。

こんなアタシの無茶なお願いを聞いてくれる物好きな写真家さんなんて現実にいるのだろうか……

なんて悶々と考えてしまうような夢でした。

【ガラクタ山】と【廃墟村】

【アッチノ世界】にある【追われる右ロード】を道形に逃げていくと【ガラクタ山】が現れる。

ガラクタ山は不法投棄された家具や大型家電製品が山になったような場所。

家具や家電製品以外にもバスタブだったり、シンクだったり、家に備え付けてある大きめの物が柱のように積んである。

【青い廃墟ビル】の廊下と同様に、積み重ねられている物乗り越えたり、下を潜ったり、間を縫って進まなければいけない。

【ガラクタ山】を抜けると、その先には【廃墟村】と呼んでいる場所に辿り着く。

そこには【青い廃墟ビル】みたいに使われていない家や店舗のような建物がたくさんある。

どれも屋根や壁が崩れ落ち、半壊したボロボロの建物ばかり。

中を覗いてみると、どの建物にも家具や生活用品は見当たらない。

まるで【ガラクタ山】に置いて来てしまったかのよう……。

【ガラクタ山】とは反対の道を道形に進むと、【青い廃墟ビル】や

【白い布に包まれた家】に繋がっている。

【廃墟村】は夕方の場所。

けれども、【夕暮れの六丁目】のように明るいオレンジ色の風景ではない。

【墨色ワールド】に近いせいなのか、空も空間もセピア写真のような濃い夕暮れ色をしている。

壊れた建物ばかりで誰も住んでいないのに、【廃墟村】は何故か寂しさを感ぜない不思議な場所。

【屋根のない洋服屋】

【廃墟村】から離れた場所に、【白い布に包まれた家】と似たような外観のお店がある。

それは【屋根のない洋服屋】

ある日の夢は曇り空の下、見知らぬ住宅街の中を歩いていた。

通り過ぎた視界の端に気になる建物が

振り返ってよく見てみると、それは屋根だけが綺麗に無くなっている小さなお家だった。

近づいて中を覗いてみると、どうやらお店のようだ。

中には色取り取りのワンピースやTシャツ、カッコイイ靴や可愛いパンプス……。

上手く言えないけれど、とにかく洋服や靴をメインに色々な雑貨が陳列されていた。

どれも素敵なお品ばかり。思わず、窓にへばり付くように見ているアタシ。

『宜しかったら、中へどうぞ』

突然、後ろから声をかけられて驚いた。

反射的に振り返ると、インカの民族帽子のような物を被った若そう

なお兄さんが立っていた。

『ちよつと外に出て戻ったら、店の窓に大きなヤモリがいるのかと思つたよ』

お兄さんは笑いながらお店の中に入れてくれた。

お店の中に入ると、更に様々なジャンルの物が目に入る。
小さなバーカウンターもあって、お兄さんはカウンターの内側で持っていた荷物を整理していた。

『お好きなように見て、ゆっくりしていつてよ』

素敵な笑顔で言われたので、アタシはお店の中をウロウロ……。

『お腹は空いていない？ 良かったら、これ飲んで』

お兄さんがカウンターに何かを置いた。
席に座つて見てみると、黒いマグカップの中にチャイのような香りのする飲み物が入っていた。

天井を見上げると、やっぱり曇り空が見える。

『頂きます。此処はお兄さんのお店なんですよね？ どうして屋根が無いんですか？』

飲み物を飲みながら、気になっていたことを聞いてみた。

『そう。此処は僕のお店だよ。屋根が無いのはそれが僕のお店だからかな』

うーん……理解できたような……出来ないような答えを返された。

『でも、雨が降ったりしたら、お店の中にある物が濡れて駄目になつたりしないんですか？』

お兄さんは少し首を傾げながら何度か頷いた。

『この場所は、僕がこんなお店を設けることを許してくれたんだ。だから、此処はそうならないから大丈夫』と更に素敵な笑顔でまた難しい答えを返された。

『要するに雨が降らないってことですよね？ それにしても、置いてある物はジャンル問わずなんですね……』

『そうとも言えるね。僕のお店には服とか靴とか……。後、服飾関係のちよっとした雑貨なら何でもあるよ！ 何でもね』

嬉しそうに笑いながら話すお兄さん。

『何でもって……凄いですね』

正直、半信半疑なアタシ。

『信じていないでしょ？ それを叶えてくれる物があるんだよ。これを見てごらん』

お兄さんはカウンターから出て、お店の奥にある大きなクローゼットの前に立った。

壁の中に、はめ込まれるように置かれている大きな白いクローゼツ

ト。

お兄さんがゆつくりと扉を開く。

中が見えた瞬間、アタシは驚いてしまった。

正面から見ると、普通のクローゼットなのに扉の向こうは、広いウオークインクローゼットになっていた。

中に入ると、パーティーなどに着ていきそうなフォーマルなワンピースや男性物のスーツ、アクセサリーに靴やバッグなど、色々な物が並べられていた。

ふと見上げると、クローゼットの中には天井があった。

気になったけれど、聞いてもまた難しく返されそうだったので触れないようにした。

『一度、外に出てこっちに来て』

中には入らずにアタシの様子を見ていたお兄さんが小さく手招きをする。

クローゼットの外に出てみると、お兄さんはクローゼットの横にある取っ手みたいなポールを掴んだ。

掴んだ腕を左に動かすとクローゼットが動いた。

そのまま、回転本棚のように回転した瞬間

奥から違うクローゼットの扉が現れた。今度はテカテカした真っ赤なクローゼット。

お兄さんが扉を開けると中には革ジャンやシャツ、カラフルなワンピースに大振りなアクセサリーなど……ロカビリーな物ばかり陳列されていた。

『ほら！ 凄いでしょ！ キミもやってみる？ 欲しい服とかあるなら、そのことを考えながら回してみて』

そう言われて悩むアタシ。

(最近、エスニック系の服が気になるかな……)

なんて思いながら、恐る恐るクローゼットを回してみると
今度はアジアン風なクローゼットが出てきた。

『開けて中を見てごらん』

腕を組んで自慢げな顔で見つめるお兄さん。

扉を開いてみると、中にはエスニック系の服やアジアン雑貨などが
たくさん並んでいた。

『なんで……』

『欲しい物があつたかな？ このクローゼットはね、相手の欲しい
物や似合う服を見つけってくれるクローゼットなんだ。だから、何で
もあるんだよ』

お兄さんは興奮を抑えるかのように静かに説明してくてた。

『それは凄い……』

驚きのあまりアタシはそれしか言えなかった。

『そんな素直に驚いてくれてありがとう。この中に何か欲しい物が
あつたらあげるよ』

夢であつても嬉しいお言葉。

確実に貰うつつもりで張り切ってクローゼットの中に入った瞬間
目が覚めてしまった。

ああ。なんてタイミングの悪い目覚め。

こんな悔しい思いはしましたけれど……

【屋根のない洋服屋】は、また行ってみたいと思えるアットホーム
な場所です。

【宿泊施設】

【屋根のない洋服屋】の近くに、夢によく出てくる【宿泊施設】がある。

洋室だったり、和室だったり、時には近未来な雰囲気のある部屋も出てくる。

その中でも、高級な部屋と普通の部屋と微妙な部屋と色々あるけれど……

この宿泊施設は毎回、修学旅行みたいな設定で登場することが多い。帰る寸前で荷物を整理している夢。

到着したばかりで荷物を出している夢。

他には宿泊施設のどこかにある大きなお土産売り場で買い物をしている夢も多い。

いつか見た夢では、従業員しか入れないような場所に迷い込んだことがある。

階段を下りた先は地下なのか、窓も無い薄暗い場所に辿り着いた。左右には、壁も床もクリーム色の先の見えない廊下が続く。

右側には厨房があるみたいで、白い服を着てコック帽のような物を被った人達が忙しそうに出入りをしていた。

反対の左側は奥の方が真っ暗で何があるのかわからない。

体を乗り出すように厨房の中を覗いていると、一人のおジサンと目が合った。

『見たな……』

オジサンが一言呟いた瞬間、辺りにいた人達が一斉にアタシを見た。一瞬にして、この場には不味い雰囲気が変わってしまった。逃げなきゃ捕まる気がして、下りてきた階段を急いで駆け上がった。

(とにかく部屋に戻ろう。)

そう思って上った階に出ると、目の前にはさっき逃げてきた地下の廊下が……。

視線を感じて視線をずらすと、さっきと同じオジサンと目が合う。また慌てて階段を駆け上がり、静かに覗いてみると……やっぱり同じ廊下とあのオジサンがいる。何回、上っても同じ階に戻ってしまう。

(前にもこんなことあったな。なんだっけ……。)

考えていたら思い出した。

【学校】での夢の中で、階段を下りていて同じようなことがあった。その時は何度も何度も階段を下りてみて、下りてきた階段を何の気なしに上ってみたら違う場所に出た。

それを此処でも試してみようと思って何度か階段を上って、ふらつと下りてみた。

すると、突然エレベーターが現れた。小さな窓のある銀色のエレベーター。

(これで上の階へ行けばいいんだ！)

そう思って一つしかないボタンを押すと、ゆっくりと扉が開いた。中へ入ると、階数の書いていないボタンがたくさん並んでいた。

とりあえず一番上のボタンを押してみると、スムーズに上へ進んで停止。

でも、扉は開かない。

小さな窓を覗くと、降りたい階が見える。

(どれかボタンを押したら開くかもしれない……。)

そう思ったけれど、他の階がどんな場所かわからない。

怖くてボタンが押せないチキンなアタシ。

待てども……待てども……扉は開かない。

結局、この時は何も出来ないまま目が覚めるまでエレベーターに閉じ込められていました。

宿泊施設にいる夢を見たら、あまり出歩かないほうが良いと思います！

【巨大団地】

【宿泊施設】と【屋根のない洋服屋】の間に【巨大団地】と呼んでいる場所がある。

此処は他の場所に比べて夢に出てくる頻度がかなり少ない。

だから正直、団地なのかもわからないぐらい印象が薄い場所。

一番記憶に残っている夢の中で、巨大な団地のように思えてから【巨大団地】と呼ぶようになった。

その時の夢は、現実にいる友達と一緒に過ごしていた。

【アッチノ世界】では仕事仲間だったようで、仕事の話しながら歩いていた。

『私の家、この近くだから寄っていかない？』

突然、友達が言い出すので驚いたけれど、せっかくなので行ってみることにした。

ついて行くと、角張った巨大な建物に辿り着いた。

濃い灰色で横長、まさに団地。アタシはそう思った。

『今日はお父さんいるかも』

なんて少し照れながら、階段を上る友達。

友達の話半分聞きながら、アタシは別のことを考えていた。

それは、今自分のいる世界が夢の世界だと気が付いて、そうはつきりと気付いた自分に驚いていたから。

この夢を見た頃はまだ夢の中で気付けることは少なく、目覚めた後に【アッチノ世界】の夢を見たと感じることが多かったので……
辺りを見渡しながら考えていたら、いつの間にか友達の家の前まで来ていた。

『ただいまあ！ お客さん連れてきたよ』

玄関を開けた先で友達が叫ぶと、奥から男の人が出てきた。
思いつきり部屋着スタイルで……。

『やだあ！ やっぱりお父さんいたんだ。その格好恥ずかしいよ』
と怒る友達。

『ごめん。ごめん。お客さんが来るとは思わなかったんだよ。どうも、父です』

友達のお父さんは乱れた髪の毛を整えながらアタシに会釈した。
現実で友達のお母さんとは会ったことがあるけれど、お父さんは見たことがなかったので不思議な感じがした。

アタシも会釈を返すと、笑っていた友達のお父さんはアタシの顔をじーっと見て

『娘とは何でお知り合いに？ どういう関係なんですか？』と矢継ぎ早に聞いてきた。

まるで娘の男友達に質問しているかのように……。

此処が夢の世界だと気付いたアタシは夢の世界の人に現実のことを話したらどうなるのか試したくなった。

『初めまして。 ちゃんとは現実の世界では同級生なんですけど、

夢の世界だと仕事仲間らしいです』

こんな感じで言ってみた。

それを聞いた友達とお父さんは、驚いた顔でアタシを見つめる。

少し沈黙が続くと、突然お父さんが『何を可笑しなこと言い出すんだ！！ 怪しい奴め！！』と怒鳴りながらアタシに掴みかかるようにしてきた。

友達が力尽くで止めている隙に、アタシは階段のあった方へ走った。

『待て！！！』

後ろから声がしたので振り返ると、お父さんが裸足で追いかけてきた。

急いで階段を下りようと思ったけれど、ふと……

(これって夢なんだから飛び降りても大丈夫なんじゃ?)

いつかの夢のように思ったアタシ。

下を覗くと、三階ぐらいの高さ。黄緑色した芝生が見える。

見ている間にお父さんが真後ろに迫った瞬間、ブワツと飛び降りてみた。

夢の中だからか、音も無く着地。

(やっぱり大丈夫だった。)

そう思いつつも、正直怖かった。

『おい！ 飛び降りたぞ……』

焦っている声がかから聞こえる。

ちゃんと着地が出来たことにホッとしたアタシは、振り返ることも無く巨大団地から出た。

そのまま、近くを探検して見つけたのが【屋根のない洋服屋】でした。

あのまま、余計なことは言わずに友達の家にお邪魔していたら【屋根のない洋服屋】には出会えなかったのだろうか。

【三途ノ川】

この夢は【アッチノ世界】とは違う気がします、不思議な夢だったので載せたいと思います。

三、四日間ほど、三十九度の熱にうなされている時がありました。そんな時に見た夢。

始まりは見知らぬ場所に立っていた。
見上げた空は綺麗なピンク色をしていた。

（体が熱いな……。）

フラフラしながら砂利道を歩いていると、目の前に川が流れていた。
流れる水は紺色のような色をしている。

川を眺めていると風の吹く音が聴こえてきた。
髪もなびいているのに、何故か全く風を感じない。
不思議な感覚。

辺りには誰もいない。

（あの川に入ったら、冷たくて気持ち良さそうだな……誰もいないし……。）

そう思って勢い良く川の中に入ってみると、氷水のように水が冷たい。

その冷たさが何だか不気味に思えて、急に川から出たくなった。

目の前を見ると、向こう岸は日陰で物凄く寒そうだった。

（砂利が冷たいだろな……。）

身震いしながら歩いてきた方を振り返ると、真夏のような陽射しが地面を照らしていた。

（あっちで日向ぼっこして温まろう……。）

そう思って、戻るように川を出ると目が覚めた。

この夢を見た当時は、あまり気にならなかったけれど……
今思うと、あれは三途の川だったのではないかとドキドキしている
アタシです。

【遊園地&プール】と【研究所】

【アッチノ世界】には、ゲームセンター以外にも遊べる場所はちゃんとある。

それは遊園地とプール。

その二つは一体型の施設になっている。

遊園地のテーマは【アッチノ世界】

【アッチノ世界】に出てくる場所をパロディーに模したアトラクションが設置されている。

問題を解きながら【学校】の中を進むジェットコースター。

【黄色いサル】を何匹倒せるか挑戦できるシューティングゲーム。様々なお土産が売っている【マネキンショッピングセンター】

【鏡越しの双子】のようにセピア色の記念写真が撮れたり、美味しいロールケーキが食べられたり……

他にも、もっとたくさんあるとは思っけれど、アタシはまだ全部を試したことがない。

遊園地とプールのある場所には、更に小さな【アッチノ世界地図】を模したプールがある。

【どこでもトンネル】のウォータースライダーや【墨色ワールド】の中にある真っ暗なプール。

遊んで楽しむのはいいけれど、夢中になり過ぎて周りが見えなくなってしまうたら御用心。

いつか見た夢の中で目撃したことがある。

『 がいなくなった』

プールで遊んでいる人達が騒いでいた。

気になりながらも、ウォータースライダーの階段を上ったアタシ。滑り終えて辺りを見渡すと、アタシの前に滑ったはずの人がゴール地点にはいなかった。

更に気になって、もう一度ウォータースライダーを滑ってみると、途中で軌道が変わって、さっきのゴール地点とは違う場所に出た。

今にもペンギンが出てきそうな、水族館みたいな広場。

水の引いた場所にはウォータースライダーで連れて来られた人達がわらわらと立っていた。

その先で全身水色の防護服を着た人達が歩き回っている。

小さな電子辞書のような物を持った防護服の人が、連れて来られた人達の何かをチェックしていた。

それが通ると、メガネケースのような形をした大きな容器が次から次へと用意されていく。

みんな動揺はしているけれど、不思議なことに誰も抵抗はしない。

連れて来られた人達は一人ずつ立った状態で容器に入れられ、流水プールみたいな場所に浮かべて順に流されていく。

どこかに運ぶのか、流された先にはトラックが待機していて、どんな容器を積んでいく。

何処に行つて何をされるのかわからない状況。

何が何でも絶対に捕まりたくはないアタシは、さり気なく影の方にフェードアウト。

物陰に隠れながら、この場からどうやって逃げようか考えていた。

ウォータースライダーを滑って此処に辿り着いたのだから、最初にいたプールには簡単には戻れない。

（容器を運ぶトラックがあるということは、外に通じている場所があるはず……）

そう思ったアタシは、トラックの向いている方向に全速力で走ってみた。

夢の中なのに外を裸足で走っているのが凄く伝わってくる。

少し走ると、一階部分が突き抜けになっている巨大な建物が現れた。

全体像がイメージできないくらい大きな建物。

その一階部分には防護服を着た人とオレンジ色のつなぎ服を着た人達が、散らばって何か作業をしている。

アタシの格好は水着……。

こんなじゃ目立ってすぐに捕まってしまう。

慌てて近くにあった大きなポリバケツの裏に隠れてみた。

ふと見上げると、ポリバケツと蓋の間にオレンジ色の布が挟まっている。

蓋をそつと開けてみると、グチャグチャに脱ぎ捨てられたつなぎ服が詰め込まれていた。

つなぎ服を取り出すと下には白いキャップも入っていた。

詰め込まれていたつなぎ服のサイズは少し大きかったけれど、その場ですぐに着替えてキャップを深めに被り、何食わぬ顔で歩くアタシ。

突き抜けた部分の床には、黄緑色のスライムのような物がアチラコ

チラにへばり付いている。
他にもよくわからない毛の束や破片などが転がっていて気持ち悪い。
出入り口では大量の檻が積まれたトラックが絶えず出入りしていたり、防護服の人が金属の筒を運んでいたり……映画に出てくる研究所のような雰囲気だった。

見渡しながら歩いていると、防護服を着た人がこっちを向いている。防護服のせいでアタシを見ているのか確認できない。思わず、不自然に顔を伏せてしまったアタシ。
足元は裸足。

(裸足は不味いよねえ……)

そう思った瞬間

『おい！ キミ！』

やっぱり声をかけられた。

その途端に、振り向きもせずダッシュ！

『捕まえろ！』

怒鳴り声が後ろから迫ってくる。

アタシは外へ出ると、そのまま真っ直ぐ走った。

少し進むと、高さの違うビルが目の前にたくさん現れた。

それを見て【商業ビル地帯】だと思った。

(此処ならどうにか逃げ切れるかもしれない……)

そう思って【商業ビル地帯】の中心部分に向おうとした瞬間

聴こえてくる足音が、さつきと違つことに気が付いた。

息を呑んで振り向くと、後ろには見覚えのある人型ロボットが……

(殺人ロードでもないのに……なんでよ!!)

【××ロード：危ない隠し芸】の時、ロボットの体は白色だった。けれども、何故か今回は黒色。素敵な色違いでご登場。

(製造元はあの研究所……?)

そんなことを考えながら、とにかく走る。

今回もまた、あのサーベルが出てくると思ったアタシは、少しでも逃げ込めそうな場所を探しながらビルの路地を何度も曲がった。

細い路地を見つけて入ろうとした瞬間　　何かに足を？まれて、前へ倒れるように転んでしまった。

足首を見ると黒い鎖が巻かれている。その先には黒色の人型ロボット。

『色違いは性能も違つんですか!!』

なんて一人で叫びながら、もがいていると、裸足だったお蔭か鎖からスルツと足が抜けた。

そのまま犬のような体勢で駆け出すと、肩をぶつけながら細い路地を突き進み、転がるように抜け出たアタシ。

すぐさま後ろを振り返ると、黒色のロボットは停まったまま、路地の入り口の前で立っていた。

(通れないなら飛んでくるかもしれない。急いで逃げなきゃ……)

そう思つて前を向くと、目の前には恐ろしい【殺人ロード】があった。

何度も路地を曲がりすぎて辿り着いてしまったのか……
はたまた【殺人ロード】の方から出向いてくれたのか……
どちらにしても最悪な状況。

慌てて来た道を振り返ると、路地の入り口にいたはずの黒色のロボットはアタシの真後ろに立っていた。

驚きのあまり、座ったまま後ずさるアタシ。

? カラン……カラン……?

何かが落ちたような音がして視線をずらすと、手元にはまた見覚えのある白い物体が……。

ゆっくりと上を見上げると陽射しに光る白色のロボットが見下ろしていた。

左腕のサーベルを二、三度回すように動かしながら、アタシに向けて振り下ろした瞬間

汗だけで目が覚めました。

毎回、追われて……襲われて……悪夢ばかりなアタシ。

この夢は色んな意味で恐ろしい繋がりを見せてくれたような気がします。

もしプールで遊んでいる夢を見たら、神隠しにあわないように気をつけてください。

【研究所：白色と黒色の生産工場】

【研究所】の怪しい場面を目撃してから暫く経ったある日の夢。

抹茶色に怪しく光る廊下に立っていた。
建物の中は窓が一つも無くて薄暗い。

アタシは何か隠密行動をしているのか、スパイ映画やSF映画を思わせるようなピツタリとしたスーツにブーツな出で立ちだった。
手にはオモチャみたいな光線銃。

光線銃を構えながら格好良く奥へ進むと、またSF映画のような光景が

目の前には上下左右とも吹き抜かれた、先の見えない空間が広がっていた。

見えているのは、自分の立っている側の壁と正面にある壁だけ。
壁には緑色の液体の入った細長い容器が半分埋め込まれた状態で綺麗に並んでいる。

何か移動する乗り物があるのか、空間には細いレールのような物が所々に設置されていた。

慎重にレールの上を歩いて壁に近づいてみると……
それは、前回のプールの夢で目撃してしまったメガネケースのような容器だった。

中を覗いた瞬間、アタシは絶叫しそうになった。
連れて来られた人達が中に入っているのかと思ったら、寝かされて

いたのは人間ではなく、前回の夢にも登場した白色と黒色の人型ロボットだった。

見える限りの壁一面にオセロのように並ぶロボット。

（あの人達が殺人口ロボットに……。）

また知りたくも無い裏側を知って驚いていると

?ガシャン……ガシャン……ガシャン……?

自分が歩いてきた廊下の方から音がする。

警戒しながら見ていると、奥からヌイグルミのような物体が三体出てきた。

近づいてきた物体は、シンバルを持ったサルのおモチャだった。

（またシンバルのサル……。）

けれども、今回のサルは黄色い毛ではなく焦げ茶色をしていた。それにサイズがオラウータンのように大きい。

?キーンツ! キーンツ!?

?ガシャン! ガシャン!?

やかましく騒ぎながら近づいてきた。

お尻の下にローラーが何か付いているのか、動くのが速い!

アタシは急いで手に持っていた光線銃をサル達に向けて撃った。

勢い良く何かが出るのかと思ったら、何も出ない……。

せめてピロリ口音が鳴ってくればいいのに、電池が切れたオモチヤのように鈍い音が小さく聴こえてくるだけ。

『この役立たず!』』

使えない武器にイラツとしたアタシは光線銃をサルに投げつけて、細いレールに飛び移りながら下へ向って逃げた。数段下りた所で上を見上げると、サル達はいなくなっていた。

(さすがにレールは走って来られないか……。)

なんて思っていたら

?ガシャン! ガシャン!?

シンバルを叩きながらサル達が横から飛んできた! 背中にはプロペラのような物が激しく回っている。

(なんでもあるなあ……。)

ボヤキながら辺りを見渡していると、さっき立っていた場所と同じような入り口を見つけた。

そこへ急いで入ると、後ろからサル達が迫ってきた。振り返ると前から大群のサル達が……。

(挟まれた!)

ジタバタしていたら、足元に丸い穴が開いているのに気がついた。覗いてみると、中は滑り台のようになっている。

(物凄く嫌な感じがするけど仕方が無い……。)

なんて思いながら穴の中を滑って逃げてみた。

?ブワツ?と勢い良く飛び出ると、物凄く広い場所に辿り着いた。大きな物ばかり置かれている。

柱に思えた物体は、よく見ると巨大な椅子とテーブルだった。

天井には、傘付きの照明がぶら下がっている。

傘の中には、灯りの小さな裸電球。

テーブルの近くはキッチンになっているのか、巨大なコンロと赤いやかんが見える。

団地やアパートにある部屋を連想させるような場所だった。

部屋にある物全てが巨大だから、まるで自分が虫や小人になってしまったみたい。

辺りを見渡してみても、自分が何処から出てきたのかわからなかった。

脱出できそうな場所を探しながらウロウロしていると、キッチンの換気扇の横にある小さな窓を見つけた。少し開いている。

(あの窓から外に出られるかな……。)

出られそうな気がして、窓の近くにあった戸棚をよじ登ってみた。途中、ちよつとした小物が置いてあるような場所に出た。

少し休憩しようと、置いてあった瓶に寄りかかった瞬間　それがゆっくりと傾いて下へ落下。

?ガシャン!?

見事に割れて中身が飛び散った。

（あー。やってしまった……。まあ人なんていないみたいだし、いか……。）

なんて悠々としていたら背後からガサゴソと物音が聴こえる。

ドキツとして振り返ると、別の部屋に繋がっているとされる入り口を見つけた。

その先は真っ暗で何も見えない。

けれども、音はその奥から聴こえてくる。

（あのサル達かしら……。）

動かず見入っていると、出入り口に付けられていた珠のれんがジャラジャラと動いた。

それが波打つように大きく動いた瞬間

巨大な男の人が珠のれんを掻き分けながら、アタシのいる部屋に入ってきた。

ゆっくりと辺りを見渡すと戸棚に向かって歩いてくる。

男の人に思えた物体は近くで見ると、「マネキンショッピングセンター」にいるような人間の形をした人形だった。

アタシの存在に気が付いたのか、人形はゆっくりと手を伸ばしてきた。

慌てて端へ逃げると、戸棚の下に小さなゴミ箱が置いてあるのを見つけてダイブ！！

?ズボツ!??

何とか無事に入れたと思ったら、中はまた滑り台のようになっていた。

そのまま転がるように滑って行くと、コンクリート打ちっばなしの部屋に出た。

アタシの出た穴は二階部分にあったようで、上から部屋を見渡してみても何も無い。

壁際にあつた階段を下りてみると、階段の横にはアタシが出てきたのと同じような穴があいていた。

(此処も何処かに通じているのかな……。)

そう思いながら横を向いて驚いた。

何故なら、目の前には下水道のような大きな丸い穴があいていたから。

丁度、アタシが滑ってきた穴の真下にある。

穴の中に照明は見当たらず薄暗いけれど、外に通じているのか一番奥が光っている。

(この穴から外に出られるのかな?)

そう思っていたら

?.....ガシャン.....ガシャン.....ガシャン.....?

上を見上げると、アタシの出てきた穴からシンバルを持ったサル達が現れた。

『しつこいなー』

サル達に向って叫んでいると、今度は階段の横にある穴から何か
滑ってくる音が聞こえる。

（またサルか……。）

イラッとしたアタシ。

一発殴ってやろうと穴の前で構えていたら
穴から出てきたのはサルではなく、なんと白色の殺人ロボットだっ
た。

ロボットの姿が見えた瞬間、大きな穴の中へ一目散に走ったアタシ。
この穴が怪しいのはわかっているけれど、逃げずにはいられなかつ
た。

段々と光が近づいて外の風景が見えてきた。
揺れる視界の中には、見覚えのある道路が映っている。

アタシが今、必死に走っているのは【どこでもトンネル】
この先で待っているのは【殺人ロード】
そう思いながらもアタシは走り続けた。

『あー。やっぱりな……。』

アタシは徒競走のゴールテープを切るようにトンネルの外へ出た。
その瞬間、ゆっくりと目が覚めた。

【研究所】は【アッチノ世界】の悪夢を製造している。
起きてすぐに、そんなことを思ってしまった。
もしかすると、【殺人ロード】よりも危険な場所なのかもしれない。

【公園】

【迷路街】と【商業ビル地帯】の間に、少し大きな公園がある。

そこは常に、晴れの日の心地好い昼下がり。

たくさんイチヨウの木に囲まれた公園。

公園の真ん中は円形の広場になっていて、よく見掛ける遊具が周りに置いてある。

甲高い声で叫んだり、笑ったり……

楽しそうな子供の声がたくさん聴こえてくるのに、公園には誰もいない。

まるで【学校】の廊下みたいな場所。

けれども……

辺りを見渡していると、黒いラブラドル犬が必ず姿を見せる。

黒い犬はいつも公園のベンチに横になって、時々聴こえてくる子供の声に反応しながら、静かに眠っていることが多い。

争い事の無い、穏やかな時間を感じる不思議な公園。

【白い廊下　：　広場と怪しい屋台】

ある日の夢は……

学校のような病院のような場所から始まった。

その建物の中を走りながら、誰かを追いかけていた。

同時にアタシも誰かに追われていて、立ち止まることが出来なかった。

学校や病院のような場所ではあるけれど【アツチノ世界】にある【学校】や【停電病院】とは違った雰囲気にした。

眩しいぐらいの真っ白な廊下を突き進むと、正面に扉の開いている出入り口があった。

外へ通じているのか、空が見える。

扉の外に出てみて驚いた。足元は、白い螺旋状の滑り台になっていた。

それを滑り降りると、今度は【公園】みたいな広場に出た。【学校】の校庭にも似ている。

けれど、【公園】よりは広くて、校庭よりは小さい……。

(此処はどこなんだろう……。)

立ち止まって考えていたら

?カシャンッ!?

背後から音がした。

振り返ると、緑色の錆びたフェンスの入り口が揺れている。
アタシも急いでフェンスの外に出ると、追いかけている誰かが左に
曲がった。

追うように左へ曲がると、道の右側に「魔石」「石」と書かれた蛍
光色の屋台が現れた。

（かなり怪しい……。）

左側には、何も書いていない山小屋みたいな木造の小さな屋台があ
る。

（かなり渋い……。）

どちらにも入らずに、そのまま真っ直ぐ走ると道路に出た。
道路を道形に進んでいくと、前に来たことのある【迷路街】の十字
路に立っていた。

正面の道は明るい。左の道は暗い。

どちらの道も、ビルとビルに挟まれた緩い上り坂。

明るい道の方が絶対に安全。

けれども、アタシが追いかけている相手は暗い道に行った気がする。
もしも、暗い道を選んだら絶対に何か危険なことがある。

此処で迷っている間に、アタシを追いかけてきている奴に追いつか
れてしまう。

（早く決めなきゃ……。）

なんてドキドキしながら焦っていたら

外の世界で地震が起きて、現実に引き戻されてしまいました。

あの奇抜な屋台には、本当に魔石が売っているのでしょうか。

魔石なんて使えるようになったら……

殺人口ロボットにも殺人鬼にも、少しは対抗できそうな気がします……。

【競技場】： 適當すぎる文化祭【】

ある日の夢は【学校】の敷地内にある【競技場】からだった。

水泳大会なのか、競技場の中にあるプールで借り物競争とリレーが始まった。

紙に書かれた物をプールの中から探してタイムを競うルール。けれども、何故かアタシのお題は某俳優さん。

(いるわけないじゃん！)

イラストしながら辺りを見渡すと……端っこの方にいた。

(何で？)

モヤモヤしながら某俳優さんを引っ張って自慢げに差し出すと夢から目覚めた。

(某俳優さんもアッチノ世界の人なのかしら……。)

横になりながらボーっと考えていたけれど、まだ起きる時間ではなかったなのでそのまま眠ってみた。

すると次は【学校】から始まった。

今度は文化祭なのか、教室で何やら準備をしていた。

『うちのクラスって何やるんだっけ？』

隣にいた女の子に聞いてみると

『喫茶店だよ！ Aちゃんも早く着替えて！』と言うその子の格好は何故か修道女。

(メイド喫茶じゃないんだ……。)

じっくり見ながら考えていたら別の女の子が廊下を走ってきた。

『Aちゃん！ もうすぐ出番だよ！ せっかく決勝まで残ったんだから！』

女の子は側に来るなりそう言つとアタシの腕を引っ張りどこかへ連れて行こうとする。

(決勝？ さっきの借り物競争かな？)

そう思っていたら全然違つた。

辿り着いたのは体育館みたいな場所。

『次に何を歌うかAちゃん決めて！ バンドのボーカルなんだから頑張つてよ！』

女の子は呼吸を整えるとアタシの両肩を掴んでとんでも無い事を言い出した。

(文化祭だからライブするのかな……。今から曲を決めるって……。準備遅いよ！)

パニックになっていたら

『このままじゃ優勝候補に負けちゃうよ!』

興奮気味に壇上を指差す女の子。

ライブルなのか壇上には誰かがスタンバイしている。

(これって歌える曲を何か言ったら、この人達演奏できるのかな…
…。)

そう思つてカラオケで歌う曲を言おうとしたら、ライブルの演奏が
スタート!

思いつきりアタシが言おうとした曲が流れ出す……。

しかも、聴こえてきたのは生演奏じゃなくてCDの音楽だった。

それを見て『アタシ達もこの曲でいいじゃん?』とふざけて言った
瞬間、目が覚めました。

もし、あのまま目が覚めなかったら何の曲を歌っていたらろうか…
…。

なんてベッドの上で真剣に悩んでしまったアタシです。

【宿泊施設】：【食事とアタシ】

前回の学校行事のような夢を見た次の日も、また同じメンバーが出てくる夢を見た。

最初の方は覚えていないけれど

みんなでどこかに行った後、バスで【宿泊施設】に向った。

今回の夢は宿泊する部屋には行かずに、宴会場のような場所に行つて食事をする事になった。

物凄く広い宴会場は幾つかに区切られていて、他の宿泊客のような人達も大人数で食事をしていた。

アタシ達が案内された席にも美味しそうなお料理が並んでいたの、ロールケーキの時みたいに食べられるものだと思っていいたら……

『履いている靴をちゃんと片付けないと食事をしてはダメですよ！』

給仕をしてきている仲居さんに突然怒られてしまった。

言われた下駄箱に行くと、すでに大量の靴やサンダルが置かれていてアタシの靴は入れられない。

一緒に来たメンバーはもう席に着いている。焦ったアタシは適当な所に靴を置いて急いで戻った。

ワクワクしながら自分の席に座ると、アタシの分のお料理がご飯しか無い。

他のお料理は食べかけ状態……。

お茶碗に盛られたご飯も半分ぐらいしか入っていなかった。

『なんで？ 誰か食べたの？』

慌てて隣の女の子に聞いてみると『何言ってるの？ 自分で食べてたでしょ』と笑われてしまった。

（やられたなあ……。やっぱり食べられないじゃん。）

ブツクサ文句を言いながらもしっかりとお茶碗のご飯は食べるアタシ。

（旅館で食べるご飯って何で美味しく感じるんだろう……。）

なんて思っていたら目が覚めました。

いつか【アッチノ世界】でまともな食事をしてみたいです。

【大草原】と【小さな家】

【アッチノ世界】には凄く綺麗な【大草原】がある。

夢に出てくるのは背の高い緑色の草原が多いけれど、黄金色の草原だったり、気持ち良さそうな芝生だったり、色取り取りの落ち葉が一面に敷き詰められていたり……。

色々な表情を見せてくれる。

たまに大草原の中をフワフワと空高くジャンプしている夢を見る。何度も何度もジャンプしながら辺りを見渡していると【アッチノ世界】で知っている場所が見えて子供のようにハシャイでしまう。

そんな草原の中には一本の道が通っている。

その道の先は【神社公園】の奥にある坂道に繋がっていて、反対側は【学校】の近くにある【森林】に繋がっている。

道の途中には【小さな家】がある。一階建てのログハウスのような家。

毎回部屋の形や雰囲気は変わるけれど、玄関の扉を開けてすぐに六畳ぐらいの部屋が現れることが多い。

その部屋には、いつも何故か部屋の大きさに見合っていないサイズのベッドが置かれている。

ある日の夢では小さな家で寝泊りした後、友達の車で大草原の道を通って【商業ビル地帯】の方に向かってドライブをした。

違う日の夢では、ただひたすらに歩いていたり、お昼寝をしていたり……。

いつも変わっているようで変わらない。そんな大草原の夢がアタシは大好き。

肌に触れる風と陽射しが心地好い素敵な場所。

【カラクリ屋敷】：トマトの唇はセクシー？（前書き）

【カラクリ屋敷】

【大草原】の中に【カラクリ屋敷】と呼んでいる大きな家がある。

このカラクリ屋敷も【アッチノ世界】の夢に度々登場する。

カラクリ屋敷の中に入るとアチラコチラに色んな仕掛けがされていることが多い。

何かに追いかけてられている時に辿り着いたり、かくれんぼのように家の中を隠れて逃げ回ったり……カラクリ屋敷でも追われて逃げればかりなアタシです。

他には、カラクリ屋敷のカラクリに挑んで隠されたお宝みたいなモノを探す夢もあった。

誰もいないのかと思えば女の人が暮らしていたり、お姉風な男の人がいたり……

夢によって住んでいる人はバラバラらしい。

とても綺麗で大きな家だけど、まだまだ謎を秘めているカラクリ屋敷。

【カラクリ屋敷　：　トマトの唇はセクシー？】

ある日の夢は友達の家に参加される設定で始まった。

友達の家に向うと、そこは【カラクリ屋敷】だった。
いつもカラクリ屋敷は新築の洋風な家。

『昔、父が買った家をそのまま譲り受けたの』

説明しながら案内してくれる友達。

確かに家具には布が被せられていて誰も使っていない雰囲気……けれど新築。

荷物も整理されていないような状況で招待されたことにアタシは違和感を持った。

不意に見覚えのあるクローゼットを発見。

前の夢で見たけれど、開けたことは無かったクローゼット。

なので好奇心でちょっと開けてしまったアタシ。

？ボタンッ！！　キーンッ！　キーンッ！？

開けた途端に中から緑色の頭に大きな唇を持った植物のような地球外生物が飛び出してきた。

それを見た友達は叫んだ。

『トマトの苗なのよ！！じっとしていれば勝手に外へ出て行くから……』

(ええー！ トマト!?)

混乱しているアタシを横目にトマトの苗は？キイーキイー？鳴きながら階段を下りていった。

窓から外を見てみると、どこからか出てきたトマトは花壇みたいな場所に自ら穴を掘って埋まってしまった。

『お騒がせしてごめんなさい。私達も下へ行きましょう』と冷静な友達。

階段を下りて外に出ると、玄関の側に置いてある半円形の大きなベンチに座ってみんなで談笑を始めた。

結構盛り上がっていたのに突然、家主の友達が立ち上がって……

『此処で話していても何だか味気ない気がするわ。みんなで近くのお店に呑みに行きましょうよ！』と言い出した。

こんなに招待されていたの？ と思ってしまうぐらい、そろそろと何人が引き連れて友達は先にどこかへ行ってしまった。

呆然としていたら、静かそうな女の人が隣に座ってアタシを見ているのに気がついた。

『私、あの子との飲み会は苦手なんだよね。だからさ、私の代わりにAちゃんが行ってきてくれない？ Aちゃんの可愛いチビちゃん私が子守しているからさ。たまには気にせず飲んできなよ！』と女の人が言ってきた。

(え？ アタシって子持ちなの？)

ビックリしていたら……

『そう言ってくれてるんだから、お言葉に甘えて俺らも飲みに行こうよ』

いきなり逆隣から声がした。

慌てて振り向くとヒゲ面で目つきの悪そうな男の人が座っていた。

(えええ？ あなたが旦那さんなの？)

更にビックリ。

(見たことあるような無いような顔してるなあ……。)

思い出そうと考えていたら……

『じゃあそういうことで！ 行ってらっしゃい』

そう言い残して女の人は笑顔でどこかへ去ってしまった。

(まあ、夢だから何でもいいか……。)

そう思ったアタシ。

『じゃあ、アタシ達も行きますか！』

旦那さんらしき男の人に声をかけると、旦那さんは無言でアタシを見つめる。

『ん？ どしたの？』

見つめ返すと、いきなりキス。

びっくりして思わず辺りを見渡すと

人は見当たらないけれど、トマトの苗がうっとりした雰囲気で見ている。

『ちよっ……トマト見てるからやめてよ！』

なんてトマトに見られるのを恥ずかしがっているアタシ。

旦那さんはアタシの言葉を無視してまたキス。

『トマト見てみるよ。俺らを見て顔が赤くなってきた』と笑う変態のような旦那さん。

振り向くと、さっきまで緑色だった頭つばい部分が膨らんで少しずつ赤くなっている……。

『もうすぐ完熟だな！ 飲み屋に持って行ったら、みんなでトマトのフルコースが食えるぞ』と嬉しそうな旦那さん。

(えええ……。)

複雑な気分になって何も言えないアタシに今度はちよつと深めなキス。

(ワオ！！！)

驚いたけれど、ちょっと嬉しくなっちゃったアタシ。

(夢だし……いいよね……。ウへへ。)

なんて一人ではしゃぎながら何度もキスをしていると

?ドサツ!?

後ろから不穏な音がした。

『よし! いい土産が出来たな』と笑顔の旦那さん。

恐る恐る振り返ってみると、真っ赤に大きく育ったトマトの頭がもげて地面に転がっていた。その巨大な唇はリップグロスを塗ったようにコテコテ。

?チュツチュ……チュツチュ……?

もげた状態で口を動かすトマトを見て思わず絶句。

こんなの食えるか!!と思った瞬間、目が覚めました。

久しぶりのキスは嬉しかったけれど、トマトに見られるのはちょっと……。

何だか色々な意味で恥ずかしくなる夢でした。

【未来ビル：メガネ男子】

> i 1 3 5 5 5 — 1 8 9 2 <

ある日の夢は【大草原】から始まった。振り返れば【カラクリ屋敷】が見える。

そっちには行かずにただひたすら歩いていると、見上げるほど高い真っ白な壁が現れた。

白いコンクリートのような壁は何かを囲うように円く存在している。壁に沿って少し歩いていくと、途中で壁が途切れていた。

中に入ってみると、そこには窓ばかりある長方形の高層ビルが幾つも並んでいた。

みんな高さが微妙に違う。

見渡していたら突然、激しくお手洗いに逝きたくなったアタシ。

(ビルのどこかにあるかもしれない……。)

そう思っただけでビルに近づくと出入り口が見当たらない。誰かいないか窓を叩いてみたけれど音がしない。

モコモコの紙粘土みたいに軽そうな素材で出来た真っ白なビル。

(何か特別なことをしないと現れない扉があるのかな。)

なんて思っただけでアタシはすぐに【未来ビル】と命名！

振り返ると夕日に染まった我が家の後姿と六丁目が見える。

壁と同じ素材で出来た地面がずーっと我が家の方まで続いていた。

(我が家だったらどうにかなるかも！)

そうじゃなきゃ困ると思ったアタシは我が家のある方へ早歩きで向かった。

けれど、歩けど……歩けど……辿り着かない。

辿り着かないというよりも進んでいないような感覚。

(こんなんじゃカラクリ屋敷の方が近いかもしれない。)

振り返つてみると未来ビルが遙か後方に……。その更に先のカラクリ屋敷なんて豆粒みただった。

(なんでよ！ 戻ることも出来ないじゃん……もう！！)

子供のようにモジモジしていたら

『ねえ、辿り着けないの？』

いきなり声がした。

さっきまで人なんていなかったのに……。

ビックリして声のする方を見ると、数メートル横に男の人が立っていた。

黒い靴に黒いパンツ、黒いカーディガン。

顔を半分隠すように黒いマフラーのような物をグルグルと巻いている全身黒づくめのメガネ男子。

『ちょっとお手洗いに行きたくて……でも、進むことも戻ること』

出来ないの』

そう現状を話すと

『それは困ったね。じゃあ、僕と一緒に行ってあげるよ』とメガネ男子はゆっくりと近づいてきた。

そつとアタシの手を取って？コツコツ？と足音を響かせながら我が家の方へ進んでいく。メガネ男子の左手中指には黒い石のついた指輪があった。

握る指先は何だか少し冷たい。

(もしかして黒羽根さん??)

メガネ男子の手を見つめながら考えているうちに気がついたら我が家が目の前に……。

『ほら、辿り着いたよ。もう大丈夫だね』とアタシの顔を覗き込むように言うメガネ男子。

メガネのレンズが夕日で光って顔がよく見えなかった。けれど、凄く安心してそのままスウィーツと目が覚めた。

もしかして黒羽根さんだったのかなあ……とまた思い返すアタシ。でも、アタシの知っている黒羽根さんと服装や髪型が少し違った。黒羽根さんは髪が長めだけど、メガネ男子は短めで理系の学生みたいな雰囲気だった。黒羽根さんは何とも言い表せない雰囲気。

違うかもしれないけれど、もしメガネ男子が黒羽根さんだったら……なんて乙女な妄想をしていたら、激しくお手洗いに逝きたくなって

駆け込んだアタシ。

【アッチノ世界】でお手洗いに行きたくなくなったのは、体がトイレに行きたかったからなのね……もし夢の中で済ましていたら……

考えるだけで恐ろしくなりました。

夢の中で紙粘土みたいなビル地帯を見掛けても……お手洗いは使えないと思っておいたほうがいいです。

【黒羽根さん】

前回の【未来ビル：メガネ男子】や【停電病院】にも出てきた黒羽根さんと呼んでいる存在のお話をしましょう。

最初のページに書いたようにアタシが見る夢にはいくつ種類がある。

日常で起きた出来事の延長みたいな普通の夢。

最近、色濃くなってきた夢の世界が繋がっている【アッチノ世界】の夢。

それと

幼い頃から時々見る黒い羽根を持った天使のような男の人の夢。

それが黒羽根さん。

幼い頃に見たある日の夢。

アタシは真つ暗な空間に閉じ込められていた。

手探りするのもためらってしまつぐらい深い暗闇の中、自分の呼吸する音や心臓の音が聴こえてくるのが怖くなった。

立って腕を広げていることさえ不安になったアタシは、その場に座って両膝に顔を埋めながら、何かの歌を繰り返し歌う。

暫くすると、どこからかアタシの歌声とは別に同じ歌の鼻歌が聴こえてきた。

顔をあげると暗闇の先に三角のような形をした白い光が浮かんでいく。

引かれるまま近づいていくと、暗闇を切り裂いたような細長い隙間が現れた。

光はそこから漏れていた。

鼻歌もその中から聴こえてくるので、恐る恐る中を覗いてみると真っ白な部屋と大きな黒い羽根が見えた。

部屋の左側にはガラスの無い小さな窓と右側には三段ぐらいしかない横長の白い階段。

小刻みに動いていた羽根が突然、くるりと回ったと思ったら黒髪の若そうな男の人が現れた。

黒いパンツに黒いブーツのような靴を履いて、白いシャツを着た背の高い男の人。

腰の周りにはたくさんの鍵をつけていて、それをいじりながら鼻歌を口ずさんで部屋を歩き回っている。

その姿があまりにも綺麗で見入ってしまったアタシ。気がつくとは何かアタシは真っ白な部屋の中にいた。

左側にいたはずの男の人は階段に座ってアタシを見つめている。

どのぐらい見つめられていたのだろうか……。

突然、男の人は立ち上がって、ゆっくりとアタシに近づいてきたかと思えばギューッと抱きしめてきた。

ゴツゴツした細い体からは月下美人のような独特な香りがする。見上げると細長い指に黒い石のついた大きな指輪が見えて、視界を隠すように男の人がアタシの頭を撫でた。

『今までツライ思いをさせたね。もう大丈夫。僕がいるから。ちゃんと迎えに行くから良い子で待ってて。ね？ 約束だよ』と言われて目が覚めた。

この夢を見た時はサンタさんみたいな人だと思っていた。

大きくなってから友達に話すと『死神じゃないの？』なんて言われてしまったけれど……。

幼い頃は黒羽根さんの夢をよく見ていた。

慣れてくると真っ白な部屋に入れてもらって、階段に座ってアタシが質問攻めにしていったような気がする……。

子供だから、トンチンカンな質問ばかりしていたのかもしれない。黒羽根さんはアタシの隣に座って両手を組んで、左手の中指につけた黒い石の指輪を見つめたり触ったりしながら悩むような仕草をよくしていた。

答えられないと体を横に揺らしながら歌って話題をそらされたり、『大きくなったら教えてあげる』とごまかされた。

幼い頃は見た夢を何度も繰り返して見るが多かったけれど、段々と黒羽根さんの新しい夢も昔の夢も見ることが少なくなっていた。

彼の姿を見たいと思えば思うほど……。

最近は真っ白な部屋の夢なんて全然見れない。

黒羽根さんの夢は毎回、目が覚めると内容は覚えていたのに顔は何となくでしか浮かばない。

何て呼び合っているのかも思い出せないぐらい、いつも曖昧な余韻を残す。

だから【アッチノ世界】とは別の夢だと思っていた。

でも、最近になってたまに【アッチノ世界】に似たような人が出てくるようになった。

真っ白な部屋ではないけれど、黒羽根さんの夢を見ることもある。

それは本当に少ないけれど。

それが【アッチノ世界】なのか、違う物なのかもわからなくてもどかしい。

でも、アタシにとって黒羽根さんは凄く特別な存在。

今も昔もずっと求めてしまう不思議な人。

【瞬き短編集】

ある日の夢は短編映画のような夢だった。

上手く言えないけれど……幾つもの夢を同時に重なるように見た。

最初に見た夢は現実と何にも変わらない生活の夢。

そんな夢の中で、更に眠って夢を見た。

夢の中の夢はおとぎ話の世界みたいに自分の部屋の物が勝手に動き出す。

パソコンの横にあるキャラメルが？パタパタ？と鳥のように逃げようとしたり、洋服が絡み付いて襲ってきたり……。

すーっと夢の中で目が覚めて、一日が始まる。

そして一日が終わると、また夢の中で眠って同じ夢を見る　そんな繰り返し。

夢の中で見ていた夢なのかわからないけれど、次に始まった夢は外人の小さな双子の姉妹が出てきた。

【カラクリ屋敷】のような大きなお屋敷の中で犬と一緒に寄り添いながら本を読んでいる。

そんな二人の目の前に二十歳ぐらいの双子の姉妹が現れた。

一人がふらつといなくなつて、残った一人が女の子達に自分達のこ

とを話しながら写真を見せていた。

そのまま瞬きするように、いきなり違う夢に切り替わった。

次に始まった夢は我が家のベランダにいた。

『私はケーキという物が苦手だね。でも唯一、美味しいと思えたのがレモンのケーキなんだよ』

突然、背後から声がして振り返ると亡くなった昭和の名俳優さんが和服を着てベランダであぐらをかいて座っていた。

『和菓子にもレモンの味がする物はないかと思って探していたらあったんだよ。そいつが私は好きでねえ……』

ダンゾウだったか何だったのか忘れてしまったけれど、そんな名前の和菓子屋かレモン味の太福が好きなんだと語る名俳優さん。

話を聞いていたら、暑くて夢の中で目が覚めたアタシ。

季節は夏なのか汗だくになっていた。

空気の入替えをしなくなって自分の部屋のカーテンと窓を開けた瞬間

?キィー! キィー!?

チンパンジーが金切り声をあげながら網戸にしがみ付いていた。

(またサルですか……)

溜息をつきながら改めてチンパンジーを見てみると、何かがおかしい。
よく見ると二階の窓の外には、家も道路も何にも無い、真っ白な世界が広がっていた。

?.....キコ.....キコ.....?

その光景にビックリしていると、どこからか音がする。

真っ白な世界を見つめながら耳を澄ましていると、左端の方からカゴ付きのアンティークな三輪車に乗った赤ちゃんが現れた。

赤色と白色のロンパースを着た赤ちゃんは手に長い紐を持っていて、その先には網戸にしがみ付いているチンパンジーが首輪で繋がれていた。

三輪車の小さなカゴには二ホンザルみたいな小猿が座っている。

『ちょっと!! いつまでそうしてんのよ!!』

まだ言葉も話せなさそうな赤ちゃんが突然、見た目に反した口調で叫んだ!

チンパンジーは? バタバタ? と赤ちゃんの方へ戻ると、そのまま止まらずに走っていきこうとした。

それを見た赤ちゃんが手に持っていた紐をグイッと引っ張る。

また見た目に反して腕力も凄いのか、チンパンジーは勢いよく赤ちゃんの後ろの方へ引き戻された。

『チンパンジーの分際でアタシより先に行こうとするなんて! どういうことよ!!』

またとんでもない罵声をチンパンジーに浴びせると、ズルズルとチンパンジーを引きずりながら物凄いスピードで右端へ消えていった。突然の出来事に驚きながらふと振り返ると、さっきの大きなお屋敷の中にいた。

アタシの目の前には、双子の女の子の一人が立っていた。

『あのお姉さん達は？』とアタシが聞くと

『あの人達は大人になった私達。未来を見せたって何にも意味が無いわって言ったら消えちゃった』と可愛く首を傾げて言う。

『あの大人気ない赤ちゃんとお猿さんにはキャンデイの欠片をあげておいたから、もう大丈夫』と手に持っていた小さな缶の箱を？カラカラ？と鳴らして見せてくれた。

ブワッと風が吹いてお屋敷のカーテンが舞ったと思ったら、いつの間にか我が家のベランダに立っていた。

いつもベランダの窓際で寝ている猫のチップとミッキーの背中が見えたので窓を？トントン？叩いたら、何故か姉の家にいるはずのナスまでいる！

『その内の一匹は偽もんだあ〜』

また背後から声がして振り返ると、同じ場所にまだ座っていた名俳優さん。

何も疑わずアタシはナスだと思って窓を開けて捕まえると、ナスの姿をした猫がグニヤリと姿を崩して本物のチップになった。

最初にいたチップは姿を変えながらアタシの横を素早くすり抜ける。と名俳優さんの肩の上に乗った。

よく見ると、それは三輪車のカゴに乗っていた小猿だった。

それを見て『ハァーハツハツ！』と大げさに笑う名俳優さん。

『何ですつと此処に居るんですか？』と思わず聞いてみると

『キミの大切な猫君があこの木のようになりたいと、前から憧れていたのは知っているかね？』

名俳優さんの見つめる先には【神社公園】にある大木があった。

大切な猫とは何故かチップのことだと思った。

チップはよく窓越しから神社の大木がある方を見つめているから…。

『私は彼の夢を叶えてあげるためにその時を待っているんだよ』と名俳優さんは笑った。

その時とは多分、チップが死後の世界に行ってしまう時なんだと思つたアタシは『その時とは、いつ頃なんですか？』と恐る恐る聞いてみた。

名俳優さんが言おうとした瞬間、目が覚めてしまった。

目が覚めた後は暫く放心状態。

色んな夢を一気に見たせいかわたしは凄く疲れてしまったけれど、チップは凄い人とお友達なんだな……と思つてしまいました。

【黒羽根さん　：　アンティークショップ？】

夢の始まりは真っ白な世界にいた。

いつも黒羽根さんがいる真っ白な部屋ではなくて、前回の【瞬き短編集】で赤ちゃんが出てきた時のような白い空間が続いていた。

見渡していると、遠くに何かが見える。

向ってみると、そこには巨大な焦げ茶色の本が開きかけた状態で立ってあった。

本の下の方からしおりのような赤い紐が出ている。

気になったので、挟まりながらそのページを押し開いてみた。

左側のページには筆記体のような文字が書いてあって、右側のページにはセピア色で窓やレンガの壁が描かれていた。

窓やレンガの壁の真ん中には、描かれたモノでは無い本物の朱色の扉があった。

(おとぎ話みたい……)

なんて思いながら黒っぽい金色のドアノブを回して扉を開けてみると薄暗い部屋が見える。

中を見渡すと、焦げ茶色のオシャレな家具がたくさん並んでいて、その上には黄色い灯りのランプが点々と置いてある。

まるで、外国映画に出てくるアンティークショップみたいな雰囲気。そこが【アッチノ世界】と繋がっているのかはわからなかった。

アタシは夢の中で窓のある建物に入ると、窓の外を見るクセがある。この時もそれは変わらず、無意識に窓を探していた。

振り返ってみると、入ってきた扉の両脇には小さな窓があった。最初に見た外側の窓とは違って、内側の窓は扉と同じく本物。曇った窓ガラスの外を覗いてみると、真っ白な世界ではなく外国のような街並みが見える。

アチラコチラから人の気配がするのにな、見えそうで見えない。

窓枠からは雨に濡れた木の香りが凄くする。

(雨降りには嫌いだけど、この匂いは好きだなあ……)

なんてうっとりしながら、窓にへばり付いて覗いていると突然ブワツと甘くてスパイシーな匂いが鼻に入ってきた。

(この匂いは!!)

慌てて振り返ると、奥の壁から男の人が体を隠すようにヒョッコリと頭だけ出して驚いた様子で覗いていた。

男の人は頭をクシャクシャしながら、ゆっくりと出てきた。

その姿は袖を肘辺りまで折った白いワイシャツに黒のネクタイ。

黒いパンツに黒いブーツ、腰にはたくさん鍵。

ベルトみたいな腕輪と左手の中指には大きな黒い石の指輪。

そう！現れたのはアタシの大好きな黒羽根さん。

『わあ。驚いた。よく来たね!』と笑顔の黒羽根さん。

アタシはあまりにも嬉しくて何も言えず、泣きそうになっていた。そんなアタシを見た黒羽根さんは『はい。ウルウルしない!』と言って抱きしめてくれた。

余計にウルウルしてしまうアタシ。

『この素敵な白シャツに鼻水つけられたら困るから、こっちにおいで』

そう言うと、黒羽根さんはアタシの手をとって奥に案内してくれた。やっぱり指先は冷たい。

扉の無い奥の部屋には、小さなキッチンがあった。

更にその奥には、炭のように真っ黒な扉が出てきた。

黒羽根さんが扉を開けると木の香りが漂う。

横長の部屋。

その壁際の中央には、小さな作業台みたいな机と椅子がある。

作業台の上に置いてあるランプの灯りだけで部屋の中は薄暗い……
と想像していたら、黒羽根さんが扉の横にある何かを？カチカチ？
同時に天井の中心部分から？カチカチ？に合わせて部屋が明るくな
っていく。

天井を見上げると電球がぶら下がっていて、黒羽根さんが？カチカチ？
した所にはマジックのフタみたいなモノがくっ付いていた。

明るくなった部屋の壁には大きな棚がいくつも並んでいた。

奥には二人掛けくらいのソファと猫足のテーブルがある。

『此処で待ってて』

アタシをソファに座らせて、黒羽根さんは部屋を出ていった。

大きな棚には、サイズや素材の違うたくさん引き出しがあって、

どれも開かない。

取っ手の下に鍵穴があつて、取っ手の上には読めない筆記体が彫られた金色のプレートが貼つてある。

見ていたら黒羽根さんが木のトレイを持って戻ってきた。

『何か面白いモノあつた？ コーヒーだけど、どうぞ』と言いなながらコーヒーの入った透明のマグと白い物が積んである透明のお皿を出してくれた。

コーヒーからは凄い湯気が出ている。

熱そうなので、ちよつと時間をおいてから一口飲んでみると熱さよりも苦い……。

白い物は砂糖だと思つてコーヒーに入れようとしたら止められた。

黒羽根さんは一粒取ると、そのまま口の中に入れてしまった。

『口直しにこれね』

そう言うので食べてみると、砂糖ではなく甘いミルクキャンディだった。

ちよこちよこ夢に出てきた黒羽根さんっぽい人じゃなくて、ちゃんと黒羽根さんに会うのは久しぶりで緊張して何も話せないアタシ。

黒羽根さんも動揺しているのか、暫くお互い無言。

でも、そんな時間が勿体無く感じたアタシは『黒い羽根なくなっちゃったの？』と気になつていたことを聞いてみた。

『アハハ。なくなつていないよ。あんなの出したまま此処にいたら、置いてある物を全部なぎ倒しちゃうよ。だから、今は収納中。便利でしょ？』と笑つ黒羽根さん。

『そうなんだ。じゃあ、いつもの白い部屋じゃないのはどうして？
お引越したとか？』なんて聞くと

『違うよ。此処では作業をしているんだ』と言うと黒羽根さんは作
業台の椅子に座って、背もたれに頬杖をついた。

『お店なの？』

『それも違うね。此処は必要なモノが必要な時に使って、必要な物
を持っていく場所なんだよ。最近はずいぶん忙しくて僕ばかり占領しちゃっ
ているけど』と溜め息混じりに笑った。

『じゃあ、此処に違う人がいる時もあるってこと？』

『そうだね。あの黒い扉は僕の扉なんだ。他のモノが此処を使って
いる時は扉の色や形、部屋の広さや中身も違う』

『ふーん……。じゃあ、あの白い部屋からは、いつでも出られるの
？』

最初に出会ったあの白い部屋に黒羽根さんが閉じ込められているよ
うなイメージだったので聞いてみた。

『此処と同じで、必要な時に必要な場所にならね。それにしてもキ
ミが此処に来たのが驚きだよ。でも、必要だから此処にいるんだね』

そんなことを言われて、思春期の女の子みたいに恥ずかしくなった
アタシ。

『この引き出しは何が入っているの?』なんて言って必死でごまかしていた。

『これは材料が入っているんだよ。僕は此処でこういうのを作っているんだ』

そう言うと木で出来た彫り物を見せてくれた。

その先には鍵がついている。

『キーホルダー?』

『そんなような物だね。僕はたくさんの鍵を持っているでしょ? これは僕のであつて、僕のじゃないんだ。持ち主が自分で持っているようになるようになったら、鍵が迷わないように証を作つてあげているんだ』と黒羽根さんは腰につけた鍵をジャラジャラ鳴らした。

『証……。じゃあ、なんで引き出しに鍵が掛かっているの?』と聞く

『勝手に開けたら素材達に失礼だからだよ。この引き出し全部に違う素材が入っているんだ。持ち主に合った素材と話し合つて同意してもらえれば作るし、ダメなら違う素材と相談するんだ』と黒羽根さんは不思議なことを言い出した。

『もし、無理矢理こじ開けたらどうなるの?』

『それでも作れないことは無いけれど、出来上がった物はたぶん持ち主とも鍵とも馴染まなくて、すぐに壊れてしまつと思つよ』

そついうと黒羽根さんはアタシのすぐ真横にあった引き出しをノックした。

すぐに引き出しの内側からノックが返ってきた。

それを確認すると、腰につけた鍵を一つ取り鍵穴に入れて回した。

？カチツ？と音がして黒羽根さんが引き出しを開けると、タバコの箱ぐらいの木の板が一つあった。

『一つだけ？』

思わず口に出してしまった。

『必要な分だけ来てくれるんだよ。ありがとう』と黒羽根さんは板に向かってお礼を言うのと引き出しを閉まった。

使った鍵を抜いて腰に戻し、次は隣の引き出しをノック。

ノックが返ってくると、また一つ鍵を取り出して引き出しを開ける。

今度は石のような灰色の板が出てきた。

『ほら、違つてでしょ？ また後でね』

嬉しそうに言いながら引き出しをしまつ黒羽根さん。

どちらの声もアタシには全く聞こえなかった。

作業台の上には綺麗な模様が彫られたヒノキみたいな正方形の板と重そうな器械があった。

『これはね、鍵をつなげるための金具をはめる道具なんだ。やつてみる？』と黒羽根さんは悪そうな顔で笑つ。

『無理だよー』

慌てるアタシの横でニヤニヤしながら器械にヒノキ板をセットしていく。

少しパーマがかった長めの黒髪が邪魔だったのか、黒羽根さんはワシヤワシヤしながら耳に髪をかける。

耳の軟骨には縦長のピアス、耳たぶには四角い石のピアス。どちらもやっぱり黒い。

『黒ばっかりだね』

笑っていると『僕の羽根は何色？ 黒でしょ？ 黒が僕を好きなんだけだよ』と髪を耳にかけてピアスを見せながらふざける黒羽根さん。

笑っていたら『はい！ このレバーを下に押ししてください！』といきなり言われてビックリした。

言われるがまま冷たい鉄のレバーを押すと固い……。

『もつと体重かけていいから！』と言われて両手でレバーを押さえてみた。

『はい！ 離していいよ。』と言われて離すと黒羽根さんが固定していた板をはずして見せてくれた。

ひし形に置いた板。

その尖がっている辺りの側面を貫通させるはずだったのに、アタシの力が弱かったのか筒状の細い金具は貫通せず中途半端に刺さっていた。

『あはは。これは残念だねえ』と黒羽根さんは笑う。

『これって誰かの何でしょ？ どうしよ……』とアタシはパニックになっていた。

『これは練習用の素材だから大丈夫。僕だって最初から何でも作れるわけじゃないからね』と言って作業台にあった小さな引き出しをノック。

ノックが返つてくると、同じように鍵で引き出しを開けた。

中身は空っぽ。

その中に失敗した板を入れて一度閉めてから、またノックした。

すると再びノックが返ってきて、鍵で開けるとツルツルの綺麗な板が出てきた。

『この素材はね、今みたいに引き出しに返してあげると元通りになっちゃう格好いいやつなんだ』と自慢げに板を掲げる黒羽根さん。

『凄い!!』

大興奮していると

?コンコン?

突然、黒い扉がノックされた。

『おっ！ またオーダーかな』

そう言いながら黒羽根さんが扉に向かった瞬間、目が覚めてしまいました。

不思議な場所。

不思議な引き出し。

不思議な黒羽根さん。

謎めいた黒羽根さんの知らない一面を少しだけ知れた夢でした。

あの場所は【アッチノ世界】なんだろうか……。

気になります。

【ゆらゆら : チキンスーツ】(前編)

昨日の夢は窓の無い部屋から始まった。

そこは初めて見る場所。

全体がクリーム色というか黄ばんだ白色みたいな部屋。

【宿泊施設】の地下に雰囲気か似ていた。

中にはパイプベッドと洗面台しかない。

扉を開けて出てみると廊下があつて、ずらりと同じ扉が並んでいた。窓が無いせいか夜みたいに全体的に暗い。

他の部屋を覗いてみると人はいるけれど、声をかけてもみんな背中を向けている。

まるでテレビで見る精神病棟みたいな場所。

突然、一つの部屋から上下白色の看護師みたいな格好をした人が出てきた。

アタシの顔を見ずにその人も背中を向けてスタスタと歩いて行ってしまう。

急いで後をついて行くと病室みたいな部屋とは違う部屋に入っていた。

そこは青いカーペットが敷かれた広い部屋で、看護師みたいな人や個室にいたような人達が何人かいた。

でも、よく見るとみんな、体全体がブレていてモザイクをかけたように顔も何もはっきり見えない。

何か話しているけれど、人混みの雑音をスローモーションしたような話し声が溢れていて、聴こえるのに聞こえない。

床に座っている人、机に向かって何かを書いている人、窓の外を見

ている人……。
みんな色々。

(やばそうだなあ……)

そう思いながら部屋を見渡していたら、床に座っている人の隣にス
ーツを着た男の人がカバンを抱えて体育座りしていた。
その人はブレていない。

『すみません……』

思わず声を掛けてみると？ガバツ！？と顔を上げてアタシを見た。

『アナタは普通の人？ やっと出られるかもしれない』とアタシに
詰め寄ってきた。

『アタシもわからないです！ 此処はどこなんですか？』と後ずさ
りながら返すと

『俺も気付いたら此処にいたんだ。此処は病院みたいだよ』と言わ
れた。

『病院？ 違う……』

此処が【アッチノ世界】なら此処にある病院は【停電病院】のはず。
此処とは違って電気なんて点いていないし、人もほとんどいない病
院。

それを言うとスーツの人は……

『此処は窓が無いから地下みたいだよ。俺はあちこち出口を探した

んだ。でも何故か下りの階段が一つあるだけで、どんなに探しても上に行く階段が無い。仕方がないから下の階へ行くと、何故かまた同じ階に戻ってしまう。繰り返しているうちに疲れて諦めていたんだ。一緒に出口を探してくれないか？』みたいなことを言う。

聞きながら部屋をもう一度見渡すと窓がある。

『あそこに窓があるから地下ではないはないんじゃない？』

『俺もそう思つて出口を探したんだ。でもBと書かれた下りの階段ばかりで外へ出る扉が無い』

窓の外を見てみると、また見たことある光景が夕日に照らされた我が家の後姿が正面に見える。

左側を見ると【大草原】が見える。

此処はやっぱり【アッチノ世界】

そして今いる場所は前に夢で見た紙粘土みたいな【未来ビル】の一室なんだと思つた。

あの建物だつたら確かに出入り口は無い。

（出入り口は無くても目の前に窓はあるんだから出られるじゃない！）

そう思つて開けてみると、窓の外は真つ暗闇。

此処は異次元ですか？　なんて思つてしまう果てしない暗闇。

暫く暗闇を見つめながら考えて　とにかく階段へ向かつてみた。現れた階段は想像していた病院の階段とは全然違って、鉄棒みたいな素材で出来た鉄臭い螺旋状の階段だった。

？カンカン？音を響かせながら下りていくと、添えた手が冬の鉄棒

を触った時のように冷たくなった。

下の階へ到着して廊下を見てみると、確かに同じ階のような気がする。

でも、病院ならみんな同じような造りだから違う階なだけかもしれないと思って少し歩いてみると、また青いカーペットの部屋があった。

さっきまでいた部屋だと示すように窓が開いている。

スーツの人は『ほらね？』と言いたそうな顔をしてアタシを見つめる。

前にも似たような夢を何度か見た。

【学校】や【宿泊施設】の階段で同じようなことがあった。

【学校】の夢では何度も階段を下りてみて、下りてきた階段を何の気なしに上ってみたら違う場所に出たことがある。

それを応用して【宿泊施設】の階段でもやってみたら、突然エレベーターが現れた。

その時は結局、降りたい階では扉が開かなくて目が覚めるまでエレベーターに閉じ込められていた夢だったけれど

でも、変化があるのならいい！！

スーツの人に何か目印をつけられる物は持っていないかと聞くと、ポストイットを持っていたのでBの字に貼って下りてみた。

見えたBの字にはやっぱりポストイットが貼ってあった。

めげずに何度も何度も下りてみると、ついに目印無しのBの字が出現！

『やった！ これで帰れる！』とスーツの人は雄叫び！

『まだわからないですよ！ これですって何も無かったら意味がないです』とネガティブなアタシ。

そんなことを言いながらもドキドキしながら階段を上ると、エレベーターが登場！！

テンション上がってアタシも雄叫び！

覗き穴みたいな小さな窓がある銀色のエレベーター。

一つしかないボタンを押すとゆっくりと開いた。

中へ入ると階数の書いていないボタンが並んでいて、とりあえず一番上のボタンを押してみた。

スムーズに上って停まる。でも、扉が開かない。

小さな窓を覗くと【停電病院】みたいな場所だった。

(本当に地下だったんだ……)

なんて驚いていたら、真つ暗な廊下から誰かが歩いてくる足音がこんな時に現れるのは絶対、宜しくないモノだから急いでもう一つのボタンを押した。

今度は上なのか下なのかわからない感覚に襲われながら停まった。

また覗き穴を見てみると【学校】にある、使つてはいけない階段が見える。此処も暗くて宜しくはない気がする。

(このエレベーターは【アッチノ世界】の建物に繋がっているんだ……もしかすると安全な場所もあるかもしれない)

そう思って更に下のボタンを押してみると、次の階は【宿泊施設】にある巨大なお土産屋さんだった。

『此処なら大丈夫!!』

張り切ってスーツの人と出ようとしたけれど、また扉が開かない。

『もうこの世界から出られないんだ……』とスーツの人は座り込んで呟いた。

困り果てていたら、突然スーツの人が立ち上がって

『さっきの階段と同じように下へ向かったら、上に出れる場所で扉が開くかも!』と叫んだ。

『なるほど……とにかくやってみよう!』と一番下の階のボタンを押してみた。

どンドン下へ……下へ……停まらない!

現在の階数を表示する物も無いから、どのくらい下りたのかもわからない。

ズーっと下りていく。

『どっしょ……どっしょ……』

スーツの人はかなりアタフタしている。

ふと

(停まらないなら停めてしまえばいいじゃん……)

なんて思ったアタシは一番下にある緊急停止のボタンらしき部分を押しそうとした。

でも、ボタンを保護するプレートのような物が硬くて押せない!!

スーツの人も挑戦してみたけれど、やっぱり押せない。それにイラツとしたのか、スーツの人が胸ポケットからボールペンを出した瞬間

『ちくしょー！』と叫びながら停止ボタンのガラス目掛けて思いつきり突き刺した。

バリンと見事に割れたと同時にボタンも押されて？ガタン！？といきなり停止。

？スイー？と静かに扉が開いた。

二人で恐る恐る外へ出てみると、駅ビルのような場所だった。

地下鉄の建物なのか、地下から伸びる細いエスカレーターからOLっぽい人やスーツを着た人やマネキン人形が次々と上ってきた。

上りのエスカレーターだけしかなくて、地下へ行く下りのエスカレーターは見当たらない。

正面の道路には車が走っていて、その奥にはビルやお店が見える。

それを見たスーツの人が『これでやっと帰れる！ 此処からは一人でも大丈夫そうです。アナタがいなければ、あの地下から出られなかった。ありがとう！』と泣きながら握手してきた。

『今は何にもお返しできないけれど、これ受け取ってください』と名刺をくれた。

名刺をちゃんと見たけれど、起きたら思い出せなかった。

『帰り道も気をつけて！ 本当にありがとう！』とスーツの人は手を振りながら外へ出て行った。

それを見送るようにアタシも外へ出ると、雨が降っていた。

振り返ると【マネキンショッピングセンター】が見える。
結局、あの精神病棟みたいな場所は【未来ビル】だったのか、それが地下だったのかもよくわからなかった。

【ゆらゆら：仮面道路】へ続く……

【ゆらゆら】： 仮面道路【（後編）】

スーツの人を見送って街並みを見つめながら思った。

（此処は前に夢で見たことがあるから、どうにか我が家のある方へ帰れるかもしれない……）

一番明るい空を目指して雨の中を小走りで交差点を渡っていたら、誰かがアタシを追い抜こうとした。顔を見ると兄だった。

『Tくん！　なんで此処に？』と思わず声をかけると

『あれ？　Aちゃんこそ。僕はお家に帰るのですよ』といつもと変わらない兄。

現実だと我が家と兄の家は近いけれど、【アッチノ世界】だと兄の家があるのかもわからない。

何故なら、兄の家があるはずの場所に【未来ビル】がたくさん建っているから……。

でも、兄と一緒に試してみようと思った。

歩きながらスーツの人との出来事を兄に話した。

『ふう〜ん。大変だったね。じゃあ此処はAちゃんの夢の世界なんだ』と面白そうに話を聞く兄。

『うん。この辺りは前に夢で見たことがあるけど、どうやって我が家へ戻ればいいのかわからないの』と言つと

『そっか。とりあえず歩いてみようよ』と進む兄。

ビルの間を通り抜けると、そこだけタイムスリップしてしまったかのような古びた木造の建物が現れた。

『これって駅っぽいよね?』と兄は嬉しそうに言った。

『駅があるなら【迷路街】にある駅に繋がっているかも!』とアタシも嬉しくなった。

切符を買うために売り場みたいなところに行くと、駅員さんではなく昔のタバコ屋さんとか駄菓子屋さんにいそなお婆ちゃんが座っていた。

『切符を買いたいんですけど……』

そう言つとお婆ちゃんは無言で何かを目の前に置いた。

昔のお金みたいに丸くて平たい物が輪っか状に紐でたくさん束ねられている。

よく見ると、布、紙、石、鉄、ガラス、木など一つ一つ違う。

兄と顔を見合わせていると

『この中にお前さん達が持っているやつと同じ物があれば通れるぞ。』とお婆ちゃん。

兄とアタシ、一束ずつ渡されていたので二人で探していると兄が『Aちゃん! これ百円玉だね? ほら!』と嬉しそうに見せて

くれた。

確かに穴は開いているけれど百円玉だった。

アタシも探してみると銀色がキラリ！五十円玉を発見！

『Tくん！アタシも見つけた！でも、五十円とか百円とか、そんな子供料金みたいなのでいいのかな？』と言うと

『うーん。行きたい場所の料金がわからないから、とりあえず持っている小銭を全部出していこう』と兄。

兄はすぐに財布を取り出して小銭を出していた。

アタシの手にはいつの間にかバッグがあった。

持っていたバッグの中から財布を探すも中々、見つからない。

『思えばAちゃんが助けたスーツの人ってどこに住んでいるの？

近ければ一緒に帰れたのにね』と兄はアタシの様子を見ながら聞いてきた。

『うーん。ちょっと待ってね。小銭出したら貰った名刺をしてみるから……』とやっと財布を引っ張り出して小銭を出した。

財布をしまいながら階段を上ると、驚きの光景が

そこにあると思っていた線路は無く、目の前には大きな道路があった。

『え？ 駅じゃないの？』とアタシが慌てていると

『Aちゃんあれ見て』と兄が後ろを指差す。

言われた方を振り返ってみると、停電したかのように真っ暗な場所があった。よく見てみると、そこはさっきまでいた駅ビルや交差点の辺り一帯だった。

ビルもお店も信号も何もかも全部、電気が消えて真っ暗になっていた。

たくさんの方が歩いていたはずなのに誰もいない。

真っ暗な方に戻るのも怖かったので、そのまま道路を歩いてみることにした。

道路の周りには民家も並んでいて、普通に自動車もたくさん走っていた。

『こつちはまともな道かな。このまま歩けば知っている場所に辿り着けそう』

アタシは意気揚々と歩いていたら、青緑色のお面を付けた二人乗りバイクが通過。

(えっ………今は………)

今回は夢であってもアタシ一人じゃなくて兄と一緒に
ちゃんと言わなきゃと思って

『Tくん。今ね、変な奴が通過したから、何かおかしいかも……』
と兄に声をかけると

『うん。僕もそう思ったんだ。後ろ振り向くと今まで通り過ぎた車が
が停まっているんだよね』

そう言われて振り返ると、確かに通過した車が綺麗に並んで停まっていた。

近くの車を覗くと誰も乗っていない。

『Aちゃん。さっきのスーツの人、大丈夫かな？　もしかすると、その人も帰っていないかもね』

そう言われてスーツの人のことをすっかり忘れていたことに気付いたアタシ。

慌てて名刺を見てみると、かすれた様に文字が消えていて読めなくなっていた。

『Tくん。どうしよ……』

アタフタしていると『僕らもやばいかもしれないから、早く此処から離れよう』と言いながら兄は近くにある車のドアを開けようとした。

兄は免許は持っているけれど、車を持っていないので全く運転できないペーパードライバー。

『Tくん。この夢は変な所で現実とリンクしているの。いくら夢でも運転は厳しいかも……』と言つと

『そうなんだ。じゃあ地道に歩くしかないね』と兄は苦笑いしながら歩き出した。

『ねえ。Aちゃん。夢の中の僕だから気付けたことかもしれないけど……さっきから？　アーイー？　って声みたいなのが聴こえるんだよね。Aちゃん、何か心当たりない？』

そう言われて耳を澄ますと、確かに聴こえてきて鳥肌が立った。

時々【アッチノ世界】と現実が重なりすぎて、なかなか夢から覚めないことがある。

上手く言えないけれど

朝起きて、仕度をして、出かけたはずなのに夢だった。

なんて誰でも一回は経験したことがあるような夢のもっとしつこいタイプというか……。

起きたいのに起きられない。

夢の中で夢を見て、起きる動作を十回以上繰り返す。

起きて、今が現実なのか必死で確かめなきゃ気付けないぐらいリアルな夢。

例えば

今が現実なのか友達に電話をかけて確かめようとしたら、携帯がオモチャに変わっているとか、夢だってわかりやすいのだったらすぐに気付くけれど……

その夢の後、物音で起きると廊下の電気が点いていて、旅行に行っていたはずの両親が何故か姉と一緒に帰ってきた。

お母さんが具合悪くなって途中で帰ってきたのかも。この物音が無きや夢から起きられなかった……。

そう思つて『帰ってきたの？』なんて言いながら部屋を出ると、廊下は真っ暗。

部屋には誰もいなくて目が覚めた。そのままベッドから起き上がると何事も無い。

やっと夢から起きられたんだ……。

安心してると、どこからとも無く？アーエー……？と民謡のよう

な声が小さく聴こえてくる。

陽炎のように辺りがウネウネしだして『まだ夢なんだ!』と違って
体中を叩いて目を覚ませようとした。

また目が覚めて『今度こそ!』と思うと、いつの間にか眠ってしま
っているのかやっぱり民謡と陽炎が……。

それを繰り返すこと数回。

最後は友達からの電話でやっと現実に戻れて『これ夢じゃない?』

現実? 本当に夢じゃないよね?』なんて泣きながら確認したのを
思い出す。

そんな感じで、民謡と陽炎がセットになっている夢は自分でも上手
いこと逃げたり、コントロールが出来ない危険な夢。

まるで夢が生きているかのように【殺人ロード】の夢ともまた違う
恐怖心に襲われる。

夢がアタシを【アッチノ世界】に取り込もうとしているのではない
かと思ってしまうぐらい自分にとって怖い夢。

だから、今回の夢も知らない場所だらけで、身構えなきゃいけない
夢だったのに、兄がいるから安心してしまったアタシは民謡に全く
気付けなかった。

『Tくん。もしかするとこの夢から出られないかも……』

そう言った途端に民謡の音量アップ! ！いつの間にか周りには陽炎だ
らけ。

どこからか? ザリザリ? と音がする。

よく見ると、アチラコチラの陽炎の後ろから色取り取りのお面を全
身につけた方々がゆっくりと近づいてくる。

異様な光景に『怖い……怖い……』と思っていたら突然

？キィーヤアーツ！

物凄い叫び声で目が覚めた。

？ガバツ！？と起き上がると、姪がアタシの部屋にいて

『Aちゃん！ 遊びに来たんだから起きなさいよ！』と耳元で大騒ぎしていた。

耳がジンジンする。

これは現実だな……と思えた瞬間だった。

姪のおかげで最悪の事態は免れた気がするけれど……
凄く長くて、凄く嫌な汗をかいた夢だった。

【博物館】： 広場で石像と全面戦争】

ある日の夢は【博物館】の中にいた。

絨毯張りの長い廊下。木で出来た大きな階段。演奏ホールみたいな場所もある。

【墨色ワールド】の中にある博物館の外は夜。だから、建物の中はいつも電気が点いている。

歩いていると【アッチノ世界】のどこかに繋がる何かを発見して

日記に書こう！とか、これが此処だったんだ！なんて夢の中で思ったのに、目が覚めてしまった。

またすぐに眠ると、上書きするように【アッチノ世界】での悪夢に消されてしまって、書きたかったことが全然思い出せなかった。

次に見た悪夢も前に来た場所から始まった。

遊具みたいな巨大な物が置いてあって、一段上った場所には灰色の建物がある。

そこは【広場】だった。

前に来た時は昼間で安全な場所だったけれど、今回は夜だったので少し不安になった。

急に誰かを追いかけてきやいけなくなつて、でも追いつかない。

【白い廊下：広場と怪しい屋台】の夢みたいにくさくさいう時は、絶対に何かが追いかけてきたり襲ってくる……。

そう思っていたら

?ドス! ドス! ドス!?

やっぱり謎な石像が大群で追いかけて来た。

石像はいきなり近くにあったコンクリートの塀を殴り倒した。

(あんなのに殴られたら死んじゃうよ!)

そう思った瞬間

?カン! カン!?

『みんな、ひるむなー!!!』

突然、凄い物音と叫び声が出た。

振り返ると、いつの間にか広場にはたくさんの人が出て、各々で武器を持って石像と全面戦争みたいな状況になっていた。

大砲のような物まで設置されていると思ったら勢い良くそこから出てきたのは砲弾ではなく、砂か何かを詰めた空き缶だった。

それを避けながら数体の石像がアタシに向って近づいてきたので、側にあった遊具を上手く使って武器にしてみた。

すると、それを見た周りの人達がアタシのことを指さして叫びだした。

『救世主だあ!』

面倒臭くなってしまったアタシは、その人達にも石像にも見つから

ないように木がたくさん茂っている方へ逃げようと走った！

その瞬間、目が覚めました。

起きてすぐにふと、あの石像達も【研究所】に製造されたんだろうか……なんて考えてしまいました。

やっぱり夜の【アッチノ世界】は危険がいっぱい。
みなさんも夜の夢は気をつけてください。

【黒羽根さん　：　読書男子と左消して！】

ある日の出来事。

アタシの部屋に突然、兄が来た。

アタシはパソコンで作業をしながら

『そうそう！　Ｔくん。ちょっと前にね、怖い夢を見てＴくんが出てきたんだよ！』と【ゆらゆら　：　仮面道路】の話をしてみた。

『怖い夢に僕が出てきたんだ？　不思議ですねえ』と言いなながら？
ガサゴソ？と何かをやっている兄。

アタシの部屋は狭いのでパイプベッドを使っていて、その下に洋服をかけたたり物を置いたりしている。

その洋服の奥。

パイプベッドの角辺りに人、一人が入れるか入れないかぐらいのスペースがあるのだけれど……

兄はそこに入っていく。

『ねえ……何してるの？』と聞くと

『ちょっとねえ……』と言いつつ兄が消えた。

（え？　なんで？）

慌てて兄がいた場所を見ると、下へ繋がる小さな階段があった。アタシの部屋には、そんな階段はありません。

そう。

現実だと思っていたこのやり取りは夢だったのです。

やられた！！と思いながら、恐る恐る狭い階段を下りていくと
すぐ壁にぶち当たった。

真っ暗闇の中、何かないかと手探りしていると目の前の壁が突然開
いて前に転がり倒れるアタシ。

『やだあー！ Aちゃん何してるの？』と笑い声が……。

慌てて起き上がると、【学校】の教室みたいな場所にいた。
兄の姿はなく、振り返ると出てきた場所はロッカーだった。

壁も床も机や椅子も真っ白。

左側には大きな窓があつて、日の光が入り込んだ教室は全体的に眩
しかった。

席に座っていた何人かの女の子達がアタシを見て笑っている。

知らない教室、知らない友達？

警戒モード全開で座り込んでいると、一人の女の子が起こしてくれ
た。

立ち上がると教室の教壇の左側に円形の小さなソファーと本棚が置
いてあるのが見えた。

なんと！！

そのソファーに黒羽根さんらしき男の人が座って本を読んでいる！
でも、また服装が違う。

白いシャツに黒のネクタイと黒のカーディガン、黒のパンツに靴と

【未来ビル：メガネ男子】に出てきたメガネ男子みたいな格好。それに似たようなメガネをしている。でも、髪型は黒羽根さんと同じ感じ。

(寝る前にメガネ男子と黒羽根さんのことを考えたから、ミックスされちゃったのかしら……。)

なんて思った。

アタシは読書男子に無性に話しかけたくなくなって行こうとしたら起こしてくれた女の子がアタシの肩を掴んで

『Aちゃん！ 何してんの！ 次の授業は移動だよ』と教室の外へ強引に出されてしまった。

押されるまま廊下に出て、すぐ横の階段を下りて行くと突然、電化製品売り場が目の前に現れた。

(え？ もしかして、マネキンショッピングセンター？)

そう思って振り返ると、下りてきた階段も一緒にいた女の子も消えていた。

見えるのは売り場とマネキンばかり……。

(どうにかして、あの読書男子がいる教室に戻りたい！)

フラフラしながら必死に階段を探すアタシ。

でも、フラフラし過ぎて怖い夢になっても嫌だったので、あまり動くことも出来ずにベンチに座っていた。

すると突然、浴衣を着た女の子がアタシの前を通過。急いで追いかけると気付いてくれた。

『あれ？ アナタまだ浴衣着てないの？もしかして会場がわからない？ 教えてあげる』と言うので、女の子について行くと外へ出た。

側に体育館みたいな入り口が見える。

もしかして、また学校に繋がっているのかも？と思って中に入ると

中は体育館ではなく外だった。

大きな木がたくさんあって床は室内スキー場みたいに丘になっていて、枯れた落ち葉がいっぱい敷き詰められていた。

体育館の中は夜なのだろうか。

真っ暗の中、教室にいた女の子達が落ち葉の上に座って何かを見ていた。

一緒になって覗いてみると、和風な色の名前と花の柄が書かれたボードがあつて、浴衣の色と柄を選んでいようだった。

それを横目に教室にいた読書男子を必死に探すアタシ。でも、この場にいるのは女の子ばかり。

？カシャ！ カシャ！？

ちよつとテンションが下がっているアタシの背後から音がした。

振り向くと、丸刈りで小デブなオッサンがカメラ片手に近づいてきた。

『後で撮る時の写る練習しなきゃねえ』と言って

？カシャ……カシャ……カシャ……カシャ……？写真を撮るオッサ

ン。

ボードを見ていた女の子達が逃げるように一斉に丘を降りていった。乗り遅れたアタシも慌てて下りて行くと、上は真っ暗なのに下は昼間のように明るかった。

昼間の暖かい風に吹かれて落ち葉がぶっ飛んできた。

(外国映画のワンシーンみたいだなあ……。)

なんて思っていたら、いつの間にか女の子達はどこかへいなくなっていて、アタシ一人取り残されていた。

『そう！ そのままの立ち位置で顔の左消して！ 顔の左！』と言いながらオツサンが近づいてきた。

後ずさるように離れると

『おっと！ そこもいいねえ！ でも、もうちょっと顔の左消して

！ もうちょっとでいいから……』って……

『顔の左消すってどういいうことじゃー！』

なんてイラッとした瞬間、目が覚めました。

『顔の左消して！』とはどういう意味だったのだろうか……。

読書男子とお話したかったなあ。

【屋根のない洋服屋】：夜の世界】

左にこだわる謎なカメラマンが現れてから数日後の夢。

アタシは【白い廊下：広場と怪しい屋台】で出てきた真っ白な廊下に立っていた。

大きな窓ガラスから日の光が強く入る。

真っ直ぐ進むと、突き当たったところに前にもあった扉が現れた。前は開いていたけれど、今回は鍵が閉まっているのか開かない。

突き当たった右側には見覚えのある銀色のエレベーターがあった。

（エレベーターにはいい思い出が無いな……。）

なんて考えていたら

?コツン……コツン……?

最初に立っていた場所の奥に階段があるのか、誰かが上ってくる音が聴こえる。

（殺人鬼……?）

目を逸らすことが出来なくてじっと見てみると、上下白い服を着た看護師みたいなオバサンが歩いてきた。

やたらテカテカしたクルクルパーマの黒髪と真っ赤な口紅。

（殺人鬼じゃないけどコワッ!）

と思いつつ、動けない。

この感じ前の【ゆらゆら…】の時と似ている。
でも、この時のエレベーターは地下にあって、廊下もこんなに明るくない。

それにあの地下にいた看護師みたいな人はノイズみたいに体がブレていて、このオバサンみたいにはつきりした姿ではなかった。
オバサンは無表情とも何とも言えない顔で近づいてくる。

?スィー……?

動けずにいるとエレベーターが勝手に開いた。

急いで乗って階数の書いていないボタンを適当に連打してみた。
扉がゆっくりと閉まりだして、どうにか逃げられる!と思った瞬間

?ガシャン!?

物凄い音と同時に閉まりかけた扉の間から真っ赤なマニキュアをした両手が出てきた。

『乗せてよ』

謎なおバサンが扉をこじ開けてニヤケた顔で入ってきた。
扉が閉まるとエレベーターは下へ。

前の悪夢と同じで何階にいて何階に向かっているのかわからない。
不安になっていると、ある所でエレベーターが停まって扉が開いた。
目の前には子供みたいに背の低い、小さなお爺さん達がたくさん立っていた。

アタシが降りようとすると看護師のオバサンが腕を掴んできた。

カ一杯振り払ってエレベーターから一步降りた瞬間
お爺さん達が一斉にエレベーターの中へ入っていった。

オバサンがなかなか降りられない間に先に進むと、そこにはたぐさ
んの本と大きなソファアームがいくつも置かれた図書館のような場所だ
った。

小さなお爺さん達が本を読んだり並べたりしている。

本棚の間を縫って進んでいくと、また見たことのある大きな木の階
段があった。

足元を見るとやっぱり見覚えのある絨毯。

もしかして此処って前の夢に出てきた博物館みたいな所？

その時の夢を思い出しながら辺りをよく見渡した。

前に見た木の階段は下りだった。今、目の前にある木の階段は上り。
この上には博物館みたいな建物があって、その下の階は図書館なの
だろうか。

上ってみたいけれど、階段は鉄の門のような物で封鎖されていた。

どこへ行こうか迷っていたら

『先へ進みたいのならこつち』と声をかけられた。

振り返ると、大きなメガネをかけた小さなお爺さんがいた。

手招きする方へ行くと、またエレベーターがあった。

さっき乗ってきた銀色のエレベーターとは違って、茶色いオシヤレ
なエレベーターだった。

『あの女に捕まると面倒だから、これに乗って扉の開いた場所で降

りなさい。私もどこに着くかはわからないけれど、とにかく進みなさい』と物凄く適当なお爺さん。

『おーい！ 女が降りたぞ！』と遠くから違うお爺さんが叫んだ。

？リン！ リン！？

メガネのお爺さんがエレベーターの横にあるベルを鳴らすと扉が開いた。

『ほら！ 行け！ 行け！』と言われるがまま乗ると扉が閉じた。

ゆっくりとエレベーターが上に向って動き出した。

同時に扉にあるガラス越しから凄い形相のおバサンと杖で応戦しているお爺さん達の姿が見えた。

しゃがみながらギリギリまで様子を見たけれど、すぐに見えなくなってしまった。

あのおバサンとお爺さん達はどうなったのだろうか。そして何故助けてくれたのだろう。

【アツチノ世界】では悪夢も多いけれど、助けてくれる人も多い。不思議だ。

そんなことを考えていると、エレベーターが停まって静かに扉が開いた。

目の前は夜の森。

(何か嫌だなあ……………)

動けずにいると突然

?ヴウー!!!?

エレベーターが重量オーバーの時のように鳴り出した。
まるで降りると言われているような気がした。

あまりにうるさいので降りると、ピタツと音は止んで扉が閉まった。

(とにかく前に進んでみよう……。)

チキンなアタシは少しずつしか進めない。

辺りは暗いけれど、また前に来たことのある場所だった。

左側には丘があつて、右側には木が並んでいる。

此処は『顔の左消して!』のカメラマンが現れた場所だと思った。

あのオッサンがいないか警戒しながら木の間を通って抜けると、また見覚えのある場所が

そこは前に謎な石像達が現れた【広場】だった。

(此処に繋がるのか!【アッチノ世界】の配置が結構、明確になつてきたかも……。)

なんて興奮していたら

?ドス! ドス! ドス!?

嫌な音が聴こえてきた。

振り返ると、一体の石像がアタシに向かって走ってきた!
どこに逃げようか右往左往していると

?ワン!?

小さな柴犬が足元に座っていた。
アタシと目が合うなり猛ダツシュ！
緑色の錆びたフェンスが途切れている方へ消えていった。
慌てて追いかけると、細い路地に入っていくのが見えた。
路地を抜けると住宅街みたいな場所に辿り着いたけれど、柴犬の姿
は見当たらない。

コンクリート打ちっぱなし住宅みたいな建物がたくさん並んでいて、
間に同じ素材の凸凹した階段みたいな路地が続いていた。
夜だからか辺りは静かで暗い。

（此処はどこだ？）

フラフラ歩いていると

?ワン！ ワン!?

犬の鳴き声が聴こえた。

さっきの柴犬だと思って声のする方に曲がると、柴犬が座っていた。
アタシを見るなりまた猛ダツシュ！

追いかけると明るい場所が見えてきた。

暗くてすぐにはわからなかったけれど、良く見るとそこは【屋根の
ない洋服屋】だった。

屋根がないから家の中の灯りが外に出て、辺りがオレンジ色に光っ
ている。

中に入ってみると、綺麗な女の人が椅子に座って本を読んでいた。
前に昼間に来た時はお兄さんがいた。

目が合うと女の人は

『あら！ いらっしやい。ビックリしたわ。どうやって此処に？』
と驚いた様子で近づいてきた。

説明しようかと思っていたら

『キミは商売上手犬なんだねえ。お散歩ついでにお客さんまで連れてきちゃって』と後ろから声がした。

振り返ると、前に此処にいたお兄さんが柴犬を抱っこしてワシヤワシヤと撫でていた。

『キミは前にも来てくれたよね。こいつが連れてきてくれたから良かったけど、この辺りを一人でうろついたらダメだ。危ないよ』

お兄さんは柴犬に頼りしながらアタシを見つめて言った。

『夜は気まぐれで要らないモノまで動き出す。今度来る時は前のように昼間だといいいね』

そんな風なことを言われた瞬間、目が覚めた。

【屋根のない洋服屋】の店主さんは【アッチノ世界】の色々を知っている人物だと思った。

今回の夢は映画のように重要な登場人物が多い夢だった。

【学校】：被害妄想なオッサン】

バレンタインの時期に見たある日の夢は【学校】から始まった。

前にも見たことのある教室に一人でいた。

（誰もいない……。）

一人だと思っていたら

？ガラッ！？

突然扉の開く音がして顔を上げると、坊主とも角刈りとも言えない髪形に黒縁メガネの太ったオッサンが入ってきた。生理的にアタシの苦手な雰囲気の人だった。

（え……。何だろ？）

警戒モードなアタシ。

『まだ居残りしているのかあ？ もう帰れよ』

オッサンはアタシをじっと見つめながら偉そうな雰囲気ですべてきた。

（なんだ、先生ね。）

なんて安心して、とりあえず教室から一歩出ると……

『ちよつと来い!』

またオツサンが声をかけてきた。

言われるがまま近くに行ったら突然、両肩を掴まれていきなりディープなチュー……。。

夢の中で吐き気を感じるぐらい、とんでもなくショック。

仰け反るように勢い良く後ろにひっくり返ったアタシ。

そんなアタシを見つめながらオツサンが何かを言いながらジリジリと近づいてくる。

『僕も前からキミと同じ気持ちだよ。さあ、もっと愛し合おう!』

本気で触れられたくなくてダッシュ!

近くにあった階段を駆け下りた。

前にも夢の中で元彼に追いかけられて同じ階段を駆け下りたことがある。

でも、元彼の時は下の階に柵みたいな物があつて通れず、一階まで下りなきゃいけなかった。

今回は柵は無かったけれど、オツサンが動けるデブと言われるタイプだったのか物凄く走るのが速い!

すぐ追いつかれそうになるので、とにかく下へ行くのに必死だった。

見覚えのある一階に到着。

前には無かった柵が一階の階段横にあつたので勢い良く閉じると? ガチャン!?!と鍵が掛かったような音がした。

(オッサンが柵を開けている間にどこかへ逃げなきゃ！)

慌てて辺りを見渡す。

元彼に追いかけられた時は階段を下りて真っ暗な右側に逃げた。でも、そっちに逃げるといつの間にか【どこでもトンネル】になっていて【殺人ロード】に辿り着きそうだったのを思い出す。

(今回は左！)

そう思つて廊下を進むと笑い声が聞こえてきた。

忍足で静かに進むと、明るい場所に辿り着いた。

明るいと言つても夜の建物の中にいるみたいだった。

そこにはL字型のカウンターがあつて、上下淡いピンク色の看護師風な服を着た綺麗なお姉さん達が三人いた。

カウンターの外側に二人、内側には一人しかいないのに外にも内にも丸椅子がたくさん並べられていた。

(此処は学校だよね。それとも【停電病院】に繋がっている？ それとも【宿泊施設】か【研究所】か【未来ビル】の地下？)

なんて色々と考えていた。

この間、違う場所で似たような格好をした謎なオバサンに追いかけられる悪夢を見たばかり。

(お姉さん達も怖い人かもしれない……。)

悪夢を思い出してドキドキしていたら

『おい。どこだあ？』

あの太ったオッサンの声でした。
話していたお姉さん達も一斉に声のする方を見る。

(どっしり……。)

アタフタしていると、内側にいたお姉さんがアタシに気付いて『どうしたの？』と声をかけてきた。

『いきなり気持ち悪いオッサンにチューされて……』

さっきあった出来事を半泣きで話すと、逃げていることを察知してくれたお姉さん。

『こっちに来て！』

カウンターの内側にある大量の椅子の奥にアタシをかくまってくれた。

『あの人がさあ……』

お姉さん達は何事も無かったように会話を始める。

？ハアハア……？

暫くして息を切らした音が聴こえてオッサンが来たのがわかった。

『ねえ。女の子見なかった？』

お姉さん達に聞くオッサン。

『いえ。見かけてないですけど』とお姉さん。

『嘘だ！ 隠してるんだろ！ どこだ！ 僕達の邪魔をしないでくれ！』と純愛ドラマのように暑苦しく叫ぶオッサン。

『そんなこと言われたって知らないです！』

お姉さんも負けない。

『いいや。此処にいるんだろ？』

それでも無理矢理カウンターの内側に入ろうとするオッサン。大量にある椅子をグイグイ押してきて隙間にアタシが隠れてないか念入りに確認している。

椅子を押された時は何とか大丈夫だったけれど、椅子が動いたせいで角度によってはオッサンに見えてしまうような形になってしまった。

(こつこつ場合って絶対、見つかるんだよな……。)

なんて思いながらオッサンの様子を隙間から見るアタシ。

『どこにいるんだ……寂しいじゃないか……』

ブツブツ言いながらオッサンが他の場所に移動しようとかウンター横を通過した瞬間

やっぱり目が合ってしまった……。

『こんな所にいたじゃないかあ!』

オッサンがカウンターの中に入ろうとしたのでお姉さん達が止めに入る。

カウンターに入るのは諦めて、ぐるっと回ってカウンター越しからアタシの隠れている場所を覗き込もうとするオッサン。
慌ててお姉さんがアタシを引っ張り出してくれた。

『この子、嫌がっているじゃない!』

アタシを抱きかかえながら数歩下がってお姉さん達が怒鳴る。

『嫌がっているはず無いじゃないか! 僕達は愛し合っているんだ!
! この間だって、僕にこんな素敵な手作りチョコと愛のメッセー
ジをくれたんだ!』

手には小さなコンビ二袋を持っていた。
お姉さんと一緒に袋の中を覗くと市販のチョコレートとシワシワの
白い紙が入っているのが見えた。

「私は先生が大好きです。ずっと一緒にいたいです。」

そんなような文章が滲んだボールペンのような物ですらすらと凄
い汚い字で紙に書かれていた。

アタシも字は綺麗じゃないけれど、アタシの字ではない。

アタシが首を振るとお姉さんは『うん。見てわかるから大丈夫。手
作りじゃないし、手紙も酷い。明らかにこの人がおかしいね』と頷
いてくれた。

『自分で自作自演？ 妄想も大概にしたら？』

お姉さん達にズバズバ言われてオッサンが『うるさい！』とプルプル震えながら怒っているところで目が覚めた。

お姉さん達が助けしてくれたのは嬉しかったけれど、オッサンにデュープなチューをされたのが何よりショックだったアタシはすぐに起き上がって歯を磨きました。

夢の中で嫌な相手に肩を捕まれた時は、気持ち身構えていた方が良いかもしれません。

【黒羽根さん】： 白い階段と金髪少女【

前にも書きましたが……

【黒羽根さん】の夢と【アッチノ世界】の夢は別のモノだと思っていた。

【アッチノ世界】で似たような人が現れることもあるけれど……それでも違うと思っていた。

けれども、ある日の夢は彼と【アッチノ世界】が繋がっていると思ってしまうような発見をした。

軽トラックに乗った見知らぬ男の人がアタシをある場所へ送ってくれることになった。

【アッチノ世界】の我が家の玄関を右手にすると大きく分けて三本の別れ道がある。
そのうちの一つ。

【迷路街】に繋がっている真ん中の道をトラックで走っていた。

【スケルトンハウス】を通り過ぎて、更に真っ直ぐ進むと今度は十字路の分かれ道が現れる。

十字路の右側は【追われる右ロード】に繋がっている。
反対の左側は【再会ロード】になっている。

(このまま【迷路街】に向かっているのかなあ……)

なんて思っていたら突然、十字路の右側から球体に手足の付いた白黒の巨大なロボットが猛スピードで走ってきた。

そのロボットは轟音をたてながらトラックの横をすれすれで通過。

『怖かったあ……』と深呼吸していると、すかさずもう一体通過。

(うわっ……右から来たってことは大体追いかけてくるんだけどなあ……今日は真ん中の道だから大丈夫なのかな)

なんて考えていたら見知らぬ男の人がバックミラーを見て一言呟いた。

『やべえ……』

『何が?』

アタシも後ろを見てみると、通過したはずのロボットがピタリと停まってゆっくり方向転換した。

『キミが追いかけてくるって考えるからだよ! 逃げるぞ!』

見知らぬ男の人が叫んだ。

『アタシのせい!?!』

驚いている間にロボットが動き出した。

見知らぬ男の人がトラックを真っ直ぐ急発進させたと思ったら、すぐさま急停止。

『なんで止まるの!?!』

イラッとしながら前を見ると、進もうとした方向にもう一体別の口

ポットが出現。

『降りるぞ!!』

見知らぬ男の人はトラックを乗り捨て右の道へ走る！

アタシも慌ててトラックを降りて走りながら振り返った瞬間、ロボ
ットはトラックに突っ込み炎上。

『危機一髪!』

鼻息を荒くしながら前を見ると、見知らぬ男の人はいつの間にか凄
い前を走っていた。

どうにか追いつこうと頑張っている途中……

視界の端っこに真っ白な何かが見えた。

気になって立ち止まると、奥まった所に真っ白な階段が続いていた。
それは【黒羽根さん】のいる部屋にあった階段と似ていた。

空に向かって五段ぐらいあって、その先はお風呂に白い入浴剤を入
れた時のように真っ白くモワモワとうごめいていた。

(この階段を上げれば黒羽根さんに会えるかもしれない……)

そう思って二段ぐらい上りかけると、何か視線を感じる。

右側を見てみると、フェンス越しにアパートが建っていた。

その一階の左端辺りでバーコードヘアの謎なオッサンがフェンスを
掴んでアタシを見張るかのように睨んでいる。

オッサンのいるアパートは前に夢に出てきたアパートだった。

そのアパートの二階にアタシが住んでいる夢。

(あんなオツサンいたかな……)

考えていたら突然、誰かがアタシの手を掴んだ。

『こつちに来て!』

振り向くとアタシの後ろに金髪の青い目の女の子が立っていた。

引っ張られながら【追われる右ロード】を進むと、そのまま我が家に辿り着いた。

息つく間もなく家の中に入る女の子。

アタシの部屋に向うと、女の子はアタシの服や下着を引っ張り出して着替え出した。

『私がいる限りアナタはあの階段を上ることが出来ないわ。アイツが見張り続けているからね。私もどうにか帰りたいけど、アナタがないと帰れないの。だから一緒に来て欲しい』

着替えながら説明してくれたけど、よくわからない。

『どつやって帰るの?』

『とにかく私を此処の人に見られないように隠しながら一緒にいて来てくれればいいの』と簡潔な返答。

(何だかファンタジーな展開になってきちゃったじゃない!)

一人でドキドキしていたら外から何か?ガヤガヤ?と音がする。

『こつちに来て』

女の子はまたアタシの手を取って我が家の洗面所のドアを開けた。するとあるはずの洗面台はなく、目の前には食料品の棚がずらりと並んでいた。

『スーパー？』

戸惑っているアタシに構わず女の子はどんどん先へ進んでいく。

そのままスーパーを出ると、また見覚えのある光景が……

そこはお客も店員もみんなマネキン人形の「マネキンショッピングセンター」だった。

？ギシギシ……ガタガタ……？

マネキン人形達が音をたてながら動いて買い物をしている。

(我が家の洗面所と此処は繋がっているんだ……)

驚いていたら、女の子が突然立ち止まった。

『アナタのバッグ忘れた。私がドアの外に出たから奴等はいなくなっているはず。ねえ……戻って取ってきてくれない？ 私はあそこに隠れているから！』

そう言い残して女の子はすぐ側にあった女子トイレに入ってしまった。

(奴等って……さっきのガヤガヤしたやつかな……)

少しビビリながらスーパーの奥にある扉を開けてみると、やっぱり我が家の廊下に出た。

アタシの部屋に行くときアチラコチラにたくさんの足跡が残っていた。部屋を見渡してみると女の子が着ていた服の横にアタシのバッグが置いてあった。中を見てみると財布など、入っている物はいつもと変わらない。それを持ってまた洗面所のドアを開けるとやっぱりスーパーがあった。

そのままスーパーを出て女子トイレに入って閉まった扉をノックすると、女の子はそつと扉を開けて『ありがとう』と言いながら個室から出てきた。

『急いっ！』

二人でトイレの外に出た瞬間

？ザンツ！？

マネキン人形達が一斉にこっちを向いた。

（え？ マネキン人形に触れてもいないのに何故？）

オドオドしていたら

？バリツ…バリバリ…？

いきなりマネキン人形にヒビが入り始めた。

バラバラと崩れ出したと思ったら、マネキンの中からアパートにいた謎なオッサンが現れた！！

しかも、マネキン一体につきオッサン一人だからアチラコチラに大勢いる。

『アナタの服を着ていても見つかってしまつとやっぱりこつなるか……逃げるよ!』

女の子は叫ぶとアタシの手を掴んでダッシュ!

そろそろと追いかけてくるオッサン達。

女の子は家具売り場へ入った。

『違う……違う……』

カーテンコーナーに飾ってある遮光カーテンを捲りながら呟いている。

(隠れるのかな?)

じつと見ていたら『あつた!』と言叫んで女の子はアズキ色の遮光カーテンの中へ入った。

アタシも一緒にカーテンを潜ると、フローリングが見えて洋室に出た。

(今度はどこ?)

ビックリしながら部屋の窓の外を見ると、また見覚えのある光景が。外の花壇には【カラクリ屋敷：トマトの唇はセクシー?】に出てきた巨大なトマトの苗がいた。

『あれがいるってことは……此処は【カラクリ屋敷】なんだ……』
なんて呟いていたら

?コッソソ……コッソソ……?

誰かが階段を上ってくる音がする。

(さっきみたいにマネキン人形とオッサンみたいな事態になっても困る！)

そう思ってたアタフタしていると女の子はクローゼットの中に入った。

(そこにはトマトの苗が……！)

焦ったけれど、普通に静かだった。

それでも気になって中を確認しようとしたら

『あら。Aちゃん来ていたのね』と後ろから声を掛けられた。
振り返ると前に招いてくれた女友達ではなく、ゴージャスなドレスを着たお姉風な男の人が腕を組んで立っていた。

『下でお茶でも飲みましょうよ』

そう言われてクローゼットの中にいる女の子が心配になった。

けれど、とりあえず一緒について行こうと思って階段を下り始めた瞬間、目が覚めてしまった。

続きが気になってすぐ寝てみたけれど、普通に夢も見ず熟睡してしまっただ。

あの金髪の女の子はどうなったのか、そしてなんだったのだろうか……。

女の子とオッサンがいなければ、十字路の右側にある真っ白な階段

を上って【黒羽根さん】に会えるのかもしれない。
けれども、女の子をどこかへ帰さなきゃいけない。

そのためには、あのオッサンから逃げ隠れしながら【アッチノ世界】
に出てくる場所を巡らなきゃ行けないってことだろうか……。

なんにしても、マネキン人形からオッサンが出てきた時は本当に恐
ろしかったです。

【マネキンショッピングセンター：探検】

> i 1 3 5 4 8 — 1 8 9 2 <

眠る時、横になって目を閉じるとラジオのように頭の中に色々な音や声が聴こえてきて眠れないことが多い。
そのままどうにか眠ると【アッチノ世界】にいる。

マネキンショッピングセンターの中も同じように不思議な音がざわついている。

人ごみの中にいるようで、何か違うような。

マネキン人形が動く？ガタガタ？する音と、話し声のような音。

近くにいるマネキン人形に耳を傾けると、話し声のような音は全く聴こえなくなる。

お店に流れている音楽もそう。

何の音楽なのかわからない。

聴こうとすればするほど聴こえなくなる。

そんなマネキンショッピングセンターにしていると何かに追っかけられて逃げることが多い。

けれど、ある日の夢は何だか違った雰囲気だった。

夢の始まりはカフェにいた。

別の夢で見たことのあるカフェ。

スケルトン素材で出来たカラフルなテーブルと椅子。

アタシの目の前には赤いストローが入った空っぽのコップがあった。コップの横には白い紙ナプキンが置かれた茶色いスケルトンのお皿が並んでいた。

周りにはカップルみたいなマネキン人形達と一人で本を読んでいるマネキン人形。

今回は夢の中で夢だと気付けたので、行ける範囲で探検してみようと思った。

そつと席を立つと、いきなり何かが背中を引っ張った。

慌てて振り返ると、珍しくリュックサックを持っていた。

引っ張られたと思ったのはリュックサックのポケットのネットが観葉植物の葉に引っ掛かっただけ。

観葉植物と言っても本物の植物ではなく、葉っぱがスケルトン素材の綺麗な置物だった。

(前の夢ではカフェの隣にオシャレな本屋さんがあったはず……)

そう思ってお店を出ると、やっぱりあった。

立ち読みしているマネキン人形がたくさんいる。

現実の世界で普段、お店にマネキン人形がいることを人間が気にしないのと同じように、マネキン人形達もアタシがいることは気にならないらしい。

ただ不安なことが一つある。

マネキンシヨップینگセンターの中で男の人に追いかけられた夢を見た時、逃げる勢いでマネキン人形に激突してしまったことがある。崩れるようにマネキン人形が倒れた瞬間、アタシに無関心だったマネキン人形達が一齐に振り向いて男の人と一緒に追いかけてきた。

逆の立場だったら、ディスプレイされているマネキン人形が突然、人に襲い掛かった……。

そんな感じなのだろうか。

それを思い出して、アタシはマネキン人形に触れないように慎重に
お店の中に入った。

最初に見えたのは雑誌専門のようなコーナー。

一冊手にとつて見ると

マネキン人形と風景のページ……洋服を着たマネキン人形のページ

……など載っているのは写真のみ。

文字という文字が一切無い！

気になって他の棚のハードカバーの本を見てみると、表紙もタイト
ルが無い。

絵や写真、マークとかラインとかデザインのみと言えはいいのかな
……。

中も文章は全く無く、数字と線が少しあるだけで白紙に近いページ
ばかり。

レシピ本も分量らしき数字は書いてあるけれど、作る過程や完成し
た料理の写真があるだけだった。

何だかモヤモヤした気分で本屋さんを出ると、隣にCDショップが
あった。

CDのジャケットも流れているミュージックビデオもマネキン人形。
視聴コーナーがあったので試しに聴いてみると、また色んな音楽が
混ざったような音が聴こえてくるだけだった。

此処には文字とか声、言葉が存在しない？
けれども、数字はある。

(うーん……変なの)

なんて考えながら本屋さんでCDショップをブラブラしていると喉
が渴いてきた。

(お金なんて持ってないだろうな)

と思いつつも持っていたリュックの中を見てみると、財布が三つも入っていた!

長財布と二つ折りの財布、それとガマ口の小銭入れ。

実際に持っている物と同じ小銭入れの中には、エメラルド色の穴の開いた平たい石が何個か入っていた。

【ゆらゆら】： 仮面道路】の話の中で【古びた改札】にいたお婆さんが持っていた物と同じ気がする。

二つ折りの財布を見てみると、カード入れの中に「CASH CARD」と書かれた銀色のカードが一枚あるだけで、お金らしきものは全く入っていなかった。

(マネキンショッピングセンターで使えるのかしら……)

なんて思いながら長財布を開けてみるとお金が入っていた!

けれど、良く見てみると福沢さんではなく顔の無い福沢さんらしき絵が描いてあった。

それに何だか小さい。

小銭入れを見てみると、入っていたのはプラスチックの小銭だった。

(これって……こどもぎんこう? まあ、これがマネキンショッピングセンターで使えるお金だろう……)

入っていた小銭をまじまじと見つめながら歩いていると、自販機を発見!

数字だけはあって、やっぱり文字は無い。

恐る恐るプラスチックの百五十円を投入。

? カラン……? ?

軽い音がした。

ホットのミルクティーのような缶があったので、押してみると出てきた。

先におつりを取ると、プラスチックの十円が三枚あった。

出てきたミルクティーを手にとってみると、異様に軽い。

でも、温かい……。

気になってすぐに開けてみると中身が無い!!

(えええええ……)

飲めないとなると益々飲みたくなる!

早歩きで最初のカフェに戻ってみた。

列に並びながら待っていると、ドリンクを受け取ったマネキン人形がいた。

そのマネキン人形が横を通り過ぎる時に手元を見ると、持っていたのは空っぽのコーヒークップだった。

(また飲めない……)

イライラしながら店を出て考える。

マネキンシヨツピングセンターの中にいくつかある出入り口の一つに、大きなエスカレーターがあつて、そこを上りきった所に今さっき出たカフェがある。

天井までガラス張りの凄く明るい入り口。

見下ろすとマネキン人形達がたくさんいた。

みんな? ガタガタ? とぎこちない歩き方をしている。

(下の階には何があるんだろう……)

気になって下りてみることにした。
エスカレーターを降りると、側にコックさんの帽子のイラストが描かれたレストランらしきお店を発見。
中に入るとマネキン人形のスタッフが案内をしてくれた。
お昼時ではないのか、そんなに混んではいなかった。
時計が無いから時間の感覚がわからない。

席に座るとメニューと空っぽのお冷を出された。

メニューもやつぱり写真と数字だけが載っているだけ。
パスタセットみたいなのがあったので、それを注文するためにマネキン人形のスタッフを呼ぼうと思ったのだけれど……
「郷に入れば郷に従え」を思い出す。

(周りにいるマネキン人形は話していないし、現実でマネキン人形が喋りだしたら怖いものねえ……)

そう思つて無言でマネキン人形のスタッフに向かつて手をあげてみた。

近づいてきたのでパスタセットを指差すと、頷いたような仕草をして戻つていったので一安心。

待っている間、窓越しからエントラスホームを眺めていた。

色んなマネキン人形が出入りしているように見える。

外国人のような顔があるやつ、のっぺら坊みたいなやつ……

木の素材だったり、スケルトンだったり……

大きさも様々。

(こんなにのんびり何事も無く、この世界を探検できたのは初めてかも……)

なんて思っていたらパスタセットが登場！
トレイにはパスタと小さなサラダが乗っていた。
やたらテカテカしている。
置かれたフォークでパスタを刺してみると硬い。

（サンプルじゃん……）

近くにいた親子の席を覗いてみると
お母さんの前にはオムライス、子供の前にはオシャレなお子様ラン
チらしきお皿が置いてある。
けれど、どちらも同じくテカテカしたサンプルだった。
でも、食べているような仕草はしている。
それを見たら余計にイラツとして、伝票を持ってレジへ向った。

数字しか書かれていない伝票を見て、マネキン人形のスタッフは何
かを打ち込む。

レジには「800」という数字が出た。

（パスタセットは八百円……）

頭の中で唱えながらお財布の中を見ると、お札は一万円もどきし
かない。

小銭入れにも八百円も無い。

仕方が無いので一万円もどきを出すと、ちゃんと五千円もどきと千
円もどき四枚、プラスチックの二百円のおつりを渡された。

長財布にお札を入れようとしたら、内ポケットに厚紙が入っている
のが見えた。

取り出してみると「¥」マークが書いてある。

（これもキャッシュカード？　じゃあさっきのカードは、もしかしてマネキンショッピングセンター以外の場所で使うのかな。そうなら【迷路街】とかで使えるお金が引き出せるのかもしれない！）

慌ててATMが無いか辺りを見渡してみたけれど無さそうだった。代わりに食料品売り場とドラッグストアを発見。

（期待は薄いけれど、食料品売り場なら何か口に入れられる物があるかも……）

恐る恐る中に入れてみたけれど、やっぱり野菜もサンプルだった。缶詰も飲み物も中身は空っぽ。

原寸大のおままごとをしている気分になった。

ドラッグストアに入ってみると、そこは普通な様子に見える。

けれども、風邪薬の箱を取ってみると軽い。

思わず中を開けてみると、錠剤の入っていないアルミだけが入っていた。

でも、入浴剤やシャンプー、化粧品の中身は入っている。

食べ物でも薬でも何でも、体内に入るものはサンプルか中身が無いらしい。

ちよつと面白くなって風邪薬の他にも開けてみようと思つて色々物色している途中で目が覚めてしまった……。

今回は本当に大きなトラブルも無く、穏やかな夢だった。

今度、違う場所でまた財布を持っている夢を見たら、マネキンショッピングセンターで出来なかったことに挑戦してみたくまりました。

【フリーマーケット】

ある日の夢も【マネキンショッピングセンター】みたいな場所から始まった。

でも、そこにいたのはマネキン人形ではなくたくさん人間だった。ショッピングセンター内のお店の前にある円形の通路で、フリーマーケットのように服や雑貨などが売られているようだった。

あるお店に行くと、凄く背の高いというか巨大な女の人が立っていた。

（この人のドキュメンタリーをテレビで見たことがあるなあ……）

驚きながらも何故かアタシは心の中でそう思っていた。

現実には絶対に存在しない見た目とサイズの女の人なので、夢の世界でドキュメンタリーを見たのかもしれない。

（確かスポーツ関連の人で、この人には素敵なパートナーがいるんだよなあ……）

そんなことを思い出して、そのパートナーの顔を浮かべながら見ていると、大きな服がかけてある後ろにその人がいた。

その人も背が高く浮かんだ顔よりも老けた感じだったけれど、素敵な笑顔を振りまいていた。

『あ！ 此処って さんのお店っすよね！』

突然、後ろからというか上から声がした。振り返ると二メートル近くありそうな男の人達がたくさん並んでいた。みんなバスケット選手みたいな格好をしている。どうやらアタシが引き連れていたらしい。彼等の話を聞いていると、そこに出ていた大量のお店は全部、謎のスポーツ用品の専門店だということがわかった。

『（人の名前）は何が欲しいんだっけ？』

自然とその中の一人に声をかけるアタシ。物静かそうな彼は欲しいメーカーと物をはっきり言ったのに、起きたら思い出せなかった。

専門用語みたいな言葉だったのは覚えているけれど、全く思い出せない。

『他のブースも見てきていいですか？』と言われて

『はい！ 行ってらっしゃい！』と張り切って言った瞬間に目が覚めてしまった。

【マネキンショップピングセンター】がマネキン人形以外の他の存在に使われる日があるのだろうか。

それとも【アッチノ世界】ではない、別の世界の夢だったのだろうか。

短い夢だったけれど、【アッチノ世界】のようで、そうじゃないよ。うな不思議な余韻を感じる夢でした。

【黒羽根さん：ピンクの猫撫で声】

気が付いたら小さなお店の中にいた。

たぶん、そこは【アッチノ世界】

ピンク色の壁紙、ピンク色や白の家具。

他にも女の子らしいフリフリの洋服や小物などが並んでいた。

お店の中は甘ったるい香りが強くしてクラクラする。

アタシの他に人はいない。

大きなショーウィンドーの外には緑色の扉のお店が見える。

昔の外国のような街並み。

ショーウィンドーの横には、見たことのある朱色の扉があった。

（黒羽根さんがいたアンティークなお店に似ているな……）

なんて思っていたら、突然扉が開いた。

洋服の掛かっている棚の後ろに思わず隠れてしまったアタシ。

扉から入ってきたのは化粧も格好もやたらと派手でコンパニオンみたいな女の人だった。

アタシには気付いていない。

『ねえ〜。久々に会ったんだし、奥でお茶でも飲んでいってよ〜』

扉の外には男の人がいるのか掴んでいる腕が見える。

『いやいや。今日はキミの場所なんだから邪魔するわけにはいかないよ。それに僕はちよつと行くところがあるんだ』

(ん……？ この声……)

棚の隙間からそつと見てみると、男の人はなんと黒羽根さんだった！
黒羽根さんの格好は黒いトレンチコートに黒いパンツ＆ブーツ。
相変わらず素敵だけど、何だかシヨック……！！

『いつもそつやって言つじやない。そんな寂しいこと言わないでえ』

クネクネ甘えるコンパニオン女子。

奥の扉を見ると薄いピンク色の扉があった。
前に黒羽根さんがいた時は真つ黒な扉だった。

此処に必要なモノが必要な時に使つて、必要な物を持っていく場所。
使う人で奥の扉の色や形が変わる。

そう言っていたから今はコンパニオン女子が使っているんだと思つた。

黒羽根さんはアタシの気配に気づいたのか……

『ほら。お客さんもいるみたいだし。僕は失礼するよ。また今度』
と言つてお店を出ようとした。

コンパニオン女子は振り向きもせずお店の外で『今度は絶対よ』
とクネクネ。

コンパニオン女子に笑顔で手を振りながらゆっくり歩いていく黒羽根さんの姿が窓から見える。

(黒羽根さんアタシに気付いてくれないかな……)

なんて棚の横から顔を出して見ていたら、姿が見えなくなりそうな瞬間に目が合った。

『あれ?』って顔をして戻ってくる。

思わずアタフタするアタシ。

真横の壁に色んなカーテンがあるのを発見!

前に【マネキンショッピングセンター】で売られているカーテンの奥が違う場所に通じていることがあった。

なので『今回もいけるか!』と思って捲ってみると壁……。

それでも壁にへばりつく様にカーテンの中に隠れて『どこかに通じて!』と必死になって壁をさするアタシ。

『やっぱりお茶する気になったの?』

嬉しそうなコンパニオン女子の声が聞こえた。

それを押し切るように『あの棚の後ろに僕の知り合いがいるんだよ!』と言いながらお店に入ってくる黒羽根さんの声が聞こえる。

「知り合い」と言われてまたショッケ!!

会えたのは嬉しいけれど、複雑な気分だから顔を見たくないと思っ
て焦るアタシ。

?……コツ……コツ……?

黒羽根さんのブーツの足音が近づいてくる。

(ヤバい!ヤバい!)

焦っていたら目が覚めてしまった。

凄く複雑な気分の夢。

黒羽根さんは人気者だな。

他の日にあの場所へ行ったら、違う人にも会えるのだろうか……。
凄く気になります。

【モノクロピルとBlackey】

ある日の夢は薄暗いBarみたいなお店から始まった。

アタシはカウンター席に座っていた。

誰もいないカウンターの中にはお酒のボトルやグラスの並んでいそ
うな棚ではなく、灰色がかった細長い小さな扉がいくつも綺麗に敷
き詰まっていた。

どの扉にも銀色の番号と金庫みたいなダイヤルがついている。

(あの中にお酒のボトルが入っているのかなあ……)

気になってカウンターの覗こうとしたら

『やめるよ!』

突然、声がした。

『ごめんなさい……』

ビビりながら声のした方を見ると、大きなスクリーンと小さなステ
ージみたいな場所があって、そこに三人の男の人が立っていた。

どの人もガタイが良くてオールバックなヘアスタイル。

まあ……極道物の映画に出てきそうな、いかつい顔したオジ様達ば
かり。

アタシに気付いているのか、気付いていないのかわからないけれど

……

どうやら何か揉めているようだった。
さっきの『やめろよ!』もアタシに対してではなかったらしい。

パツンパツンの黒色のパンツにピチピチのＴシャツを着たおじ様が
スーツを着たおじ様の胸元を掴んでいた。

スーツのおじ様の後ろには黒ラインの入った白っぽい革ジャンを着
たおじ様がいて『俺を負かしてから手出せやあ!』みたいなことを
言っただけ。

凄く自信満々に黒パンツのおじ様に蹴りを入れようとしたのだけ
れど、サラリとかわされたと思っただけ、肩と腕を?まれて床に叩き
つけられる革ジャンのおじ様。

?ボキッボキッ!?

骨が折れたのか凄いい音がして怖い!!

(あんなに格好つけて挑んだのに、ちょっと格好悪い……)

なんて思ってしまったアタシ。

革ジャンのおじ様は床に倒れたまま動かない。

黒パンツのおじ様は、すぐまたスーツのおじ様の胸元を掴んで放さ
ない。

(今度はあのおじ様が殴られちゃう!)

そう思った瞬間

?トントン?

アタシの肩を誰かが叩いた。

いきなりだったのでビックリして椅子から転げ落ちそうになった。振り返ると、曇った黒ブチメガネをかけたオッサンが立っていた。喧嘩しているワイルドなおじ様とは正反対の雰囲気のおッサン。

『ねー。お嬢ちゃん。なんでこんな物騒な所にいるんだい？』とスマイル。

『うーん……たぶん、此処はアタシの夢の世界なので気が付いたら座っていて……アタシにもわからないんです』

素直に話してしまったアタシ。

『ほー。面白いこと言うね。まー。夢であっても危ないことには変わりないから怖いだろ？ オッサンについておいで』

そんなようなことを言いながら出口らしき方へスタスタと歩いていくオッサン。

ワイルドなおじ様達がどうなったのかわからないけれど……これ以上、怖いやり取りは見たくはなかったのでオッサンに付いていくことにした。

黒い扉の外に出ると、外の匂いがした。

扉のすぐ横には上りと下りの真つ黒な階段が続いている。

ザラザラした炭のようなコンクリートの階段をスタスタとオッサンが下りていくので、後を追うと外に出た。

目の前には大きな長方形の建物があった。

自分が出てきた建物も全く同じ形をしたビルだった。

間に黒いアスファルトの広い道路があつて、挟むように高さの違う同じビルがいくつも並んでいる。

何だか【未来ビル】みたいな建物ばかり。

【未来ビル】は大きな壁の内側に紙粘土で出来たようなモコモコした真っ白な建物がいくつもある。
どこにも出入り口のような扉が見当たらないのに窓がビッシリあって中が暗くて何も見えない。
ハイテクそうなビルだから【未来ビル】と呼んでいる。
でも、此処にあるビルは違う。
大きなスズリみたいに真っ黒でツルツルしている。
一つも窓が無くて、どこからでも入れそうだった。
まるで【未来ビル】を反転したかのような街。

どの建物にも団地みたいに、それぞれ上の方に番号がふつてある。それを見た瞬間、前に見た夢の映像が浮かんで此処は前にも来たことがあると思った。

前の夢は夜だったから印象が違うけれど、建物にある数字が白く光っていたのを覚えている。

ビルのアチラコチラの窓から真っ白な光が漏れていた。

一階部分がお店になっているビルもあった。

中を覗くと、真っ白なお店の中にハイテクそうなオシャレな家具や電化製品がディスプレイされていて、窓が無いのに盗まれないのが不思議だった。

今回は曇り空だけど、昼間だから明るくて街並みがよく見える。

人も車もいなかった【未来ビル】とは違ってビルの周りには、人も歩いているし車も走っている。

本当に何もかも反転したかのような場所だと思った。

でも、見える物の色がみんな白か黒か灰色なのが気になった。

覗いたお店の内装も売ってある物も、歩く人の服装や車もみんなモノトーンな色ばかり。

道路は真っ黒だけど歩道は真っ白。

オッチャンの服装もヨレヨレの濃い灰色のカーディガンに白いシャツ、ダボダボの黒いパンツに黒のサンダル……。肩には昔の学生が使っていたような白い肩掛けカバン。

お店や売っている物はハイテクそうな物ばかりなのに、見える車は昔の外車を思わせるアンティークな小さい車だけだった。

街を歩く人の服装や髪型も昔風だったり、SF映画のようだったり……。

新しいのか古いのかわからない。まるでオセロみたいな街。

オッチャンにこの街のことを聞こうと思って、ふと見るといない！見渡すと、離れたビルの前で手を振って待っていた。

慌てて側に寄るとオッチャンはすぐさま早歩きでビルとビルの間を曲がっていったので、置いていかれないように小走りで追いかけた。

ビルとビルの間を抜けると細い通りに出て、道を挟んだ先に公園があった。

ベンチが向かい合うように奥に二つ並んでいて、象の形をした滑り台とブランコと何故かとんでもなく低いジャングルジムがあった。どれもやっぱりモノトーンな色ばかり。

オッチャンはベンチに座ると、すぐさま汚れた白い肩掛けカバンからノートと鉛筆を出して無言で何かを書き出した。

(気まずい……)

オッチャンのノートを覗いてみると仏像のような絵を描いていた。凄く気になって聞こうと思った瞬間

『ねー。さっきお嬢ちゃんは、この世界が自分の夢だと言っていたよね。自覚しているってことなのかな』

ノートを見つめたままオツチャンが話し出した。
オツチャンは独特な話し方をする。

『一応、自覚しています……夢の中で気づける時と気づけない時がありますけどね』

『ふーん。なるほど。じゃあ此処もお嬢ちゃんの夢の中なんだ』

オツチャンは小さく呟いた。

『そうだと思うんですけど……あの、何描いているんですか？』

気になることを聞いてみた。

『えーと。これはねえ。オツチャンのキーホルダーのデザイン。ブラッキーに会えたら作ってもらおうと思っただけ』

『ブラッキー？』

『ブラッキーは鍵の管理人。黒い羽根と腰につけている鍵が印象的だからBlackとkeyをくっつけてBlackeyってみんな勝手に呼んでいるらしい。彼に会えると特別なキーホルダーを作ってもらえるよ』

オツチャンはノートに「Blackey」と書いて見せてくれた。

黒い羽根と鍵。

それはアタシの大好きな黒羽根さんのことだと思った。
前に夢で会った時にキーホルダーみたいなを作っていたし……

『アタシ、その人知ってるよ』

オツチャンに言ってみた。

『ほー。此処はお嬢ちゃんの夢の世界だもんねえ。どこにいるか知
っているのかい？』

可愛らしい瞳で見つめられた。

『アタシも会いたいけど、わからないんです。オツチャンは知って
いるんですか？』

『うーん。オツチャンはこの街から出たことがないからねえ。オツ
チャンもBlackeyに会いたくて何度もこの街を出ようとした
んだけど、出口が見当たらなくて出られないんだよ』

そう言うと苦笑いするオツチャン。

話しながらオツチャンが鉛筆を落とした。

拾いながら『オツチャンもBlackeyの居場所は知らないな』
と言っている途中で目が覚めてしまった。

黒羽根さんとモノクロビルは何か深い繋がりがあるのだろうか……。
それにしても何故か【アッチノ世界】で遭遇する人は黒ブチメガネ
をかけていることが多い。
不思議だ。

【黒羽根さん： 緑なアイツと素敵な香り】

ある日の夢は【アッチノ世界】にある我が家の三階にいた。
リビングは真っ暗。

（また【黄色いサル】とか危険な生物が出てくるだろうか……）

なんてドキドキしていたら、リビングの隣にある小さな和室から話し声が聞こえてきた。

そっと覗いてみると、和室に姪と甥達がいた。

驚いたけれど、少しホッとしたアタシ。

『ママは？』と静かに聞いてみた。

『ベランダにいるよ〜！』

姪が元気よく叫ぶので見に行くと窓が開いていた。

ベランダに出ると夜のように外は暗い。

でも、何だか空が変わった。

まるでペイントソフトで描いたような空。

藍色に水色を足したような色をしていて、筆でなぞった跡や点々と筆を置いたような跡もある。

姉も空を見ていて『変な空だね』と二人で話していた。

いつかの夢のように、また月が無いのに月明かりを感じる。

でも、我が家から一歩外へ出ると、きつと夕方の風景で止まっているのだろう。

外から見る我が家の周辺はいつも夕方なのに、家の中から見る我が家の周辺は夜だったり曇り空だったり気紛れなんだ。

『此処の世界の月はどこにあるんだろう』

姉と二人で月明かりのする方を向いた瞬間

?ブーンツ!?

突然、コウロギなのかバッタなのか緑の脚の長い虫が出現!

猛スピードで飛んできたのでアタシも姉もパニックになっていた。

急に羽音が止んだので辺りを見渡してみると、アタシの方を向いて一メートルぐらい先で羽を広げる緑の虫を発見!

(あー。こういう時って絶対、アタシのところに飛んできて顔とかにくっ付くんだよな……あっ! こういう風に考えるとそうなるのか!)

そう思った途端

?ブーンツ!?

『やっぱり飛んできた!』

その瞬間、?フワツ?とアタシの顔に何かが触れた。

(ブンブンしない……少し冷たい。手の平?)

そのままギュッと抱き締められてアタシの視界はゼロ。

(姉よ……アタシがとんでもなく虫嫌いなのを察して守ってくれているのね。姉も黒羽根さんみたいな好い匂いがする……) なんてまったりしていたら

?ブーンッ! コツン! ブーン……?

『ギャー! 虫怖い~!』

姪の叫び声が聞こえた。

さっきの虫がベランダのどこかに当たりながら家の中に入ったらしい。

『大丈夫~!?!』

叫びながら慌てて家の中へ入って行く姉の声が聞こえた。聞こえたはずなのに……まだアタシの視界はゼロのまま。

『姉は今通過……じゃあアタシを抱き締められているのは一体誰!?!』

『フフッ……』

ドキドキしていると、笑いを堪える声の上から聞こえる。

(この匂い……冷たい手……もしかして黒羽根さん!?)

そう思って顔を見ようと必死でもがくアタシ。

黒羽根さんらしき人も力を入れているのか全然動かない。

(もう少しで顔が見られそう!)

そう思った瞬間

?ピピピッ! ピピピッ!?

目覚まし時計の音で起きてしまった。

助けてくれたのは黒羽根さんだったのだろうか。

黒羽根さんであっても、違う人でも助けてくれたのは有難いけど……
助けてくれるのなら、もっと危険な夢の時に出てきてほしいと思っ
てしまった。

もし、夢の中の空がおかしいと思ったら、耳を澄まして辺りを見渡
してください。

羽音が聴こえてくるかもしれない。

【上さんの家】

【アッチノ世界】にある【学校】は幾つもの建物をくっ付けたような巨大な学校。

そんな校舎の他に学校の敷地内には、お嬢様学校みたいなお洒落な校舎がある。

ある日の夢は普通の校舎の昇降口にいた。

『帰ろう?』

友達らしき女の子が声をかけてきた。

けれども、急にお洒落な校舎を探検してみたくなくなったアタシ。

何故か今回は探検できるような気がしてならなかった。

『ちよつと行きたい場所があるから先に帰っていいよ』

女の子にはそう言って、アタシはお洒落な校舎のある方へ向った。

手には珍しく学校の鞆を持っている。

(何が入っているんだろう……)

なんて鞆を見ながら下を向いてダラダラと歩いていた。

ふと顔を上げると、あるはずのお洒落な校舎が無い……。

目の前には赤茶色の地面が広がっていて、道を作るように枯れた木が並んでいた。

一番、奥には廃墟のような大きな建物が見える。
曇ったようなセピア色の空。
まるで、【廃墟村】にいるみたいだった。

（場所を間違えたのかな？ それとも今回の夢はお洒落な校舎に行けない？）

立ち止まって悩むアタシ。

（でも、アタシの夢なんだから行きたい場所を強くイメージすれば行けるはず！）

そう思つて、目を閉じて前に見たお洒落な校舎を強くイメージしてみた。

そのまま顔を下に向けながらゆっくり歩いていく。
時々、目を開けてみたけれど、見えるのは赤茶色の地面と砂埃に汚れたローファー。

それでも諦め切れなくて何かにぶつかる勢いで目を閉じながら走ってみると、靴の裏に感じる地面の質が変わった。

そーっと目を開けてみると、夜の住宅街にいた。

赤茶色だった地面は黒いコンクリート、枯れた木があった場所には同じようなデザインの家が並んでいた。

月が見当たらないのに月明かりを感じる夜空。

【屋根のない洋服屋】のある場所に雰囲気似ていた。
ボロボロの建物があった所には、洋風とも和風とも言えない巨大な家がある。

そのまま少し上り坂になった道を歩いて巨大な家の前まで近づくと、表札があるのが見えた。

誰のお家なのか知りたくなって門の前まで近づいた瞬間

?ピンポーン!?

センサーが何かがあるのか、勝手にインターフォンが鳴った。パニックになりながらも急いで表札を見ると、「上」と書かれていた。

(上さん? そんな人知らないなあ……)

と思っていたら……

『どなたですか?』

インターフォンから女の人の声がした。知り合いでもないし状況を説明するのが面倒で答えずにいると、突然一階の窓のカーテンが開いた。慌てて門と塀の隅みたいな所に隠れてみた。

(意外と見つからない? でも、このパターン見つかりそうだよなえ……)

なんて思っていたら、今度は二階の窓を開ける音がして反射的に見ってしまった。そこにはメガネをかけた家政婦風なオバサンが立っていた。見つめ合うほどに目が合ってしまったアタシ。

(ヤバイ……)

慌てて逃げようとした瞬間

来た道から大きな白い狼のような動物が猛スピードで走ってきた。

『怖い!』

思わずしゃがみ込んでしまったけれど

(この狼、前にも見たことがあるかも……)

そんな気がして考えていたら、狼は突然アタシの首に顔を近づけてきた。

『咬まれる!!』

身構えた瞬間

狼はアタシの首と顎の間に頭をゴリゴリと埋めてきた。

それは我が家にいる父猫チップがよくやる行動と似ていた。

チップみたいに頭をゴリゴリしてから、狼はアタシの目を見つめる。

鋭いけれど、シベリアンハスキーみたいな綺麗な青い目。

何度もゴリゴリされている途中で、アタシは起きてしまった。

目が覚めた後、上さんの家は前にも見たことがあると思った。

何かに追われている夢の時、忍者のように建物の屋根から屋根を飛んで逃げていることがたまにある。

その時に、昼間の時間に上さんの家を高い場所から見たような気がする。

その瞬間の場面が頭に浮かぶけれど、確実にあの家だったかはわからない。

昼も夜もあって、【学校】の近くで【廃墟村】のような場所。

月のない月明かり。

ロールプレイングゲームの地図みたいに【アッチノ世界地図】は繋がっているような気がする。

【アッチノ世界】は本当に小さな世界なのかもしれない。

【上さんの家】：百鬼夜行とお坊さん

【上さんの家】の夢を見た次の日の夢は初めて見る家の中から始まった。

お坊さんの格好をした人が部屋を案内してくれた。

壁も天井も床も、黒いこげ茶色の木の素材で囲まれた部屋。

中には壺や箱など、高くて古そうな物が並べられていた。

入ってすぐに説明されたのは、壁にかけられた横長の絵。

真っ暗闇の中に光る一本道を歩く百鬼夜行。

『これは模造品なのですよ。でも、この風景をあなたは知っているはず』

お坊さんは笑いながらアタシに言った。

アタシが覚えている夢で一番古いのが、子供の頃に見た【百鬼夜行】の夢だった。

同じように真っ暗闇の中にある光った一本道を不思議な軍団が通過した夢。

(そのことだろうか……)

そう思っていたら次の部屋へ。

今度はカーペットの敷かれた新築の家みたいな部屋だった。

お茶を出されて少し話をしていたけれど……

『好きに屋敷を見てきていいですよ。きっと本物のあの絵に呼ばれるはずです』

とお坊さんに言われたので、好きに建物の中をウロウロしてみました。

大きな家だからクネクネと廊下が続く。

木の廊下だったり……ツルツルのフローリングだったり……

変な廊下ばかり。

その途中途中に部屋があるのだけれど、和風だったり……洋風だったり……

統一感のない家。

小さい扉を見つけて開けてみると、トイレだった。

いつも【アッチノ世界】に出てくるトイレは異常なぐらい汚い。

でも、今回はなんだか普通だった。

壁や床には水色と白の小さなタイルが貼られていて、真ん中には和式のトイレ。

でも、トイレットペーパーはなくて、芯の部分には何故かタコ糸のような物がグルグル巻きつけられていた。

(変なの……)

そう思いながら扉を閉めると、急にどこからかお香みたいな香りが漂ってきた。

探していると、扉も窓も無い焦げ茶色の壁に囲まれた廊下を見つけた。

気になって進んで行くと、奥まった場所に引き戸が見える。

開けると、お香みたいな匂いがフワツとして、目の前にはさっき見

た絵と同じ物があった。
いや、同じであつても全然違う。

（これが本物か！）

そう思った。

模造品は横幅が一メートルぐらいのサイズだったのに、本物らしき絵は何倍も大きかった。
描いてある妖怪達が自分と同じサイズに感じるぐらい。

模造品は全て筆で描かれた日本画のようだったけれど、本物は筆で描かれた妖怪もいれば、木彫りだったり……陶器だったり……ガラスだったり……

色んな素材で作られた妖怪が点々と貼り付けられているような感じだった。

じーつと見てみると、百鬼夜行がスローモーションのように動く。
でも、瞬きすると元に戻っている。

またじーつと見てみると、昔見た【百鬼夜行】の夢と同じように、色んな笑い声や話し声がガヤガヤと聞こえてきて絵が動く。

和風のような……洋風のような家……

もしかして此処は【上さんの家】の中なのかもしれない。

あの【百鬼夜行】の夢もこの絵と同じなのかもしれない。

絵を眺めていたら妖怪達の素材が気になった。

【ゆらゆら：仮面道路】に出てきた古びた改札にいるお婆さんが持っていたお金らしき物と同じような気がした。

（やっぱり色々繋がっているのかな……）

なんて考えていたら『繋がりましたかね』と後ろからお坊さんの声
がして、姿が見えるか見えないか、振り返っている途中で目が覚め
た。

このお坊さんが【アッチノ世界】でどんな存在なのかが物凄く気
になりました。

【黒羽根さん】とも関係しているのだろうか……。

【ナナちゃんと僕】

不思議な夢を見た。

映画やドラマを見ているようだった。

夢の中の主人公はアタシではなく、女の子と小さな柴犬。

【屋根のない洋服屋】でも子犬の柴犬が出てきたことがあるけれど、今回の柴犬はヨボヨボで凄く年老いていた。

女の子は小学校一年生ぐらい。

柴犬のことを「ロク」と呼んでいる。

一人と一匹は何かを探しながら、木のたくさん生えた場所を歩いていた。

自分が動くのではなく、ただ側で様子を見ていることしか出来ないアタシはこの場所がどこなのか考えていた。

此処が【アッチノ世界】なのかもわからない。

もし此処が【アッチノ世界】なのだとしたら、【学校】の近くの【森林】にも似ているし、【神社公園】の奥にある坂道の横に広がっている雑木林にも思える。

『ねえ、ロク。今日はパパのお誕生日なんだよ！ だから、二人でドングリとかマツボックリとかいっぱい集めてプレゼントしようね』

楽しそうに柴犬に話しかける女の子。

主にロク目線なのかロクが思ったことまで伝わってくる。

ロクは女の子のことを「ナナちゃん」と呼んでいた。

(何だかナナちゃんが嬉しそうだからいっぱい集めなきゃ……)

ロクも必死にマツボックリを探している。

ナナちゃんはドングリを拾いながらロクが拾ってきたマツボックリを小さなトートバッグに詰め込んでいく。

もうトートバッグがいっぱいで入らなくなった頃……

『ロク！ もうすぐパパが帰ってくる時間だから、駅まで一緒に迎えに行こう』とナナちゃんが言い出した。

雑木林のような場所から外に出ると、車がたくさん行き交う道路があった。

その横にある歩道を並んで歩く。

人が一人通れるぐらいの細い歩道。

『ロク！ 遅い』

怒ったように後ろを振り返りながら、ナナちゃんが少し先を歩いている。

その後ろをロクがゆっくりと歩く。

(ナナちゃん待って。僕、もうお爺ちゃんだから速く動けないんですよ)

なんて思いながらロクは追いつこうと一生懸命歩く。

『パパが帰ってきてきちゃうからナナは先に行っているよ！ ロクは走っちゃいけないから待って！』

そう言うとナナちゃんは先に走って行ってしまった。

（あーあ。行っちゃった。いつの間にかナナちゃん大きくなったなあ。昔は追いかけてこだって僕の方が速かったのに……今じゃ僕がヨチヨチ歩きだよ）

なんて呟きながら歩いていると、後ろから一台の大型バイクが蛇行しながら走ってきた。

片手には鉄パイプ。

反対車線側の歩道を歩いていた人達を次々と殴り倒していく。

（この先にはナナちゃんが……！！）

その様子を見た途端にロクはナナちゃんの向った方へ全速力で走り出した。

辿り着いた先に見えたのは倒れているナナちゃんの姿。

（遅かった……）

『パパ……パパ……』

急いでロクが駆け寄るとナナちゃんは腕を押さえながら泣いていた。辺りには誰もいない。

（急いでお父さんを連れてこなきゃ……）

ロクはナナちゃんの顔の涙を何度か舐めると、ナナちゃんを置いて駅の方へまた走った。

少し走ると前からナナちゃんのお父さんらしき人が歩いてきた。

『あれ！ ロク。お前だけか？ ナナは？』

ロクの頭を撫でるお父さん。

（ナナちゃんが大変……お父さん早く！）

ロクはお父さんのジーパンの裾に噛み付いて、歩かせるように何度も引つ張った。

『なんだ？ ロクやめなさい！ これはお父さんが結婚する前にママから貰った大切な物なんだよ。破れたら怒られちゃうよ……』

お父さんはロクを抱き上げようとした。

ロクはすかさず避けて今度はナナちゃんの倒れていた方へ走った。

『ロク！ 待ちなさい！ 走っちゃダメだ！』

只事ではない様子にお父さんもやっと気付いたのか慌てて追いかける。

ロクの曲がった先に見えたのは人だかりと救急車。

『パパ！ ロク！』

近づくのと泣き叫ぶナナちゃんの声が聞こえた。

人だかりを掻き分けて進むと救急隊員に支えられて座るナナちゃんが見えた。

『ナナ！！ この子の父親です！ 何があっただんですか？』

お父さんの姿が見えるとナナちゃんは救急隊員から離れてお父さん

の方に倒れこんだ。

『先程この辺りで通り魔が出て、この子も襲われたみたいなんです。救急車に乗せようとしてもパパが来るまで乗らないと言って暴れてしまつて……』

救急隊員が説明すると、お父さんはナナちゃんを抱き上げて救急車に乗った。

そのまま救急車はロクを置いて走り去ってしまった。

(ナナちゃん大丈夫かな。でも、お父さんと会えて良かった……)

救急車を見送りながらロクは安堵していた。

(あー。昔みたいに無茶苦茶に走っちゃったよ。また病院に連れて行かれるかな……)

何か病気を患っているのか、眩きながらしんどそうに伏せたロク。ボーっと見つめた先にはナナちゃんが持っていたトートバッグが落ちていた。

辺りには一緒に拾ったドングリやマツボックリが散らばっている。

(ナナちゃんと一緒に拾ったやつ……ナナちゃんに渡さなきゃ……)

ロクはプルプルと震えながらゆっくりと立ち上がると、トートバッグの近くに落ちていたドングリとマツボックリを鼻先で転がして二、三個トートバッグの中へ押し込んだ。

そのままトートバッグの持ち手を口にくわえると、引きずりながらフラフラと歩き出した。

途中で止まっては少し歩いて、また止まっては少し歩いての繰り返し

し。

『ねえ、オジサン。どこへ向っているの?』

休んでいたら突然、声をかけられた。

顔を上げると、目の前にスラツとした若い犬が座っていた。体の大きさはロクと同じぐらいで耳の垂れた茶色い毛の犬。

『これをナナちゃんに渡さなきゃいけないんだ。ピーポーピーポーやかましく鳴く乗り物を探していて……』

『それなら知っているよ! オジサン、何だか辛そうだから僕が代わりに持って行ってあげようか?』

そう言って若い犬がトートバッグをくわえようと近づいたけれど、ロクは立ち上がって拒んだ。

『いいや……。これは僕が持って行きたいから場所を教えてください。僕に残された時間はあと少し……。あと少ししかないんだ!』

そんなロクの様子を見た若い犬は察したのか前を歩き出す

『事情は知らないけど、わかったよ。付いて来て』

その後ろをゆっくりとロクが付いて行く。

引きずるトートバッグの中から一つ……。二つ……。とマツボックリが外へ出てしまう。

(もう少し……。もう少しだけ待って……)

うわ言のように呟きながら、落ちた木の実を拾って進むロク。同時にどこからか切ないBGMのような音楽が流れだす。気がつくのと辺りは暗くなり始めていた。

緩やかな坂を上ると真っ暗な建物に辿り着いた。

アタシは暗い建物を見て此処は【停電病院】だと思った。

『着いたよ！ 前にあの乗り物が此処に入っていくのを見たんだ』

若い犬がはしゃぎながらロクに駆け寄る。

けれども、すぐに……

『せっかく着いたけど、僕らはこの中には入れてもらえない』

そう寂しそうに言った。

それを聞いたロクは『そっか……じゃあ此処で待ってみるよ。ありがとう』と言って入り口の前で横になった。

『僕も一緒にいるよ』

若い犬はロクが心配なのか、帰らずにロクの横で寄り添うように座る。

『ねえ……オジサン。ナナちゃんってそんなに大事な人間なの？』

そう若い犬が聞くと、急にロクの回想シーンのような映像に切り替わった。

そこには赤ちゃんを抱っこしてソファに座っている女の人と若い頃のお父さんがいた。

同じく若いロクをお父さんは抱き上げると……

『ほら！ ロクく。お前の妹だよ。ロクは六番目に産まれたからロク！ そのロクの次に我が家の家族になったからナナちゃんって名前にしたんだ。可愛いだろう？』と赤ちゃんを覗き込む。

『ナナちゃん……僕の妹があゝ！ お父さん達よりちっちゃいなあ……』

嬉しそうに尻尾を振るロクの姿が見える。

『大好きなナナちゃんは僕の大事な妹。もう少しナナちゃん達と一緒にいられると思ったのになあ……』

ナナちゃんのトートバッグを見つめながら話すロク。

その両目には大粒の涙が……。

『僕はずっと一人だったからオジサンが羨ましいよ！ だから、そんな弱気なこと言わないでよ……』

若い犬は励ましながらロクの隣にぴったりくっついて伏せた。

『うん……でも、そろそろバイバイしなきゃいけないみたい。寂しいけど……ナナちゃんが出てくるまで少し休むよ。もし僕が渡せなかつたらキミにお願いしてもいいかな。ごめんよ……』

そう言うとロクは眠いのか目を閉じてしまった。
すると、また別の映像に切り替わった。

今度は暗い街中を走り回るお父さんがいた。

『ロクく！ ロクく！』

どうやら、まだあの場所にロクがいると思って行き違いで探しに来たらしい。

『年離れた犬なら若い犬と一緒に歩いているところを見たよ。年老いた方が何かを引きずっていて、それを若い犬が気遣うように歩いていたから親子かと思ったよ』

近くの家にはいた人が教えてくれた。

それを聞いてお父さんはロクだと思った。

もう一度来た道を探し始めると、お父さんの携帯が鳴った。

電話に出ると、ナナちゃんが運ばれた病院にいるお母さんからだった。

『パパ！ ロクが……』

『ロクなら今探しているよ？ ロクみたいな犬を目撃した人もいたし……』

『ロクね……病院の前まで来ていたのよ。だから早く戻って来て』

お父さんは電話を切ると走って病院へ戻った。

緩やかな坂を上ると病院の入り口の前にはママの後姿が見える。

『ママ！ ロクは？』

お父さんが後ろから声をかけると、振り返ったママは泣いていた。

『どづしたの？』

ママの見つめた先を見ると、横になって眠るロクがいた。その隣には汚れたトートバッグをくわえた若い犬が座っている。

『ロクね……ナナちゃんのバッグ持って、この子と一緒に此処で待っていたみたいなの……でも、私が見に来た時にはもう……』

ママはそう言うと、泣きながら崩れるようにしゃがみ込んでしまった。

『そんな……』

触れたロクの体は冷たくなっていた。

お父さんは震える手でロクの体を何度も撫でる。

そのまま隣に座っていた若い犬の頭を優しく撫でると、若い犬はトートバッグをお父さんの前に置いた。

バッグの中には、笠の取れた傷だらけのドングリとヨダレに塗れたボロボロのマツボックリが入っていた。

『さつきナナちゃんが言っていたじゃない。今日はパパのお誕生日だからロクと一緒にドングリとかを拾いに行っただって……きっとロク、これが大事なものだと思って病院まで歩いて届けに来てくれたのよ……』

ママの話聞いたお父さんは、バッグと一緒にロクを抱きしめながら泣いていた。

『ロク……ありがとう』

見ていたアタシも号泣。

少しすると、また映像が切り替わった。

ロクとナナちゃんが最初にいた雑木林のような場所。

『八チ!』

ナナちゃんの声がすると、ロクと一緒にいたあの若い犬がナナちゃんに駆け寄る。

首にはロクがしていたのと同じ首輪をつけていた。

『ねえ、八チ。今日はパパのお誕生日な……』とナナちゃんが言いかけたところで目が覚めた。

目覚めると、アタシの顔や枕は涙で大変なことになっていた。

本当に映画を見ているような夢だった。

途中でBGMまで流れちゃうし……。

思い出す度に切なくて涙が止まらない。

こうやって文章にまとめた時も泣きはらしながら作業していたので、丸一日かかってしまいました。

でも、気になることが一つ。

もし、あのまま目が覚めずに夢を見ていたら、続きはどうなっていたのだろうか。

あのくだりだとロクと同じような流れになっていたのでは……なんと思うのはアタシだけでしょうか？

文章で表現すると大したことではない夢かもしれませんが……

最近、涙もろいアタシは脱水症状になりそうなくらい、切ない内容に号泣してしまいました。

【茶色いエレベーター】

ある日の夢は【屋根のない洋服屋】：夜の世界【】に出てきたお洒落な茶色いエレベーターの中にいた。

?スイー?

そのまま別の階へは行かずに扉が静かに開いた。目の前には初めて見る薄暗い廊下があった。

両サイドと正面には色形の違ったくさんの扉がある。(画像参照)

> i 1 3 5 5 7 — 1 8 9 2 <

何だか【美術館】の廊下や部屋に雰囲気似ていた。

【美術館】での体験を思い出すと、扉を開けようとは思えなかった。

暫くしてエレベーターも動かないのでボタンを押そうと思ったら、ボタンが無い。

前の夢の時はどうだったか思い出せなかった。

ボタンの代わりにあるのは、壁にくっついた金色のベルだけ。仕方がないのでベルに触れようとした瞬間

?ギイー………?

奥の方にある扉が一枚だけ開いた。

(また殺人鬼?!)

思わず身構えてしまったアタシ。
すると、扉からひょっこりと顔を出したのは若い男の人だった。

『わあ〜！ やつと普通そうな人がいたあー！』

アタシの顔を見るなり叫びながら駆け寄ってきたボサボサの男の人。

？チリンリリンリリンッ！！？

変なのが来たと思って、慌ててベルを鳴らしまくるアタシ。

『ちよつと待つて……待つて！』

？ガシヤン！ ガシヤン！？

閉まりかけた扉に挟まりながら男の人がエレベーターの中に入ってきた。

『気が付いたら知らない駅の前において、ウロウロしていたら変なロボットに追いかけて……慌てて近くの家に逃げ込もうとしたら此処に出て……此処はどこなんですか?!』

息を切らしながらアタシを見つめる男の人。

何だか前にもこんなことがあったような……。
駅の前で変なロボットに会ったのなら、この人は【殺人ロード】から来たんだ。

ということはこの此処にあるたくさんの扉は我が家の洗面所の扉のように【アッチノ世界】のアチラコチラに繋がっているのかもしれない。

(下手に扉を開けなくてよかった……)

安堵していたら、エレベーターの扉が静かに閉じた。
その瞬間、男の人がアタシの腕を強く掴んだ。

『此処はどこ？』

『此処はアタシの夢の世界だと思えます。でも、このエレベーターの事はアタシもまだよくわからないんです』

そう答えると男の人は無言で床へ座り込んだ。

その様子を見ていたら、エレベーターが動き出した。
上に動いたのか下に動いたのか……またわからない。

『こんな場所にいたくない！ 次の階で俺は降りる！』

取り乱しながら叫ぶ男の人。

？スイー？

静かに扉が開くと、またさっきと同じような廊下があった。
けれども、同じであって全然違う。

> i 1 3 5 5 8 — 1 8 9 2 <

この画像じゃ再現できなかったけれど、まるでアタシ達を伺い見ているかのように両サイドにある扉がこちらを向いてデコボコと壁が変形していた。

辺りを見渡していると、さっきあった一番手前の扉が黒い鉄の門に変わっているのに気が付いた。

脅えたような顔で、その異様な光景をじっと見つめる男の人。

『あの扉の先がどうなっているのか、アタシにもわからない。それでも行きますか?』

そうアタシが言うと男の人は下を向いて黙ってしまった。どうするのか様子を見ていたら

?グーッ!?!?

前の夢の時と同じ。

まるで降りると言っているかのように、エレベーターは重量オーバーの音を響かせた。

アタシも男の人も慌ててエレベーターを降りると、ピタリと音は止んで静かに扉が閉まった。

黒い鉄の門の奥は洞窟みたいになっていた。

奥に何かあるのか、洞窟の中は意外と明るい。

目の前にある不気味な扉よりかは何故か安全な気がした。

アタシの側で男の人は黙ったまま動かない。

これじゃあ、どうしようもないのでアタシは男の人を置いて門を開けようとした。

その瞬間

『一人にしないで!?!』

叫び声と共に?ガシッ?とアタシの腕を誰かが強く掴んだ。

誰かがというかボサボサの男の人しかいないのですか……。

腕を掴まれた拍子にアタシの体が門に触れた。

鍵などはないのか、門はゆっくりと開いた。

その瞬間、今まで無音にも近かったその空間に騒がしい音が入り込んできた。

門にはガラスも何にも音をさえぎる物は無い。

腕だつて通せるのに、まるで密閉されていた場所が開いたかのようだった。

突然の出来事でアタシもボサボサの男の人も暫く固まっていた。

聴こえてくるのはクラブミュージックのような音楽。

何だか大丈夫そうなので静かに門の先へ入っていくと、ボサボサの男の人も肩をすくめながらついてきた。

ちよつとしたカーブを曲がると、その奥にはファッションショーでよく見るランウェイのような道があった。

立ち止まって奥まで覗いてみると、細長い道の両サイドにはパンのようなフカフカの美味しそうな丸っこいソファアールとテーブルが点々とあった。

ソファアールには綺麗な女の人達が埋まるように座る姿や寝転がっているのが見える。

進もうかどうしようか迷っていたら、近くにあった黒いカーテンの奥からモデルのようなお姉さんが一人出てきた。

すぐにお姉さんはアタシ達に気がついた。

何を言われるのかドキドキしていると……

『アナタ、Aちゃんでしょ？ やつと此処にも来てくれたんだあ！

』！

何故が大はしゃぎで近づいてきた。

『えっ？ アタシのことを知っているんですか？』

思わず聞いてしまった。

『もちろんよ！ 知っている人の中では凄い有名人なのよ！ 隣にいる彼はAちゃんのお友達かしら？』とボサボサの男の人を覗き込むお姉さん。

男の人は戸惑うような仕草をしながら頷くだけで全然話さない。

『まあ、いいわ。Aちゃん達は出口を探しているんでしょ？ それならこっちよ』

お姉さんはアタシの肩を掴んでランウェイのような道の横を進んでいく。

フカフカのソファアの前を通過する度に座っていた女の人達がウインクや投げキッスをしながら手を振ってくれた。

暫く進んでいくと、最初にお姉さんが出てきたような黒いカーテンが見えてきた。

ランウェイのような道と歩いてきた横の道とカーテンは二つあった。横の道にある黒いカーテンの前まで来ると、お姉さんは立ち止まった。

『アタシの名前は っっていうの。今日はこれでお別れだけど、今度会えた時はゆっくりガールストークでもしましょうね』

そう言うと、アタシの頬にキスをして優しくハグをしてくれた。

そのまま背中を押されて黒いカーテンを潜ると強烈な光が目に入った。

まるで暗い場所から昼間の外へ出た時のような……。

暫く閉じていた目をゆっくり開けてみると、見覚えのある謎のゲーム機が置かれていた。

そこは【アッチノ世界】にある【ゲームセンター】だった。
どうやら前の夢で隠れていた暗幕カーテンの奥からアタシ達は出てきたらしい。

（前の夢の時は壁だったのに！！ あの時のオジサンはいないのかな……）

なんて思っていたら、ゆっくりと目が覚めた。

【アッチノ世界】にある茶色いエレベーターと銀色のエレベーター。その二つの違いはまだわからない。
あのお姉さんもどんな人なのか謎だけれど、何よりもボサボサの男の人がどうなってしまったのだろうか。
少しだけ気になった。

夢の中でおかしな扉がたくさん現れたら、むやみやたらに開けるのは止めておいた方がいいと思います。

【空を飛ぶ船とアタシと地下の謎】

ある日の夢は【アッチノ世界】にあるお嬢様風の学校の中にいた。

絨毯の感触がする木造の大きな階段を下りていくと、踊り場の壁に巨大なスロットマシンのような物があった。

階段には続きがありそうなのに、テカテカに焼かれたパイ生地のような木造の扉で封鎖されている。

マシンには木で作られた巨大なボタンのような四角い物があった。

それを押してみると……

？ガラガラ？

音をたてながらオモチャのようにゆっくりと回り始めた。

暫く見ていると静かにマシンの回転が止まった。

数字や絵がありそうな部分には何も書いていない。

じーっと見ていると……

？ガチャツ？

突然、後ろから物音がして慌てて振り返ると、さっきまで閉じていた木造の扉が少しだけ開いていた。

扉の隙間から覗いてみると、隠れていた階段の続きが見える。

扉を押し開いて階段を下りていくと、その先にあったのは大きなシヨッピングセンターのような光景だった。

一瞬、【マネキンショッピングセンター】に繋がっているのかと思っただけで、行き交っているのはマネキン人形ではなく人間ばかり。階段の近くにはカフェのようなオシャレなフードコート。他にも洋服や雑貨を並べたお店のような場所がいくつもある。外が見える窓は無く、陽の光も感じない。まるで駅ビルの地下にあるショッピングセンターみたいだった。【宿泊施設】の地下にある巨大なお土産屋さんにも雰囲気似ている。

その中で何より気になったのは大きな通りを一本挟んだ場所に【スケルトンハウス】のように中身が丸見えの教室のような部屋がいくつも並んでいた。大きな窓ガラスから塾にありそうな白い机や椅子がたくさん見える。よく見ると、行き交う人達は教科書やノートのような物を手に持って歩いていた。

（こんな地下みたいなのに学校？）

色々考えながら恐る恐る辺りを見渡してみると、アタシが下りてきた階段と同じような階段がいくつもあった。

（此処もお嬢様風な学校の中なのかな。でも、みんな白い制服を着てない……）

どんな場所なのか探索してみようと少し歩き出した時

『ねえ、キミ。此処の人じゃないでしょ？』

背後から声がした。

その言葉に緊張しながら静かに振り返ると、短髪の男の人が数メートル後ろに立っていた。
教科書らしき本を脇に挟み両手をポケットに入れてアタシの顔を上目使いで見つめてきた。

アタシは何も答えずにいると『ボクにはわかるよ。キミは手に何も持っていない。知らない場所のように辺りを見渡して歩いていた…』

ブツブツと言いながらギリギリとアタシに近づいてきた。
アタシは慌てて近くにあった階段を駆け上がった。

『何で逃げるの？』

男の人が叫びながら追いかけてくる。
アタシは振り返らずに折り返し階段を上ると目の前には、最初にあつたのと同じパイ生地のような木造の扉が行く手を塞いでいた。
後ろを振り返るとさっきの男がニヤけた顔をしながら立っていた。
ふと、木造の扉を見上げると上の方に隙間があるのが見える。

（この扉を壁だと思って前みたいにジャンプしちやえば逃げられるかも……）

アタシは頭の中で殺人鬼が近づいてくるのを強くイメージした。
強くイメージして、イメージして、男の人がアタシの肩に触れた瞬間

あの時の感覚を思い出してジャンプ！！

木造の扉を駆け上がり……
扉を通り越して凄い高さまで跳び上がり、どうやったのか建物の天井を通り抜けてしまった。

気が付くと建物の屋根の上に座り込んでいた。
落ち着く間もなく、いきなり突風が吹き付けた。
どこかに掴まることも出来ず、アタシは風船のようにふわりふわりと空高く飛んでしまった。

【大草原】の夢で飛んでいる時みたいに上空から下を見下ろした瞬間

驚きの景色が目には飛び込んできた。

まるで大きな十円玉のような、はたまた大きなチョコレートケーキのような焦げ茶色の巨大な影が現れたのだ。

> i 2 9 6 1 5 — 1 8 9 2 <

それは今飛び出してきた建物とその周辺にある建物を繋ぐかのようにあった。

焦げ茶色の影は屋根に描かれていたのか、建物の造りが円形なのか、光の加減を上手く利用して出来た影なのかわからなかった。

でも、よく見るとその影の中には【遊園地&プール】にある観覧車が見える。

他にも【マネキンショッピングセンター】と【研究所】、【宿泊施設】らしき建物が影の中にあった。

(この四つの建物は繋がっている？ いや、他にも繋がっているのかもしれない……)

そう思いながら空を見上げると、夜明け前のような色をしていた。
暗いけど、真っ暗ではない不思議な感覚。

辺りを見渡すと真っ暗な場所、夕方の場所があって不思議なグラデ

ーションをしていた。
時間的に昼間の場所はなかったのか、青空の場所は見当たらなかった。

右側ばかり見ていたら、左側が何だか眩しい。

そつと見てみた瞬間　また驚きの光景が目に入った。

空が明け方のように黄色っぽく光っていた。

その空の中心には見たことのない大きな豪華客船が空を飛んでいた。まるで映画に出てきそうな大きな船。

船の下の部分は昔の船のように木造で、上の部分は近代的な造りをしていて異様な雰囲気だった。

（あの船には誰が乗っているんだろう……）

そう思った瞬間、また突風が吹いて船とは反対の方向へ一気に吹き飛ばされた。

五秒間ぐらいだっただろうか。

投げられたボールのように緩やかに下降して見たことのない空き地に転がり落ちた。

芝生のような雑草のような草が広がる中途半端な大きさの空き地。

草のおかげか夢だからか痛くはなかった。

ゆっくりと起き上がると、左側にさっきの明るい空が見える。

正面には【青い廃墟ビル】と【白い布に包まれた家】があった。

右側を見ると荒れ果てた雑木林があった。

雑木林から先の空はセピア色をしていた。

（あつちに廃墟村があるんだ……）

と自然に思った。

後ろを振り返ると段になった緩やかな灰色の小さな坂があった。坂を登り切った辺りには積み重ねられた家具や家電製品が見える。

（あれはガラクタ山……？）

歩きながら坂の下を見ると、段になっている所に真っ暗で先の見えない下水道のような謎の入り口が三つあった。

（あの中に入ったら絶対、良くない場所に繋がっているだろう……）

なんて思いながら坂を上る。

ふと見上げると遠くの方にオレンジ色の空が見えた。

（あの下を指せば我が家に辿り着くはず）

そう思いながら上っていたら目が覚めてしまった。

（やっぱりアタシの夢は繋がっていて、ちゃんと世界が存在するんだ）

そう確信するぐらい鮮明な夢だった。

【アッチノ世界】にはまだまだ新しい発見があると思った日でした。

【侵入者：感染と抗争】

ある日の夢は【カラクリ屋敷】の一室から始まった。

階段が見えたので下を覗いてみると、前に夢で会ったお姉風の男の人が立っているのが見えた。

『あの……』

声をかけるとお姉風の男の人は凄い顔でアタシの方を見た。

『Aちゃん！』

アタシの名前を叫びながら勢い良く階段を駆け上がってきた。

『Aちゃんお久しぶりね。お久しぶりなのに悪いんだけど、ちょっとゆっくりできないのよ』

そう言うとアタシが最初にいた部屋に入った。

お姉風な男の人は着ていた服を軽く整えて呼吸を落ち着かせると深い溜息を吐いた。

『何でか最近ね、変な奴等がウロウロウロウロしちゃって…そのせいでアナタをこの屋敷の外に出すことも、とどめておくことも出来ないのよ』

アタシの髪の毛を触りながら溜め息混じりに言うとお姉風の男の人

は窓際に行つて部屋の端にあるカーテンをめくつた。
カーテンの奥には焦げ茶色の壁と、その中心には人一人が這いつくばつて通れるか通れないかぐらいの横長の小さな扉があつた。
扉の前には扉の高さに合わせたようなアンティーク調のチェストがあつて、お姉風な男の人はチェストの上に乗つていた四角い布を取つて埃を丁寧に払つた。

『此処から先はね、此処と同じであつて同じじゃないの。此処よりかは落ち着いているとは思うけど、安全とは言い切れないわ。でも、Aちゃんなら逃げられるはずよ!』

なんて力強く言われてしまった。

『あの扉から先つて一体……』

そうアタシが言いかけた瞬間

?ガシャンツ! ゲギヤーツ!?

下の階から何か割れる音と何とも嫌な唸り声が聞こえた。

『さあ、早くあの扉の先へ行くのよ!』

お姉風な男の人はアタシの両肩に手を置くと扉の方へアタシを引き寄せる。

『次に会つた時はゆっくりお話ししましょ!』

そう言いながら扉と壁を繋ぐ留め具のような物を指先で外してアタシをチェストの上に乗せた。

すぐさま入ってきた扉の方へ向かうと振り向いて

『この屋敷に招かれていないお客の相手は美容にも悪そうね』

なんて言いながらお姉風な男の人は頬に手を当てて素敵に笑顔で部屋を出て行ってしまった。

？カチャリ？

扉が閉まると同時に鍵をかけるような音がした。その後は何にも音がしない。

でも、お姉風な男の人がアタシを守るために鍵をかけてくれたのなら、入ってきた扉を開くのはやめておいたほうが良いと思った。

小さな扉を開けて恐る恐るゆっくりと外に顔を出してみた。

アタシの知っているカラクリ屋敷の外側は緑色の草原が広がっている。

同じであって同じじゃないと言われても、やっぱり草原が出てくるのだろうと勝手に思っていたけれど、見えた景色は全く違うものだった。

小さな扉の先には見知らぬ住宅街が広がっていた。

見えたのは緑色の草原ではなく、綺麗に手入れされた緑色の芝生と高級そうな大きな家。

いくつもの同じような家が区画に分けられて、たくさん並んでいる。見える景色は海外の住宅街のような感じがした。

アタシのいるカラクリ屋敷は高い位置にあるのか見下ろせるような位置にあった。

区画と区画の間には背の高い壁が続いていて迷路のように道が出来ていた。

人はいないのかと見渡していたら、ある区画の道におかしな格好をしたのがいた。

人なのかもわからない小太りなそれは白と黒のシマシマな格好をしていて、偽物のようなオレンジ色のボツサボサの髪の毛。

振り向いたその目元には極太の一本線。

一瞬、黒い目隠しでもしているかのように見えただけれど、ペンや墨で書かれたような線だった。

まるで某ファーストフード店のキャラクターのような風貌。

道の両端にある壁と壁にぶつかりながら忙しくウロウロしている。すぐ側の道から男女の二人組が歩いてきた。

シマシマのいる道へゆっくりと曲がった瞬間

?グギャー!!??

聞き覚えのある奇声をあげて、シマシマは男の人の腕に咬み付いた。途端に男の人の頭からはオレンジ色の髪の毛が噴き出すように伸びて、目元には黒い一本線が表れた。

『ギャー!!??』?

それを見た女の人は叫びながら後ずさると、足がもつれたのか後ろへ倒れるような姿勢になった。

そのまま勢い良く、さっきまでシマシマがぶつかっていた壁に肩が触れた瞬間

女の人の目元がジワジワと染み出すように黒くなり始め、シマシマ達と同じような一本線が入った。

(感染……)

アタシは瞬時にそう思った。

女の人が地面へ倒れるとシマシマと男の人は覆い被さるような姿勢で襲いかかった。

五分もしないでシマシマと男の人は起き上がると、女の人がいた場所には女の人のお服だけが残っていた。

（食べたんだ……お姉風な人が言っていた変な奴等ってあれのことか……）

そう思いながら様子を見ていたら、男の人の体がブクブクと太りだした。

同時に着ていた服が体の中に吸収されてシマ模様の服が表れた。

（あれに食べられるのは嫌だな……）

なんて考えていたら

？ドンドンツ！！　グギャー！！？

アタシがいたカラクリ屋敷の部屋の外からだった。

慌てて小さな扉の外にあるバルコニーに出ると……

？カーンツ！？

自分の履いていた靴の先がバルコニーのよくわからない所に当たって綺麗な音が出てしまった……。

反射的にシマシマ達の方を見てみると、凄い顔つきでアタシの足元に寄ってきた。

アタシは屋根によじ登ると、シマシマのいない辺りに飛び降りて、後ろを振り向かずには走って逃げた。ひたすらまっすぐ走っていたら大きな通りに出た。振り返ってみると、シマシマ達はいなかった。

大通りには二本の道路があつて、道路の真ん中には芝生や木が綺麗に植わっている。

アタシは警戒しながら大通りを歩いてみた。道路の両端には大きな家などが並んでいて、洗車する人や芝生の手入れをしている人がいた。

前から二人組の若い女の子達が歩いてきた。

(楽しそうな顔しているなあ……)

そう思いながら二人と擦れ違おうとした瞬間奥にいた女の子の目元が黒くなっていたのが見えた。

慌てて振り返ると、その女の子がアタシの肩に咬み付こうとしていた。

焦ったアタシは尻餅をついてしまった。

(やばい！ 咬み付かれる!!)

身構えていたら……

『え……何してんの?』

一緒にいた女の子が呟いた瞬間

黒ラインの入った女の子はアタシではなく、その女の子に咬み付いた。

すると二人は同時にシマシマと同じ姿に変わりだした。

(今度こそホントに咬まれる!!)

そう思った瞬間

?チュドン!! チュドン!!?

変な音がしたと思ったら、シマシマになった小太りの二人が更に膨らんで……

?パンツ! パンツ!?

風船のように破裂してしまった。

パラパラと彼女達の服の残骸が舞い散る先を見ると、そこには【X
Xロード : 危ない隠し芸】で登場した白いロボットだった。

(うわぁー……全然嬉しくない再会。)

なんて思っていたら……

?ドカーン!!?

突然、物凄い音がした。

音のする場所にいたのは【遊園地& amp;プール】と【研究所】
で出てきた黒いロボット。

辺りを見渡してみると、シマシマと白黒ロボットが攻撃し合っていた。

さっきまで穏やかな雰囲気だった大通りが一瞬にして戦場になってしまった。

アタシは座り込んだまま動けなくなっていた。
すると、アタシの手を誰かが引つ張って走りだした。
前を見ると若い男の人だった。

その人の側には若い男の人や女の人が何人か一緒に走っていた。

住宅街の細い道に入ると、みんなで辺りを見渡しだした。

『この家なら大丈夫だろう』

アタシの手を引つ張っていた男の人が一つの家を指さした。

焦げ茶色の木の塀に囲まれた敷地内に入ると、高級そうな二階建ての大きな家があった。

円柱型の家の外側には、家の形に合わせた白い階段があった。

階段を上った先には玄関用なのかわからない両開きの大きな黒い扉があった。

その扉から家の中に入ると、すぐにリビングのような部屋になっていた。

カーペットの広がる部屋には大きな窓が囲むように続いていて、窓から見た外は今にも雨が降り出しそうな曇り空にも思えるし、夜になる前のようにも見える……何とも言えない色をしていた。

窓の側には大きなソファとローテーブルがあって、奥にはダイニングテーブルとキッチンがあった。

男の人達は一斉に部屋の中で何かを探し始めた。

『あつた！』

一人が何かを見つけてアタシを引つ張っていた男の人に手渡した。

『キミはこれを持っていて』

それは赤い箱だった。

横長の箱は小さいけれど、結構重かった。

男の人達はアタシに箱を渡すとゾロゾロと家の外へ出て行く。慌ててアタシも付いて行こうとしたら止められた。

『食料がないか探してくる。キミは此処で待っていてくれ』

そう言うとアタシを引っ張っていた男の人まで出て行ってしまった。薄暗い家の中で一人……。

箱の中身も気になるけれど、何より箱を持っているのがしんどくなつたのでキッチンのカウンターの上に置いた。

その瞬間に目が覚めてしまった。

殺人ロボット達が攻撃していたということはシマシマは【アッチノ世界】の住人ではなく、侵入者なんだと思った。

あの箱の中には何が入っていて、あの人達は何で助けくれたのだろうか。

お姉風な人は無事なんだろうか……。

色々気になる夢だった。

【赤ちゃん…その昔】

始まりは病院のような場所にいた。

目の前には廊下があって、ふと右側を見るとアタシに頭を向けて産まれたばかりの赤ちゃん達が眠っていた。

たぶん、新生児室のような場所だと思う。

アタシの目の前にいた赤ちゃんは男の子。夢の中でアタシの子供だと思った。

(甥の名前) みたいにもう髪の毛いっぱいあるなあ……)

なんて見ていたけれど、髪の毛と頭は見えるのに顔が見えない。

暫く見てから、自分の病室のような場所に戻った。

すると、そこには今と髪型の違う姉がいた。

しかも、さつき見ていた赤ちゃんと同じぐらいの赤ちゃんを抱っこしていた。

『今まで三人産んで、これで四人目だけど……ユキもやっぱり顔つきは違うねえ』と赤ちゃんを見ながら言い出した。

『あれ？ お姉は子供は三人で限界って言ってなかったっけ？』と聞くと

『そうなんだけどおっパパが私の体が大丈夫なら産んでもいいって言うからさあ。やっぱり、ユキを目の前になると可愛いよねえ』

嬉しそうに微笑む姉。

（姉の子供らしき赤ちゃんは女の子でユキちゃんって名前なんだ。でも、アタシの子供らしき赤ちゃんの名前は浮かばないな。まだ決まってるのかな……）

なんて思っていたら目が覚めた。

凄く鮮明でドキドキした夢でした。

【三つの別れ道】

ある日の夢はショッピングセンターのような駅ビルのような吹き抜けた場所から始まった。

アタシは吹き抜けの中心にある通路のような場所に立っていた。陽の光なのか天井から真つ白な光が降り注いでいて、辺りは青白く浮かび上がっている。

吹き抜けの周りにはお店がいくつも並んでいて、近くには巨大なモニターがあった。

辺りを見渡すと人のような人形のような何かがたくさん逃げ惑っていた。

一瞬、【マネキンショッピングセンター】のように思えたけれど、マネキン人形ではなく人間でもない。

何なのかわからないけれど、みんな同じ方向へ逃げている。

アタシもそつちへ逃げようと数メートル先の階段を上った瞬間

まるで映像を巻き戻したかのように気がついたらまた元の同じ場所、同じシーンに戻っていた。

懲りずに何度も同じ方向へ逃げようとしたけれど、やっぱり戻ってしまつた。

（みんな何から逃げているのかわからないし、どうしたら……）

考えながら不意に後ろを振り向いてみると、誰もいない階段があった。

（みんなと同じ方向へ逃げられないのなら、あっちへ行くしかない。

恐る恐る階段を上り進んでみると、見たことがあるような場所に出た。

そこは【学校】にあるエレベーターホールに似ていた。

右手には見覚えのある茶色いエレベーターと銀色のエレベーターが並んでいる。

反対の左手には外へ通じる扉と大きなガラス窓があった。

外は夜なのか暗い。

でも、後ろを振り返ると吹き抜けた場所は真っ昼間のように明るい。

正面には三つの分かれ道があった。

分かれ道と言っても上りと下りの階段があつて、その間に一本道が伸びている。

やっぱり、どれも見覚えがある。

右にある下りの白い階段は【宿泊施設】にある地下への階段にそっくりだった。

真ん中の一本道は左側には誰もいない教室がずっと続いているのが見えるから【学校】の中にあるフロアリングの廊下だと思う。

左にある上りの階段は木造だった。

木造の階段は【アッチノ世界】にはたくさんあるので、どの階段なのか見当もつかなかった。

何だか【アッチノ世界】に試されているような気分になった。

悩んで悩んでアタシは消去法で選ぶことにした。

右の白い階段は、本当に【宿泊施設】の物だったら地下から出て来

られなくなりそうなので無し。

真ん中のフローリングの廊下は一番奥が不自然に暗くなっているのが見えるから、確実によくない場所に繋がりそうなので無し。

残る左の上り階段は、正直どこに繋がっているのか全くわからない。

でも、木造の階段がある場所で怖い場所は無かったような気がしたので挑戦してみることにした。

ツルツルとした綺麗な階段を恐る恐る静かになって行くと、大きなシャンデリアと棚が見えてきた。

（もしかして【カラクリ屋敷】に通じているのかな〜）

なんて鼻歌交じりで階段を上り切ると、目の前には物凄く広いリビングがあった。

カーペットの広がる部屋には大きなソファとローテーブル、奥にはダイニングテーブルとキッチン……。

キッチンのカウンターの上には少し前にアタシが置いた赤い箱があった。

大きな窓から見えるのは、夜のような曇り空のような不思議な霧囲みの空と高級そうな住宅街。

アタシが辿り着いた場所は【侵入者：感染と抗争】で知った未知の住宅街だった。

（これはかなり危険な場所に来てしまった……）

なんて後悔している途中で目が覚めてしまった。

【アッチノ世界】とコッチノ世界。

どちらがいいのだろうか。

【赤ちゃん・その貳】

前に新生児室のような場所で男の子の赤ちゃんを見つめている夢を見たのですが……

今回は見知らぬお家で赤ちゃんのお世話をしている夢を見た。

可愛いロンパースを着ている赤ちゃんを抱っこしているアタシ。側には【茶色いエレベーター】の夢に出てきたお姉さんが座っていた。

そのお姉さんの家なのかわからないけど、アタシは赤ちゃんに必要な物を色々と忘れてきていたようで、お姉さんがその家の部屋から哺乳瓶などを持ってきてくれた。

お姉さんは先輩ママなのか『これでお水飲ませてあげて』と白湯の入った哺乳瓶を渡してくれた。

アタシは赤ちゃんを抱っこして飲ませてあげるんだけど、赤ちゃんの顔は起きたら忘れてしまった。

でも、前の夢と同じでまだ小さいのに髪の毛はずいぶん長い。

それを見たお姉さんは子供用のヘアゴムを持ってきて結んで遊びました。

『リキ君、男の子なのに結ぶと女の子に見えるね！ 旦那さんにも見せたらなんて言うかな？ ねえ！ リキ君のパパー？』とアタシの背後を覗きながら叫ぶお姉さん。

（やっぱり男の子なんだ……って……えっ？ 旦那さん？ アタシ

の?!)

なんて慌てていたら誰かが近づいてくる音がして、振り返ろうとした瞬間、目が覚めてしまった。

もう少しで旦那さんらしき人を見られたのに……。

どんな人だったんだろ……と寝起きでドキドキしてしまいました。

【侵入者：マキナさんと茶色い塊と銃撃戦】

気がついたら我が家の三階に向かう階段の途中にいた。
三階に行くと、キッチンのあるテーブルに見知らぬ父と母が座っていた。

（あれ……この人達、お父さんとお母さんだっけ……）

そう頭の中で考えていると、見知らぬ母が

『何ぼーっと突っ立てるの！ 可愛い彼女が待ってるわよ！』とリビングに向かって微笑む。

リビングを見てみると、ソファーには黒髪の若い女の子が座っていた。

『まさかアンタが年下の女の子と付き合うなんてねえ！ あら……ちよっと大変！ もう零時過ぎているじゃない。十六歳未満の子が外に出ると 捕まるから、アンタ見つからないようにマキナちゃんを家に帰してあげなよ！』とバシバシ背中を叩かれる。

（そっかあ。マキナはまだ十五歳だった。あれ……。零時過ぎたら何に捕まるんだっけ……。とにかく家に帰さなきゃ。えっと、マキナの住んでいるところは……どこだ？）

『マキナ。ごめん。俺、年下と付き合うのは初めてだから時間とか全く気にして無かった。次は気をつけるよ。そういえばマキナの住

んでいるところってどこだっけ?』

『ううん。大丈夫。住んでいるところは　だよ』と笑顔で話すマキナさん。

ところどころノイズ音で聞こえない。

気になりつつも二人で階段を降りながら話していると、ふと二階のベランダから外が見えた。

外は真っ暗で雨が降っているような雰囲気。

(前にもこんな日があったな……。いつだっけ……)

なんて考えていたら

『外寒そうだから、上着持っていたら?』と言われて服を見ると半袖を着ていた。

外は雨だし言われたとおり上着を着ていこうと部屋に取りに行くとソファアの上に上着が置いてあった。

それを取った瞬間、これは夢だと気がついた。

なぜなら、現実の世界では捨てたはずのソファアが【アッチノ世界】のアタシの部屋には必ずあるから。

それに【アッチノ世界】の我が家の外や家の中が暗くて雨が降っている時は大体、怖い夢になる。

何よりもアタシは女で、マキナという女の子も三階にいた両親も知らない。

そう確信した瞬間、?ボタンツ?と音がした。振り返るとマキナさんがいない!

今の音は隣の部屋の引き戸を強く閉める音。

急いで引き戸を開けて部屋へ入ってみると、あるはずの部屋は無くアタシは外に出ていた。

そこは現実の世界にもある大きな駐輪場の側だった。

振り返ると、開けた引き戸は駐輪場の前にある金券ショップの扉に変わっていた。

辺りを見渡すと、【アッチノ世界】の【商業ビル地帯】にある建物が見える。

我が家の洗面所は【マネキンショッピングセンター】に繋がっていて、隣の部屋は【商業ビル地帯】に繋がっている。

それがわかったとしても目が覚めるまでどうしようかと考えていたから

?ヴウー!! プギヤー!!??

突然2つの駐輪場の間にある短いトンネルの奥から豚のような何か動物の唸り声のような物が聴こえてきた。

それと同時に『やっぱり此処にもいるかあ』と真横で声がして見ていると、最近よく出てくる綺麗なお姉さんが立っていた。

『Aちゃん!せっかくまた会えたのに嫌なタイミングだね……今から醜い奴等が来るみたいだから現れたらこれで攻撃してね!』と素敵な笑顔。

お姉さんに渡されたのは【研究所】の夢で持っていた使えない光線銃を大きくしたような武器だった。

中には可愛いロケットの形をした弾らしき物がいっぱい詰まっているのが見える。

『そろそろ来るよ!!』

そう言われて武器を構えながらトンネルの奥をじーっと見てみると、唸り声が近づいてきた。

その瞬間、奥から縦横二メートル以上ありそうな巨大な物体が三体、ゆっくりと出てきた。

何かで染みて汚れたような茶色い細布を全身に巻いたゴリラのような物体。

包帯を巻くように隙間なく全部に細布を巻かれているので、顔があるのかもわからない。

肉の塊のようにも見えるけど、かろつじて足首と手首は見える。

ゴリラが苦手なアタシはゆっくりと近づいてくる奴等に向かって武器を撃ちまくった!

? シュツポーン! シュツポーン!?

間の抜けた音と共に放たれた小さなロケット。

追跡型みたいな動きをしたので確実に当てられる!とガッツポーズをしようとしたら、見事に奴等を避けていく……。

『あの光線銃と同じでやっぱり使えねえ!!』とイラッとしていたら、二つのロケットがぶつかり一体に? コツン? と軽く当たった。

その瞬間

? プウギヤアー!!?

物凄い叫び声をあげたと思ったら、さっきとは比べ物にならないぐらいの猛スピードで三体が一斉に突進してきた。

すぐさま、お姉さんがアタシの腕を掴んで引き寄せるように助けてくれた。

そのまま三体は止まらずに金券ショップに突っ込んだ。金券ショップはボロボロ……。

『今のうち……こっちに来て!』

お姉さんはアタシの腕を掴んで駐輪場の中に入った。

『此処に入ったら逃げ場が無くなっちゃう!』と慌てて訴えていると

『なぜかね、奴等は道路の上しか移動できないみたいなの。だから、此処には入って来られないと思う。でも、奴等は頭が良いからまた戻ってくるはず。その前に急いで作戦を練り直しましょう』と笑顔で話すお姉さん。

金網フェンスに囲まれた二階建ての駐輪場の中には一台も自転車がなかった。

何だか形も少し違って、コンクリートで出来た広い空き地みたいになっていた。

その中には円形のビニールプールのような巨大な物体が駐輪場いっぱいに広がっていた。

真っ白な物体の中には更に一回り小さい円があって、その中にもう一回り小さい円がある。

中心の円に人が立っていると思ったらなんと!黒羽根さんだった。転がりそうになりながら円の中へまたいで入ってみると、屋根があるのに雨が降った後のように薄く水がはっていた。

(なんで水が入っているんだろ……)

なんて思いながら黒羽根さんに抱きつくと、優しく剥がされた。

『また怖い思いをさせちゃったね……』と困ったような顔で黒羽根さんがアタシに言った瞬間

?パンツ!?

銃声のような音がした。

『マジかよ!』

黒羽根さんが音のする方へ背中を向けてアタシをかばおうとした瞬間……

?パパパンツ!?

更に連続的な音が聴こえてアタシの左ふくらはぎに激痛! アタシは黒羽根さんと一緒に倒れてしまった。激痛と言っても、夢の中の痛みは氷とか冷たい物をずーっと当てている時の冷たいような熱いような感じに似ている。

(もう怖い。夢から覚めるまでこのまま死んだふりしてやり過ぎせないかな……)

なんて倒れたままずるいことを思うアタシ。

本当に死んじゃったのなら、なんてことない薄い水たまり。でも、死んだふりをしているアタシにとってはとても深い水たまり。

息を止めたり、静かに呼吸をしたり、溺れかけながら耐えるアタシ。あまりに苦しくて顔の向きを変えると黒羽根さんの白いシャツが見えた。

(黒羽根さん死んじゃったのかな……)

悲しくなりながら白いシャツに触れようとした瞬間、ムクリと黒羽根さんが起き上がった。

慌ててアタシも起き上がると突然、キスをされた。なぜかしょっぱい。

驚いていると『ツライだろうけど、キミはそのまま横になって此処にいて』と言いながら黒羽根さんは立ち上がった。

『もうすぐ目が覚めるよ……』

アタシの方を見て笑顔で言い残すと、お姉さんと一緒に駐輪場の二階へ走って行ってしまった。

(上はどこにも繋がっていないはずなのに……)

そう思いながら見ていたら、どこからとも無く『元気！ 桃の木！

モモンガの木！』という叫び声が聞こえて目が覚めた。

我が家の前で子ども達が『元気！ 桃の木！ モモンガの木！』と何度も叫んでいた。

黒羽根さんはこれで目が覚めると分かっていたのか、ただの偶然なのかわからないけれど……

あの二人は無事なのか気になって仕方がない夢でした。

【カッププラーメン島】

ある日のアタシは学校の廊下を歩いていた。
続く教室には誰もいない。

何だか一人置いて行かれたような気分になって無性に寂しくなった。

そんな時。

『次の授業、教室移動してテストだって。最悪だね』

アタシの横を小走しながら誰かが言った。

『何のテスト？』と思わず聞いてみた。

振り返った彼女は『数学……』と小さく呟いて嫌そうな顔で笑うと行ってしまった。

（何だ。また夢か……）

数メートル先を走る彼女はマキナさんだった。

アタシも走ろうかと思ったけど、急がなくていいとわかって少しホッとした。

その瞬間、口の中に違和感。

喉の奥から前歯の後ろまできっちり粘土で詰めたかのようにアタシの口の中に何かがあった。

前にも夢だと気づいた時に口の中に謎の異物が詰まっていたことが

ある。

夢だから苦しくはないけど、気持ちが悪くて早く吐き出してしまいたくなった。

急いで近くのトイレへ駆け込んで一つ扉を開けてみると、何故か我が家のトイレだった。

(何で?)

気になりながら便座の蓋を開けてみると、かなり使われていないのが便器の中に蜘蛛の巣が張っていた。

アタシの精神状態の表れなのか何なのかわからないけれど、【アツチノ世界】に出てくるトイレは必ずと言っていいほど汚物で汚れてメチャクチャ汚い。

でも、今回は水が汚れているのとホコリだらけなだけで、いつもとは違う汚さだった。

座らないけれど、顔を近づけるのも嫌だったので中腰の状態で口の中の物を吐き出そうとした。

でも、口の中の異物は餅のように貼り付いて出ない。

口の中に手を入れて取れるだけ頑張っ取ってみた。

まだ口の中に違和感が残るけれど、なかなか取れないので諦めた。

手を洗って無意識にポケットに手を突っ込むと、制服ではなく着慣れたジーパンを履いていた。

上の服装は覚えていないけれど、ジーパンにはいつも左ポケットに入れているハンカチがちゃんと入っていた。

何だか嬉しくなって機嫌よく廊下に出て歩いていると、ふと目に入った教室がおかしなことになっていた。

さっきまで教室の中には普通に学校用の机とイスが並べられていたのに、机とイスはロータイプのソファールとそれに合わせた木の机に

変わっていた。

その教室だけかと思って、さっき歩いてきた廊下を戻って見に行くと同じようにイスがソファアに変わっていた。

(何だか高級仕様な教室に変わっている)

なんて思いながら歩いていると、突き当たりに教室があった。

扉の外から中を覗いてみると、ソファアに座る生徒が見える。

扉の近くにはマキナさんがいた。

テーブルの上には白い紙。

(あー。さっき言っていたテストね)

気にせず教室を覗いていたら

『そのキミ！ 早く教室に入りなさい！』

いきなり声がした。

声のした方を見ると、眼鏡をかけた先生が教室の真ん中に立っていた。

(夢の中でも数学のテストなんて受けたくない)

と素直に思ったアタシは逃走！

すぐ近くにあった部屋に入ると、そこは保健室だった。

やたらと眩しい保健室。

奥には外に通じる引き戸が開いていた。

一歩外へ出ると、見覚えのある【アッチノ世界】の校舎裏だった。

左に行けば校庭、右に行けばお嬢様風の校舎か競技場に繋がっているはず。

どちらかに行けばいいのに、アタシは目の前にあった鉄製の細長い門が気になった。

二メートル以上ありそうな背の高い草だらけの錆び付いた鉄の門。

小走りで門に近づいていくと

『そっちへ行ったらダメだ!』

後ろから声がした。

振り返ると、さっきの数学の先生が保健室の引き戸から出てこようとしていた。

行くなと言われたら行きたくない。
鍵も掛かっていないようなので鉄の門をグーッと押ししてみると、ブチブチとつる草をブチ切りながら門が開いた。

入ってみると、鉄の門は勝手に閉まった。

奥は【上さんの家】の辺りみたいに普通の住宅街だった。

普通の住宅街に思えたけれど……よく見ると、どの家も大きい。玄関の扉が鉄の門と同じぐらいある。

家の側や道の至る所には、何故だか森や溪谷とかにありそうな巨大な岩がそびえ立っていた。

雨に降られたのか岩も家も道も濡れて湿っている。

岩や家を覗きながら奥へ進むと、少しずつ霧のようなモヤが濃くなっていた。

何だか進むのが怖くなったアタシ。

立ち止まった側には細長いサボテンのような岩が上へ伸びていた。

この霧の先はどうなっているのか知りたくて、また忍者のように屋根を使ってジャンプ！ 跳ぶのにもだいぶ慣れてきたアタシ。どうにか岩の天辺に辿り着いた。

岩は少しヌルヌルしていて滑り落ちないか不安になりながら辺りを見渡してみると、信じられない光景が広がっていた。

アタシの立っている住宅街のような場所は小さな島だった。

アタシのいる島の周りには他にも無人島のように小さな島がたくさんある。

辺りは薄い霧で覆われて空は曇っている。

学校があるはずの鉄の門の周辺は冷たそうな海に囲まれていた。

『学校がない！！ あの鉄の門から先は別の世界！？』

なんて驚いていたアタシ。

見える島は全部で6つ。

アタシのいる島のすぐ横には巨大な岩山がある島。

正面には大きなワニの形に彫られた二つの岩がある島。

その間を縫うようにシヨッピングセンターのような建物ばかりがある島が移動していた。

【学校】があるはずの場所には、アタシが立っている島と同じように家がたくさんある島が霧の中から少しだけ見えていた。

その島とアタシのいる島の間にはカップラーメンのような島が浮いていた。

島というより船みたいだった。

形は真ん丸でテントのような屋根にはカップラーメンの蓋のようにラーメンらしき食べ物の写真が写っていた。

屋根には何かが書いてあるけど、漢字みたいな文字で読めなかった。

じーっと見ていると、その屋根の隙間から人が見えた。とても巨大な人。

（あんな雰囲気の人どこかで見たことあるなあ……）

なんて思っていたら思い出した。

【フリーマーケット】の夢に出てきた巨大な人達に似ている。

（もしかすると彼等がいるかもしれない……）

『おーい！ー！』

大きく息を吸って、力いっぱい叫んでみた。

でも、全く聞こえていない様子。近くの家からも誰も出てこない。

どうにかあのカップラーメンのような島に行きたいけれど、見える海は物凄く冷たそうで泳ぐのは嫌。

どうしようか悩んでいたら……

（アクション映画のようにジャンプして、あの屋根に着地すればいいんだ！）

なんてとんでもないことを思いついたアタシ。

跳んだって絶対に届かない距離だけど、夢だから飛べる！と思ってしまった。

（これで海に落ちたら、この間の水たまりみたいに溺れて苦しいの

かな……)

不安になったけれど、とにかくやってTRY！精神でジャンプ！！
ジャンプした瞬間、下からブワツと突風が吹いてムササビのような
気分になった。

そのまま上手くカップラーメン島の屋根へカカト落としをするかの
ように足から突っ込むと、綺麗に屋根が破れた。

その瞬間

(此処で目が覚めそうだな)

なんて思ったら本当に目が覚めてしまった。

やっと中に入れたのに……。

あの中はどうなっていたんだろうか。気になる。

【モノクロビル：黒スーツのお願い】

ある日の夢は【アッチノ世界】にあるモノクロビルみたいな場所にいた。

一階部分がお店になっている真っ黒い建物。
眼鏡のオッチャンはいない。

アタシは扉のない出入口の前に立っていた。

真っ白な壁が見えるお店の中を覗いてみると、額縁や壺……アクセサリー等が並んでいた。

外にも商品と立て看板が置いてある。

アタシの知っているモノクロビルのお店はみんな近代的な物ばかり売っていたはず。

でも、そのお店の中にある物はどれもアンティークな物ばかり。

黒羽根さんがいたお店みただった。

黒羽根さんと言えば……

Black Keyと呼ばれている黒羽根さんらしき人がモノクロビルにいるという噂を思い出した。

（会えるかもしれない！）

そう思って、とりあえずお店の中に入ろうとしたら

?コシン…コシン…? ?

黒羽根さんのブーツのような足音が後ろから聴こえてきた。

『黒羽根さん?!』

慌てて振り返ると、黒羽根さんみたいに黒髪で黒い服を着ていて少し雰囲気は似ているけれど、違う男の人だった。

全身、スーツのような黒服で尖った革靴を履いて後ろで手を組み、無言でアタシを見つめている。

(また黒羽根さんの二セモノか……)

関わりたくなかったのでアタシは気にせずお店の中に入ろうとしたら、その男の人に腕を掴まれて止められた。

アタシが振り返ると、男の人はすぐさま両手を後ろに戻して話し始めた。

『いきなりなんだけど、キミにお願いがあるんだ』

『お願い?』

『そう。僕はあそこに座っている彼と話がしたいのに、僕の両手が暇を持て余しちゃって喧嘩を始めて会話が出来ないんだ。今も後ろで抑えている。だから、キミが間に入って止めてくれないか?』

何とも言えない雰囲気で言い出した。

(夢の中の人はホントに変なことを真顔で言うよね……)

なんて思いながら反対側のビルを見ると一階部分がオープンカフェのようになっていて、杖を持ったおじいさんがイスに座っていた。

頭には真っ黒なターバンをして、中東の国の人みたいな白い服を着ていた。

『喧嘩を止めるってどうやって？』

方法を聞いてみると男の人は何も言わずに片手でアタシの視界を隠した。

黒羽根さんだったら手は冷たいけど、その人の手は温かくも冷たくもなく普通だった。

そのままもう片方の手で腕を掴まれながら、どこかへ誘導された。

手を外されてゆっくり目を開けてみると、さっきのおじいさんが目の前に座っていた。

おじいさんは杖を両手で掴みながら凄く笑顔でアタシを見つめる。

後ろを振り返ると、さっきまでいたお店が見える。

(別に目隠ししなくなたって普通に来ればいいのに……)

そう思っていたら、男の人はおじいさんの斜め前のイスに座った。

すると男の人はアタシの腕を掴んで自分の膝の上に横向きに座らせようとした。

(いやいやいや……)

アタシは驚いて立ち上がろうとしたら『いいから』と強引に座らせられてしまった。

そのまま身体を捻った状態で、男の人の肩に顎を乗せて抱きつくような状態……。

まるで座りながら抱っこされている子供のようだった。

（この状況は一体なんなんだ！！）

ドキドキしていたら、男の人とおじいさんが話し始めた。
どこかの天気の話と、船の話。

その間ずっと男の人はアタシの頭を撫でる……。
抱っこされて撫でられて……。猫が寝かしつけられている子供のよう
な気分になった。

男の人は黒羽根さんみたいに良い匂いがしない。無臭。

（これが黒羽根さんだったらしいのになあ……。）

なんて思っていたら、ウトウトしてきて眠るように目が覚めた。

男の人とおじいさんは何者なんだろうか。

【侵入者：肌色の進化】

ある日の夢。

我が家の三階に向かうと昏間だった。

【アッチノ世界】にある我が家の三階にはリビングの隣に小さな和室と三畳ぐらいの部屋がある。

現実では三畳ぐらいの部屋に老猫さん達が住んでいる。

何故か【アッチノ世界】ではいつもたくさんの動物がいる。

そのせいか夢の中では三畳の部屋は物凄く汚くて荒れ果てている。

今回もその部屋には犬がたくさんいた。

一匹のコーギーがアタシの足元をクルクルと歩く。

それに合わせて振り返ると目の前は知らない部屋に変わっていた。

犬もいない。

見回すと、【カラクリ屋敷】にも【上さんの家】にも似たような場所だった。

(とにかく外に出てみよう……)

そう思った瞬間、足首に激痛！

慌てて足元を見てみるとスフィンクスという毛の無い猫に似た生き物がいた。

(この猫に噛み付かれたのかな?)

なんて考えていると突然

?キーンツ! コーエツ!!!?

その生き物は全く猫じゃない鶏のような謎の鳴き声を発した。それを聴いた途端に物凄く怖くなって急いで目の前の引き戸を開けて中に入った。

そこは五角形の形をした何も無い小さな空間だった。五角形の一面以外、全部ガラスの引き戸になっていた。背後からガリガリと音がするので振り返ると、さっきの謎の生き物が引き戸に爪を立てていた。さっきよりも何だか大きくなっているような気がする。

その謎の生き物の後ろには、どこかに通じそうな廊下があった。でも、外に出たらまた噛み付かれそうで怖い。

(反対側にもあるかもしれない……)

そう思って反対側を見てみると、同じような廊下と廊下の隣には【三つの別れ道】の夢で見た木造の階段があった。

(あの階段も危険なんだよな……この廊下の先に行ってみるか)

そう思って引き戸を少し開けると、爪で床を引っ掻くような足音が聴こえて遠のいた。

後ろを見るとさっきの生き物がいない!

どこかへ行ったかと思って、外へ出ようとした瞬間

行こうかと思っていた廊下からさっきの生き物が走ってきた!!

?ガシャンツ!!!?

慌てて扉を閉じると生き物は人間のようになり二足で立ち上がった。

?コーエツ!!!?

鶏のような奇声をあげながら、首をガタガタ揺らして近づいてくる。

反対の引き戸へ向かうとまた走りだして現れる。

(この二つの廊下は繋がっている……)

そう思つて謎の生き物を見てみると、今度は髪の毛のような物が生えていた。

だんだん人間のような形になっていく。

『怖いし……気持悪い……』

なんて呟いていると

『あら? 何が?』と真横から声がした。

見ると、ぼさぼさの白髪のおバアサンが立っていた。

さっきまでいなかったのに……。

『あの変な生き物のせいで外へ出られないんです。あっちへ行こうと思つていて』

アタシは木造の階段を指さした。

『そんなの簡単よ! 気付かれないように行けばいいじゃない』

にっこり笑いながらオバアサンは引き戸を開けた。
オバアサンが引き戸を開けても変な生き物は走ってこない。
おかしいなと思っっていたら……

?コーエツ?!!?

背後から声がする。

振り返ってみると開いていなかったはずの後ろの引き戸が開いていて、変な生き物が真後ろに立っていた。
今度は幼児ぐらいの大きさになっている。

『オバアサン! 早く逃げて!』

叫びながら振り返るとオバアサンはいなくなっていた。

『やられた!』

歯を食いしばりながら階段の方へ走っていくと、前は上に行く階段しか無かったのに今回は上も下もあった。
上と下の階段の間は突き抜けになっていた。
下を見ても真っ暗で何も見えない。

上に行ってもまたシマシマのいる家に通じてしまうかもしれない。
そんなことを考えていたら、謎の生き物が両手を広げて飛び掛ってきた!!

(夢だからもういいや……)

そう思ったアタシは映画のワンシーンのように両手を広げて、後ろ向きで階段の間にある空洞へ飛び降りてみた。
ブワツと風が吹いて落ちていく。

たくさんの階の様子が見えたけれど、黒い煙のようにモクモクと夜空が現れて階段が消えていく。
今度は空から落ちていく。

(このまま地面に落ちるのだろうか……)

なんて考えていたら、何時の間にか違う夢に変わっていた。
その夢はどんな夢だったか忘れてしまったけれど……
最近、変な生き物ばかりに襲われる。

【巨人族】

気がついたらC a f e にいた。

アタシの前の席には最近、出産したばかりの友達が座っていた。テーブルには空のコップとお皿が並んでいた。

『子供をお風呂に入れなきゃいけないから、そろそろ帰るね』

『うん。またね』

彼女は小さく手を振るとC a f e の外へ足早に出て行った。

(此処はどこだっけ……)

辺りを見渡そうとしたら、アタシの背後に男の人が立っていた。よく見ると中学時代に物凄く好きだった男の子だった。

『あれ？久しぶり！何しているの？』

立ち上がって彼に声をかけると、『買い付けだよ』と彼は笑顔で言った。

『買い付けって……仕事？』と言いながら何か違和感。

アタシの身長は153センチで小柄な方だけど、それでも明らかにおかしいくらい彼と身長差がある。

背が高かったと思うけど、こんな二メートル以上なんて無かったし、

何より背も体格も大き過ぎる。

そう思っていたら

『キミを待っているんだよ。ウエアを選んで欲しくて』

なんて彼は言い出した。

『アタシにウエアを？ え？』

混乱していると背後から

『Aさん！ 探しましたよ！ 早くしないと良い品、みんな他のやつらに買われちゃいますよ！』と野太い声がした。

振り返ると、見覚えのある巨大な方達が立っていた。

彼らは【フリーマーケット】の夢に出てきた巨大な人達だった。

そしてアタシのいる場所は【マネキンショッピングセンター】のCafeだった。

『またあの時のフリマ？ なんで彼もいるの？』と聞いた瞬間、目が覚めてしまった。

もう少し目が覚めなければ【カップラーメン島】のことも聞きたかったのにな。

わかりにくい夢のお話ですみません。

【パラレル・ワールド：気紛れターミナル】

【巨人族】の夢を見てから数日後の夢は【学校】の中にいた。

【カップラーメン島】の夢に出てきた保健室の隣にアタシ専用の部屋が出来たらしい。

部屋にはパソコンと学校にありそうな大きなプリンターと小さな冷蔵庫が置いてあった。

その部屋で過ごしていたら、アタシの後輩だと言う女の子達が何人か入ってきて、見せたい物があるからとアタシの手を取り廊下に出た。

前の夢で数学のテストをやっていた部屋に行くと、今回は美術室になっていた。

何故か美術室では男の子達が床に絵の具を撒いて冷凍マグロのように滑っていた。

その男の子達を無視して後輩は奥へ進む。すると少し広い部屋に辿り着いた。

部屋に入ると正面には何かを分けるかのように、シャボン玉のような透明の巨大な膜が張っていた。

その奥にはガラス張りの通路と、その通路の入口が見える。

『先輩！ あの中にいる人知っていますでしょ？ あの人を飼っている猫に会いたって言うていたじゃないですか。今なら会いに行けますよ』と後輩は嬉しそうにアタシの背中を押す。

（会いたい猫？ そんな猫いたかな……）

そう思いながら通路をよく見てみると【上さんの家】で会ったお坊さんが立っていた。

『あつ！ あのお坊さん！！ ってことは、あの通路は上さんの家？』

なんてブツブツ言いながら透明の膜を通り過ぎた瞬間

（この奥には猫又のママさんがいるんだ……）と思った。

【アッチノ世界】のアタシの記憶なのだろうか。

『ママさんに会えるんですね！！』と興奮していると

『此処はアナタの足元を道として歩く者達もいます。騒いではいけませんよ』とやんわり怒られたの。

足元を見てみると、子鬼のような人形のようなとても小さい小さい何かがウロウロしている。

『すみません。あつ！ ママさんに会えるのなら美味しいお酒をお渡ししないと……』

急に思い出して、さっきいた部屋に慌てて戻ろうとした。透明の膜の奥には後輩達が見える。でも、何故か段々と黒っぽくなっていく。

『すぐ戻ります』

そうお坊さんに言いながら膜を通り過ぎていく途中で……

『変わり目に通ったらダメですよ！ 決まった時間を通り過ぎないと違う場所に出てしまいます！』と叫んでいるのが聞こえた。

でも、もう遅かった。

通り過ぎた先は教室ではなく濃い緑色をした薄暗い建物の中だった。

アタシは後ろを見ずに映画館の中にありそうな通路を進んだ。

突き当たりまで進むと、通路と同じ濃い緑色をしたターミナルのような場所に出た。

そこを見た瞬間、また夢の中の記憶が蘇ってくる。

あの透明の膜は電車みたいな物で、色んな場所に繋がっている。

決まった時刻を通り過ぎなければ行きたい場所にはいけない。

そして、アタシがいる場所はいつもの【アッチノ世界】ではない場所。

パラレルワールドとさえいいのだろうか。

【アッチノ世界】にもあって、他の世界にもある。

同じであって同じじゃない場所。

その世界に住んでいる人は様々だから、その場所場所で治安や雰囲気が違う。

アタシが出てしまった世界は治安のよろしくなさそうな場所だった。

全身緑色の人や【侵入者：肌色の進化】に出てきたような生き物達がウロウロしている。

じっくり辺りを見渡していると……

前にも夢の中で違う世界の同じターミナルに来たことがあると思っ

た。
【アッチノ世界】にいる夢の中のアタシとコッチノ世界で眠っているアタシの記憶が交差する。

(このターミナルの外に出れば知っている場所に行けるかもしれないけど、この世界の知っている場所に行っただって意味が無い。どうにか【アッチノ世界】に戻らなきゃ……)と悩む。

ふと、ポケットの中に手を入れてみると小銭と小さな紙切れが出てきた。

黄ばんだ和紙のような古い紙に赤と黒で数字と何か文字が書いてあった。

(これは切符だ。)

そう思った途端に自然と歩き出すアタシ。

立ち止まった場所には下りの階段が見えた。

その奥にさつきみたいな移動する何かがあるけれど、この切符で何処に行ってしまうのかわからない。

時間がかかるのか階段には人が溢れかえっていた。

階段に座りながら待っていると……

『お嬢ちゃん。そのチケットをワシに譲ってくれないだろうか……』

震えながら話すシャガレ声が聞こえた。

後ろを振り返るとボロボロの服を着たオジイサンがアタシの後ろにしゃがみこんでいた。

『お願いじゃあ〜!!』

今にも抱きついてきそうなくらい近かったので慌てて立ち上がるとオジイサンが凄く小さいのに驚いた。

服もボロボロで髪もボサボサなオジイサンだけど、身綺麗にしたら【博物館】の下にいるオジイサン達に似ていると思った。

オジイサンが欲しがっている紙をどうしようか見ていたら、紙が二枚重なっているのに気がついた。

オジイサンに見えないようにそつとめくってみると、赤い文字でFree Pass Ticketと書かれていた。

(この切符だったら時間を気にせず指定して行きたい場所に行ける……でも、アタシの行きたい場所をなんて言っていないのかもわからない。もう一枚の方はもしかするとアタシの行きたい場所の切符なのかもしれないけど……違う場所かもしれないし……)

紙を見ながらどちらをオジイサンにあげていいか迷っている間に目が覚めてしまった。

その次の日に見た夢はどう始まってどう終わったかわからないけれど、気が付いたらまた深い緑色のターミナルにいた。イスがたくさん置かれた待合室みたいな場所。

(また此処かあ……)

悩んでいると、黒いコートを着た巨大な人達が隅に集まっているのが見えた。

(いつもの巨人族かしら？ 知っている人がいるかもしれない……)

そう思って近づこうとしたところまでは覚えているけれど、何時の間にか目が覚めてしまった夢でした。

【侵入者?…青い瞳と金髪さん】

ある日の夢は気が付いたら街の中にいた。

(此処はどこだろう……)

ぶらぶら歩いていたら、突然周りにいる人が近くにいた人に咬み付
きだした。

(またシマシマ?!)

焦っているとアタシの一番近くにいた人が咬まれた。

それと同時に白目の部分が青色になった。

咬みついている女の人の目も同じように青い。

見ていたら、その二人がアタシに襲いかかってきた。

(咬まれる!!)

そう思つて目を閉じてしゃがんでみたけれど、痛くも何ともない。

静かに顔を上げてみると、何時の間にか別の場所にいた。

そこは円錐状の建物で外側から中心に向かって幅の広い段になって
いた。

一番外側の段は簡易的なベッドになっていて、たくさんの人が座つ
たり横になったりしている。

コンクリートで囲まれた背の高い円錐状の壁。

てっぺんのとんがった部分には小さな窓が点々とあって、そこから外の光が降り注いでいた。

辺りを見渡してみると、青い目の人がたくさんいる中に目の青くない人もいるようだった。

円の中心にある大きなテーブルにパソコンを置いて何か作業をしている女の人の人。

小さな子供達と数人の妊婦さん。

話しかけに行こうとした瞬間

『気になるの?』

後ろから声がした。

振り向くと、金髪で青い目の小さな子が立っていた。

その子の白目は青色ではなく、瞳が外人さんのような青色をしている。

十四、五歳ぐらいだろうか。

前にも夢に金髪ロングヘアで青い目の女の子は出てきたけれど、今回の子はショート。

だから、女の子なのか男の子なのかわからなかった。

その子はアタシと目が合うと、ゆっくり近づいてきて抱きついてきた。

『僕達はね、仲間を増やしているんだ。でも、まだ産まれてくる前の胎児や小さな子供は咬み付いてしまうと生きられない。だから、そのまま連れてきた。大きくなるまで待つんだよ』と金髪さん。

(僕達って男の子なのかなあ……)

なんて思いながら無言で妊婦さんを見て……パソコンを見ている女の人に視線を移すと

『彼女は仲間にするかまだ決まっていけない人間なんだ。それとアナタも特別。ほら、アナタも咬まれていない』と言って金髪さんは鏡を手渡してきた。

見てみると確かに何ともない。

咬まれていなくても何だか体がだるかったので、アタシは開いているベッドに横になって建物の中にいる人達を見ていた。

咬み付かれた青い目の人達は、普通の人達を監視するように見ている。

たまに妊婦さん達が集まっているところに近づいて『ホントなら今すぐにでも咬みついてしまいたい！』と大声を上げて妊婦さん達を脅したりしていた。

でも、不思議とアタシのところには来なかった。

そのかわり、金髪さんがアタシに抱きついて一緒に寝ていた。

ウトウトしていると突然、携帯の着信音が鳴った。

パソコンを見ていたスーツの女の人がペコペコしながら話していた。

それを見た青い目の人が話しかけると『私は仕事があるから外に出なきゃいけないのよ！この仕事はしくじれないの！』と叫んでいた。

青い目の人に携帯を取り上げられて、彼女はテーブルをバンバン叩きながら『どうにか外に出て、ここの事を外の人達に話してやる！』と悔しそうにつぶやいていた。

そんな騒動を横になりながら見ていたら、何時の間にか眠っていた。目を閉じながら周りの音を聞いていると色んな話し声や物音がする。

(まだあの建物の中か……)

目を閉じたまま考えていたら唇に何かに触れる。そつと目を開けてみると金髪さんがアタシの唇を人差し指で撫でていた。

『何しているの?!』

飛び起きて言葉を発した瞬間、何か苦い。唇を触つてみると何かヌルヌルしたものが……。慌てて鏡で見ると、唇に群青色の謎の液体が塗りたくられていた。

『アナタの唇が渴いていたから潤してあげたの。どのぐらい口の中に入った? たったそれだけでアナタが僕の仲間になってくれたら嬉しいのに……アナタはそうならない……』

アタシの姿を見つめながら、そんな風な事を悲しそうな顔で言う金髪さん。

これはどうしたもんかと唇を拭きながら辺りを見ると、パソコンを見ていた女の人がいなくなっていた。

本当に脱出したのだろうか。それとも失敗してしまったのか。気になっていたら目が覚めてしまった。

青い目の集団はシマシマみたいに侵入者なんだろうか。
それにしてもアタシの夢には金髪ハーフな人がよく出てくる。

【侵入者：真っ赤な口の兔仮面】

フリーズドライな兔仮面。

彼との遭遇は二回目。

最初はどんな夢の始まりだったか忘れてしまったけれど……。

フラフラと歩いていたら真っ白な空間に辿り着いた。

黒羽根さんと出会った真っ白な部屋や、アンティークショップへと繋ががる巨大な本を見つけた空間とも違う場所。

あの真っ白さではなく、陽の光に照らされた黄色味があった白色。

卵の殻の中にいるみたいに天井はドーム型になっていた。

目の前には薄い布がカーテンのように上下左右、隙間なく吊るされている。

どこからか生ぬるい風が吹くと、波のような音に合わせて白い布がユラユラと揺れる。

でも、その奥に何があるのかは全く見せてはくれない。

(まるで【白い布に包まれた家】の夢みたいだ……)

そう思いながら回るように振り返ってみた。

目の前には白い壁と茶色い木の扉が一つ。

扉は猫一匹分だけ開いていた。

扉の隙間からはレースの布がはみ出て見える。

何枚も重なっているのだろうか。

風が吹く度に色々な種類の布が揺らめいている。

(あの扉の先はどこへ繋がっているのだろうか……)

様子を見てみると

?……コツン……?

反射的に足音のした方を見てみると、十メートルぐらい離れた場所に兎の仮面をつけた大柄の男の人が立っていた。

その兎の仮面は物凄く可愛くない!

まるでフリーズドライにされちゃった兎のように顔の骨がゴツゴツと浮き出ている、顔の中心は血で染まったかのように赤くなっている。

見開かれた目は死んだ魚のようなに白く濁っていて、どこを見ているのかわからない。

突き出た前歯は歪だけど尖っている。

?……コツン……?

走ってくるわけでもないのに一歩近づいてくるのが怖い。

?……コツン……?

捕まっでどうなるかなんてわからないのに、逃げなきゃいけないと思っただ。

奴は侵入者。

そう思っただ瞬間に目の前の扉へ一目散で向かった。

ドアノブにも触れず開きかけた扉を掴むように引くと、一メートルもない正方形の空間に同じような扉が左右と正面にあった。

どれも同じように猫一匹分ぐらい開いていて、扉にレースの布が何枚も貼りつけられていたり、隙間からはみ出ているのが見える。

そしてどの扉もドアノブの位置や扉を開ける方向が違っていた。

アタシはちょっと悩んですぐ右の扉に入った。
するとまた同じように扉が三つ。
まるで迷路のようだった。

?.....コツン.....コツン.....?

足音が聴こえる度に焦ってしまっただけで考えずにどんどん進んでいくアタシ。

ふと立ち止まった瞬間、動けなくなった。

目の前の開きかけた扉の隙間から光と一緒に影のような物が見える。

(兔仮面はこの扉の前にいる.....)

そう思っている間にその扉のドアノブがゆっくりと傾き始めた。

それを見てアタシは何を思ったのか、開こうとしている扉の上と下にあつたドアストッパーみたいな部分にしがみついていた。

アタシを引っ付けたまま扉が開いた。

でも、兔仮面は出てこない。

そのまままたゆっくりと扉が閉まった.....かと思えばまた開く。

段々とスピードが早くなっていく。

右側の扉の分厚い布がクッションみたいになっているからか、扉に背中が当たってもボフボフするだけで痛くはなかったけれど、振り落とされそうだと思った。

(兔仮面はアタシがへばり付いているのを知っててワザとやってるんだ。見つかったらどうなるんだろうか.....)

なんてドキドキしていたら目が覚めてしまった。

これがフリーズドライな兔仮面との最初の遭遇。

二回目は【アッチノ世界】の学校の中だった。

廊下を歩いていると通り過ぎた教室の一番後ろに立っていた。

慌てて逃げると、その先の教室の一番後ろに同じように立っている。

その繰り返しな夢だった。

兔仮面に何かをされたわけではないけれど、遭遇したら危ないといつも思う。

【廃墟アパート】

ある日の夢は薄暗い中、芝生の上を歩いていた。
芝生があつて、墨汁の入った半透明の水のような暗さは【廃墟村】
の近くの空き地に似ている。

少し行くと、目の前にボロボロな建物が現れた。
海外のアパートのようにも見える。

アパートと言つても【黒羽根さん　：　白い階段と金髪少女】に出
てくる謎のアパートよりか大きな建物だった。

目の前の部屋のガラスは割れていて、中が荒れ果てているのが見え
る。

その部屋とを区切るように隣には階段があつた。

（アタシはこの建物の5階にいる男の人に会わなきゃいけない）

そう思い出しながら階段を上ろうとした時、数段上の方に裸の赤ん
坊のような形をした真っ黒な謎の物体が這い蹲るようにつづくまっ
ていた。

（この物体を見ても大丈夫なのだろうか……。）

そう思いながら、その物体の横をゆっくりと通り過ぎて階段を上る
と凄く広い廊下が現れた。

階段を上り切る手前で同じ玄関の扉が左側に三つ見えていた。

階段を上り切つて少し進むと廊下の一番奥には大きな穴が空いてい
て、外が見える。

）どの部屋にいるだろうか……。 ）

選んでいる途中で目が覚めてしまった。
誰に会いに行ったのか思い出せない。

【深底公園】

気がついたら小さな公園の側にいた。

そこは前にも来たことがある場所だと思った。

外の風景が壁に描かれていて、撮影のセットのように部屋の中に遊具が置いてある公園。

空は紫が混ざったようなピンク色の暗めな夕暮れ。

その公園は水を抜いたプールのように地面が深い場所にあった。ハシゴを使わないと下りられないぐらい深い場所。

公園の外を一步出ると廊下になっている。

外の風景が描かれている壁の裏側には、綺麗な装飾が彫られた焦げ茶色の壁が続いていた。

公園から声がするので見に行くと、中には若い人がいっぱいいた。遺跡発掘調査のように公園の地面を掘っている。そして大きな長方形の箱が置いてあった。

『オツギ……』

すぐ側にいた女の子がそう呟いたので『ヒツギじゃなくてオツギ？』と聞いたら

『そう！ヒツギだった。アナタは見ないほづがいいわ……』とアタシの目を両手で無理やり隠してきた。

その瞬間、目が覚めた。

あの長方形の箱は誰の棺だったのだろうか。

【黒羽根さん：抗う侵入者】

ある日の夢は学校の教室の中にいた。

教室には生徒がたくさんいて、アタシは真ん中の前の方の席に座っていた。

何故か両手には見覚えのない指輪をたくさんつけていた。

それをまじまじと見ていると

『指輪凄いいね！ ちょっと手を見せてくれない？』

突然、隣にいた人が話しかけてきた。

横を向くと、その人はベリーショートでボーイッシュな女の子だった。

アタシは何も考えず左手を見せようとしたら、斜め後ろから誰かに手を掴まれた。

大きくて綺麗な手。

指輪を隠すように握る本人を見てみると、なんと黒羽根さんだった。

『キミの場合、指輪を見るだけじゃないでしょ？ 僕にはわかるよ』

女の子に向かって黒羽根さんは意地悪そうな顔で言った。

女の子は黒羽根さんを睨むように見ると

『そうよ。だってそんな指輪一つ一つがアンタが付けてたってだけ』

で、コッチノ世界じゃ億単位の値がつく。一つぐらい貰ったっていいじゃない』と言ってアタシに向けて小さな溜息をつくど、そっぽを向いてしまった。

『どつしてそんな値段に？』

驚いていると

『コッチノ世界の住人と違ってキミはコッチノ世界に縛られない。

そんなキミに好意を持つ存在もいれば、嫉妬したり悪い好奇心を抱いて近づいてくる存在もいる。キミは何度殺されてもまた戻ってくるし、捕まえられても逃げていくからね。特別な存在なんだよ』とそんなようなことを笑顔で黒羽根さんに言われた。

言い終わるとアタシの席にあつたカバンから粉砂糖のかかったドーナツを出して手に渡してくれた。

『今のキミは自由。授業なんて受けなくていい。これでも食べながら外でのんびりしておいで。僕も後から行くから』と黒羽根さん。

背中を押されながら廊下に出された。

廊下にはたくさんの生徒がいる。

歩いていると階段があつたので下りようとしたら

『違う。次の階段だよ』

後ろから声がした。

振り返ると黒羽根さんが立っていた。

右向きに下りる階段は真っ黒な廊下に出してしまう使っではいけない

階段らしい。

黒羽根さんの教えてくれた階段は左向きだった。

一緒に下りると、明るい中庭のような場所に出た。

外には色んな国の外人さんがいっぱいいた。

中庭の真ん中にはトラックとクレーン車を混ぜたような黄色い乗り物があった。

中庭の外側にはベンチがあったので、そこに座って黒羽根さんと一緒にドーナツを食べようと思った瞬間、黄色い乗り物が近くにいた人を吹っ飛ばしながら某ロボット映画のように形を変えだした。

ベンチの側に坊主の白人の人が吹っ飛んできたので、声をかけていたアタシ。

ガシャンガシャンうるさいので乗り物の方を見ると、中途半端なロボットの形でアタシの方に近づいてきた。

『ヤバイ……』

そう思った瞬間、巻き戻したかのように乗り物がロボットの形から最初の形に戻って行く。

自分の意志ではなく無理やり戻されているのか抵抗しているようにも見える。

けれど、黒い煙を出しながら最初の乗り物に戻ってしまった。

何だったんだ？と辺りを見渡していると

『最近、コッチはこんなのはっかりなんだよねえ……』

側にいた黒羽根さんが呟いた。

その瞬間、目が覚めてしまった。

あれは黒羽根さんが助けてくれたのだろうか。

【アパレルガール】

ある日の夢は始まりが思い出せなかった。

思い出せるのは扉の前に立っていたところから。

雰囲気からしてマンションのような建物だと思う。

でも、この間見た【廃墟アパート】とは違う。

【廃墟アパート】よりかは比較的綺麗な建物。

その階には一世帯しか住めないのか扉は一つしか無かった。

夜のように薄暗いけれど、月がないのに月の光のような【アッチノ

世界】特有の何かに照らされていた。

（何かのするために此处に住んでいる誰かに会わなきゃいけない。）

336

そう思つてインターフォンを押すと、すぐに扉が開いた。

中から若い女の子が出てきてアタシの顔を見るなり『わー！！ 待

つてたよ！ 入って入って！』とテンションが高い。

言われるがまま部屋に入ると、足の踏み場もないぐらい部屋中に服やバッグなどが山積みになっていた。

『今ねえ〜お姉ちゃん出かけちゃってるんだよね。でも、私が全部用意するから大丈夫よ』

そう言いながら女の子は更に服でいっぱい小さな部屋に入っていた。

大きな紙袋をアタシに一つ手渡すと

『よし！ これと……これと……後、これも！』と部屋に置かれた服やアクセサリなどをどンドン詰めていく。

紙袋がいっぱいになるまで詰めると

『こんなもんかな！ もしまた足りなくなったら言ってね！』とハグをされて部屋を出た。

受け取った物をどこかに持っていかなきゃいけないと思いつながら、どうなったのか思い出せずに目が覚めてしまった。

彼女は何者なんだろうか。

【謎の黒服男とツインテールと妊婦】

ある日の夢は【学校】の廊下にいた。

廊下の先には男の人が二人立っていた。

一人は黒のパンツに白シャツに黒いネクタイをした若い男の人。黒髪短髪でハーフみたい綺麗な顔をしていた。

（こんな人知らない。また黒羽根さんの偽物か？）

警戒モードなコツチノ世界（現実）のアタシ。

その男の人の隣には黒いスーツを着た秘書風な若い男の人も立っていた。

（この人も知らないなあ……）

なんて思いながら近づいてみると、夢の中のアタシは知っているのか『リュウ！』と呼びながら、ハーフ顔の人に抱きついてしまった。

夢の中のアタシがリュウと呼ぶハーフ顔の人は、アタシをギュッとハグすると

『僕は行けないから（秘書風な人のこと）と一緒にいておいで。気をつけてね』と言ってアタシにキスをした。

驚く暇も無く、気が付いたらまたマンションらしき扉の前にいた。

【アパレルガール】で出てきた部屋と同じ建物なのかわからないけれど、昼間なのか暖かそうな陽射しが扉の前に射していた。

秘書風な男の人がインターフォンを押すと中からメガネをかけたツインテールの女の人が出てきた。

でも、気が付くとまた何時の間にか部屋の中において、座って何かを見ていた。

アタシのいる部屋には黒と茶色で描かれた風景画がたくさん置かれていた。

『凄い……』

『最近、こつちの仕事が忙しくて全然描けてないんだよねえ。だから個展も出来なくて』

見入っていたら違う部屋から声がした。

声のする部屋へ行ってみると、部屋にはたくさんの漫画本と小説や図鑑など色々な本がビルのように積まれていた。

その本の山の中から声がするので覗いてみると、さっきのツインテールが小さなテーブルで漫画を描いていた。

(画家であり、漫画家さんでもあるんだ……)

そう思っていたら

『一人で黙々とやってると外の情報がわからなくてさ。ねえ！

！（秘書風な男の人のこと） お願いがあるんだけど、雑誌買ってきてくれる？』とツインテール。

チユナだかツナだかという雑誌とアイリスだったかアロイスだったか、

そんな感じの雑誌の名前を言うと

『あつ！ 後、育児雑誌もね！ これからママになる妊婦さんには必要な雑誌だからね』とアタシに向かって笑顔で言うとアタシのお腹を見つめたツインテール。

『え？ アタシ、妊娠してるの?!』

慌てて自分のお腹を見ると五ヶ月ぐらいのお腹になっていた。

『ありがとう。産まれたら抱っこしてね!』

戸惑うアタシを無視するかのように夢の中のアタシはハシヤグ。

そしてまた何時の間にか外にいた。

日が落ち始めた時間帯なのかオレンジ色のような黄色っぽいような空の色だった。

目の前にはさつきいた部屋の玄関前と同じ色をした五階建てぐらいの建物があった。

(此処から出てきたんだ。)

そう思いながら振り返ると、陽に照らされた細い道の先に【神社公園】の入り口が見えた。

(此処は神社公園の近くにあるんだ！ また新しい場所を発見した！)

大興奮なコッチノ世界のアタシ。

そんなアタシをまた無視するかのように夢の中のアタシは『もうすぐ産まれる もうすぐ会えるね〜』と心の中で思いながら嬉し

そつにお腹をさする。
右手には育児雑誌。

(もうすぐ産まれるって……まだじゃん……)

なんて思いながらお腹を見てみると、さっきは五ヶ月ぐらいだったのに……

もう臨月じゃないかってぐらいお腹が大きくなっていた。

慌てたのは覚えているけれど、その後どうなったのか目が覚めたら思い出せなかった。

アタシは【アッチノ世界】でママになってしまったのだろうか……。

【フェンスと日向ぼっこ】

【アッチノ世界】にある学校の夢を見た。

校舎の中で色んな教師に追いかけれ……飛んだり跳ねたり。

昨日の夢はまるで追いかけてくをしているみたいで、子供のように騒いだり笑って楽しかったな。

誰かと一緒に逃げていたのに手と足だけしか見えなかった。

校舎の中を走り回った後は外に出て、広いグラウンドを突っ切ると緑色のフェンスがあった。

その人はアタシに『この先には何があるの？ どこに行くの？ 安全？』と質問ばかり。

『行ってみないとわからないよ』

そう言っ一緒にフェンスを登ると、その先には小さなお店がいくつかあったような気がする。

(こつこつ建物があるってことは、この先はもしかしたら……)

と夢の中で何か思ったんだけど、起きたら全然思い出せなかった。

まだ早朝だったので、そのまま寝ると今度はみんなで日向ぼっこをしている夢を見た。

誰とだったかは思い出せないけど……。

一階建てのオープンな小さい家があって、その左側には黒い大きな建物。

右側には【廃墟アパート】らしき建物があった。

小さい家の前には家が一軒建てられそうなくらい広い芝生がデンツ！とあって、家からみんなでジュースとか持ってきてワイワイしていた。

黒い建物のせいで家は日影だったけど、芝生の一部だけ陽が射してて暖かった。

（もしかしたら、あの黒い建物は【モノクロビル】かもしれない。）
なんて思ったり。

【アッチノ世界】のことをもっと知りたいな。

【本屋】

ある日の夢は自転車に乗っていた。
始まりは忘れてしまったけれど、途中で外が深夜のように真っ暗になった。

偽物のような雨が降り出して、私はビニール傘をさしながら【寂れたコンビニ】の横を通りすぎた。

そのまま少し進むと、雨が止んで商店街のような場所に辿り着いた。

左右にお店がズラーツと並んでいるのだけれど、どれも【深底公園】みたいにパネルのような何かに描かれた偽物だった。

飛び出す絵本みたいなお店が並ぶ中、自転車がたくさん置かれている場所が二箇所見える。

アタシも自転車に乗ってそのお店の前に行くと、その二箇所だけ偽物ではなく本物のお店だった。

向かい合うように建っている二つのお店は、どちらも本がたくさん並んでいた。

片方は古本屋さんで片方は新品の本を売っているようだった。

どちらも立ち読みしている人達でいっぱいだったけれど、アタシは古本屋さんの方へ入ってみた。

店内は狭いけど凄く綺麗だった。

店員さんらしき人達がバチカンにいそうな白い服を着ていたのが気になったけれど、アタシは自然と一冊の本を手にとってパラパラとめくってみた。

何の本かわからないけれど、四ページの右隅にオセロのような黒い丸と白い丸が描かれた説明図のような物があった。

二つの丸は半分ぐらい重なるように描かれていて、それぞれに『黒い天井と白い壁の場合』と書かれていた。

それを見た後、パラパラとめくっていくと十六ページにまた同じような説明図があった。

今度は黒い丸と白い丸が逆で描かれていた。

アタシはそれを見て何か物足りなさを感じたので、もう一つの本屋さんへ行こうとしたら目が覚めた。

あれは一体何の本だったんだろう。

【猫屋敷】

ある日の夢は知らない場所から始まった。

外人の男の人達や見知らぬ女の子達と一緒に買物をしていた。

お店の中には紺色や白黒の色をした物ばかり。

どれもフワフワの素材で出来ていた。

フワフワの毛の付いた枕やマグカップ、更にはフワフワの紺色の毛で覆われた肉球型の風船まであった。

（モノクロームなカラーばかり……ってことは此処はモノクロピルのお店？）

なんて思いながらみんなでお店を出ると、全然違う場所だった。

外にはアイボリーや濃い茶色をした建物がたくさん並んでいた。

出てきたお店を見てみると、海外の美術館みたいにアイボリーな色をしていて何か四角くて巨大。

ライオンの石像でもいそうな雰囲気。

【侵入者：感染と抗争】で出てきた住宅街に雰囲気が少し似ていた。見渡すかぎり見える建物は全部、美術館みたいだった。

地面も同じ素材で出来たタイルが綺麗に敷き詰められている。

建物の間にはやたらと階段があつて、その横には細い通路と小さな穴がたくさんあった。

一緒にいた人達はそれぞれ違う場所に行くのか、色んな方角へスタスタと歩いて行ってしまふ。

アタシだけ一人ぼっち。

そんなアタシを見て、外人の男の人と一緒に横断歩道を渡りかけていた女の子が声をかけてくれた。

『アナタの行く場所は、この階段をおりて、まっすぐ進んで突き当たった建物よ。中に入れば案内があるから。途中で捕まらないように気をつけて』と笑顔で手を振り行ってしまった。

(捕まる？ 何に？)

気になりながら言われた通りに階段をおりていると、突然後ろから腕を掴まれた。

振り返ると目元に黒い一本線が入ったオレンジ色の髪の男の人だった。

『え？ 何？ シマシマ！！』

ビビっていると気が付いたら男の人は消えていて、さっきの女の子が手を振って歩いて行くのが見える。

(この感じ……何度も繰り返すやつか……)

そう思いながら、階段をおりていくと背後から気配がしたので振り向きもせず、急に階段を駆け下りてみた。

でも、ドン！と背中を押されて転げそうになった瞬間、またさっきと同じ場所に戻っていた。

(どつやったら先に進めるのだろう……)

悩んでいると、どこからか色んな声が聞こえてきた。

『身体に触れられちゃダメ。その細道を使えば……跳んでしまえばいいのに……』

細道だと言われてすぐに細い通路の事だとわかった。

アタシには小さすぎて歩きにくそうだと思っただけで、迷っている暇はなかったので歩いてみることにした。

歩いてみると意外にもスタスタと歩けてしまった。

目の前には高級そうな建物が見える。

(此処だ！)

ちょっと安心しながら通路をおりた瞬間、横から捕まえられて元に戻ってしまった。

(触れられちゃダメって……何だか鬼ごっこみたいだな)

そう思いながら細道を今度は走ってみた。

横の階段を駆けおりる足音が聴こえる。

負けずに走って道路を渡り、建物の黒い門にぶつかりながら扉を開けて中に入ってみると、物凄く長いフロアリングの廊下と、その両側に赤色にも近い茶色の扉がズラーツと並んでいた。

ふと、玄関の鍵を閉めなきゃと思って閉めようとしたら、何故か玄関の鍵が学校のトイレとかにありそうな物凄く脆そうな鍵だった。濁った金色をしたボロな小さな鍵をロツクしようとしたら、壊れているのか全然動かない。

『鍵なんていいからどれか扉に入るんだ……此処には来ないで……早くおいで……』

扉の内側から色んな声がまた聴こえてくる。

一番手前の扉に入ったらすぐに捕まりそうだと思って左側の二番目の扉の中に入ってみた。

誰かの部屋なのだろうか。

中は結構広くて、オシャレな家具が綺麗に置かれていた。

? バタンツ!?

外の扉を開けるような音がしてアタフタしていたら『上じゃ上!』と声がした。

声ができる方を見てみると、部屋の隅に小さな階段があったのぼつてみた。

のぼつてみると一回り小さな部屋があつて、小さなベッドやソファーが置かれていた。

部屋を見ていると……

『あーやれやれ。ワシの部屋に入ってきたか』と背後から声がした。

慌てて振り返ると見たことがある薄い灰色の猫が座っていた。

(どこから声が?)

探していると猫がスタスタと歩いて部屋の隅にあるハシゴに手をかけた。

そのままの体勢で『書斎として使っているのだが、不安なら上に逃げるかい?』と猫から声がした。

声も出せず驚いていると、さっきの男が下の部屋に入ってくる音が

した。

『ヤバい……捕まっちゃう』と小声で焦っている……

『大丈夫。自分が入ってきたところを見てみなさい。此処は猫の部屋。招かれなければ入ってこれないだろう』と猫さん。

見てみると、確かにのぼってきた階段の入り口は猫一匹分しか入れない大きさになっていた。

その穴からさっきの男のオレンジ色の髪が見える。

『でも、どうしてアタシは通れたの？』

気になったことを聞いてみると……

『だーからー！ ワシに招かれたから入れたの！ さっき通ってきた細道もそう』と尻尾をブンブン振り回して説明してくれた。

『他の部屋にもそれぞれ猫がいる。今度来た時は違う部屋にも入ってみるといい』

そう言われて何かをした後に目が覚めた。

シマシマらしき男の人が現れたのには驚いたけど、猫が喋ったのは面白かった。

口元は動いてないけど。

今度は違う猫にも会ってみたい。

【侵入者：ニセモノ】

【黒羽根さん：ニセモノ】

ある日の夢は【学校】の教室にいた。

クラスには生徒がたくさんいたけれど、【未来ビル】の地下にいた人達みたいにみんなブレていて顔が見えなかった。

いつもとは違う異様な様子に不安になりながら様子を見てみると、一人の生徒が近づいてきた。

『ねえ……彼、アナタの大事な人なんでしょう？ 側にいたらいいじゃない』

体全体がブレているのに話す時だけ、口元が鮮明になっていて何だか不気味だった。

その口元を見ていると、その生徒がどこかを指さす。

振り返ってみると、ブレている生徒達の中に一人だけ普通の人が教室の席に座っていた。

よく見てみると、その後姿は黒羽根さんだった。

アタシは嬉しくなって思わず駆け寄った。

『黒羽根さん！』

はしゃぎながら隣の席に座って顔を覗き込むと……

「やあ！ 久しぶり」

アタシに笑顔見せてきたのは全くの別人だった。
服装や髪型は黒羽根さんと同じだったけれど、顔は全然違う。

「ニセモノ……」

イラツとしながら呟いていたら目が覚めた。

最近の【アッチノ世界】は侵入者とかニセモノとか様子がおかしい。

【アパレルガール：双子と金髪の欠陥品】

ある日の夢は体育館みたいな建物の中から始まった。

建物の中には洋服や下着、キッチンツールや文房具などの雑貨、化粧品などがグチャグチャに絡み合っつて山のようにいくつも積み上げられていた。

『Aちゃん！ 何ボーっと突っ立っているの！ 早くしないと遅れちゃうよ？』

背後から声をかけられた。

振り返ると【アパレルガール】に出てきた女の子だった。

『隠されてたAちゃんの荷物は私が集めといてあげたから。』

そう言いながらアパレルガールはアタシがいつも使っている上着とバッグを渡してきた。

バッグの中身を見ようとしたら……

『でも、あのマフラーだけは取れなくてさ……取ったらあの山が崩れると思うの。ごめんね。』

アパレルガールは一つの山を指さした。

見てみると上の方にアタシのマフラーが何かの棒に絡まっているのが見える。

『そつかあ。ありがとう。』

アタシがそう言うのとアパレルガールは凄い勢いでハグをしてきた。

『こちらこそ！ さあ早く行って！』

急かされるように建物の外に出された。

『楽しんできてね！』とアタシに笑顔を見せてアパレルガールは建物の扉を閉めてしまった。

中の様子は見えない。

振り返った瞬間、辺り一面が雪景色になっていて驚いてしまった。

音が聴こえるようで聴こえない、しんと雪が降る独特な雰囲気。建物の前は校庭のような広場になっているのに、出てきた扉の直ぐ側にはバスの停留所のような標識とベンチが置いてあった。

そこに座っている黒いコートを着た男の人は肩に雪を積もらせて寒そうにしていた。

それなのにアタシは全然寒さを感じなかった。

気になりながらも建物に沿って進んでみた。

少し進むと途中から体育館のような建物と学校の校舎のような建物が繋がって続いていた。

長い廊下と教室の扉。

チラチラ見ていたら廊下に人が立っていた。

人だと思ったらよく見てみると、人形だった。

ゴシッククローリータな格好をした女の子の人形が双子みたいに並んで立っていた。

もっと近くで見てみたくなって、どこかに入り口はないかと少し歩いたら目が覚めてしまった。

まだ起きる時間ではなかったので、そのまま二度寝したら……
今度はさっき見ていた廊下に立っていた。

『彼女、この格好で連れて行くの？』

突然、背後から声がした。

振り返ると、ゴシックロリータな双子が人形ではなく人間の姿で立っていた。

(さっきは人形だったのに……)

何も言えず見ていたら

『あー！ そうだったね！』

背後から声がして振り返ると、またまた金髪ハーフ風な男の人が立っていた。

アタシ達が立っている場所は学校にありそうな普通の廊下なのに、男の人が立っている先からは【博物館】や【学校】にあるお嬢様学校のような雰囲気になっていた。

床は絨毯が敷き詰められていて、アンティーク調の照明が並ぶ。廊下の先は広くなっていて、テカテカに光った焦げ茶色のオブジェのような物が置いてあった。

『どうしよう……。僕の恋人がこんなダサイ格好だなんて他の僕には見せられないよ！ インはメイク、ヤンはヘアをやっつて！』

なんともストレートなことを言いながら男の人は頭を抱えながら廊

下にかけてあつた服を忙しなく見ていた。

彼女達は無言でアタシの手を取ると廊下に置いてあつた椅子に座らせて、ヘアメイクの道具を取り出した。

一人はアタシと向き合うように座って、もう一人はアタシの背後に立って、それぞれセットを始めた。

猫目が目立つキツメのメイク、フワフワの黒髪にゴシックな黒いドレスとシマシマのニーハイソックス。

二人共凄くイイ匂いがした。

『彼は服を作る人。今宵は他の彼等も集まってお披露目会。』

『着せて、見せて、触れられて……アタシ達はマネキン人形。』

『でもね、アナタは違うの。見せたいけれど他の手には触れられない。彼にとって特別な存在。彼も特別。』

双子は交互に言うつとアタシにハグをしてきた。

『特別？』

『そう。他の彼等はマネキン人形だけ。でも、アタシ達の彼にはアナタがいる。』

『他の彼等とは違う。彼は欠陥品。』

『そう。彼は欠陥品。だから彼も特別。だから面白い。』

そう言うと双子は見つめ合って子供のように笑った。

アタシが何かを聞こうとした瞬間

『ねえ！ 二人共！ 彼女に何を着せたらいいと思う？』

焦った様子で男の人が叫んだ。

アタシに化粧をしていたインさんが片足を上げて

『タイルパンツなんてどうかしら？』

なんて言いながらスカートを捲った。

インさんはスカートの下にタロットカードのような縦長の絵がいくつもプリントされたハーフパンツを履いていた。

『お！ 新作のやつね。それでいいね。』

と言いながら男の人がアタシに近づいてくる途中で目が覚めてしまった。

最近、【アッチノ世界】に出てくる人は金髪率が高いし、ハグをし
てくる人が多い気がする。

他の彼等にも会ってみたかった。

【実験と戦争パレード】

ある日の夢は遊園地のような場所から始まった。

でも、前に【アッチノ世界】で見た【遊園地& amp; プール】とは違う雰囲気だった。

前に見たのは【アッチノ世界】に出てくる場所をパロディーに模したアトラクションが設置されていたけれど、今回いる場所はアトラクションが違った。

普通のジェットコースター、観覧車、メリーゴーランド、ティーカップ、フライングカーペットのようなアトラクションがあった。

アタシは全部のアトラクションが見えるような高い場所で見ている乗り物に乗り込んだのは小さな子供からお年寄りまで老若男女の人達。

みんな番号がプリントされた白いつなぎみたいな服を着ていた。静かに乗り物が動き出す。

(せっかくの遊園地なのにみんな楽しそうな顔をしていないなあ…)

そう思いながら見ていたら、乗り物が段々とスピードを上げていく。ジェットコースターは一周を終えても停まならない。

他の乗り物も同じように猛スピードで停まらず動き続ける。

(何で停まらないの?!)

従業員に叫ぼうとしたら、操縦していたのは【遊園地& amp; ール】と【研究所】で目撃した全身防護服のような服を着た人達だった。

今回は黒色の防護服。

よく見るとアトラクションの周辺には防護服を着た人達が立っていた。

片手にはまた電子辞書のような物を持って見ている。

カーブで頭を振られる人、観覧車の中で浮いて天井にぶつかっている人、馬にしがみついて振り落とされている人……。みんな耐久テスト人形のように悲鳴もあげられないぐらい悲惨な状態になっていた。

人間を使って何かの実験をしているのか、恐ろしい光景で鳥肌がたつような気分になった。

(どうにかして止めなきゃ!!!)

操縦している場所に向かおうと慌てて振り向いた瞬間 動けなくなつた。

アタシの背後に黒色の人型ロボットが立っていた。

黒色の殺人ロボットの性能はまだよくわからない……。

どうにか逃げられないかと辺りを見渡すと、ロボットの背後に大きな看板の裏側が見えた。

よく見てみると鉄骨が組まれた中心に【侵入者：感染と抗争】の夢で【カラクリ屋敷】にあった横長の小さな扉のような物が見える。

それが扉なのかもわからないし、扉であってもどこに繋がっているのかわからない。

でも、アタシは殺人ロボットに突っ込んでいく勢いで走った。

殺人ロボットの横を通り過ぎて、扉まで後数メートル……。

？ガシャン……？

何かが落ちたような音がした。

そのまま走ればいいのに……アタシは反射的に振り向いてしまった。振り向いた先には鎖で出来た漁師網のような物を腹部から出した殺人ロボットが立っていた。

アタシは慌てて扉を引いた。

引いても……引いても……扉は開かない。

（捕まっちゃう！）

身構えながら扉を押した瞬間 あっさり開いてしまった。

看板に頭をぶつけながら這いつくばって扉の奥に進んだ。

扉の先は時代劇に出てきそうな大きな台所だった。

壁も地面も引き戸も釜も食器も見える物全部が白色に近い灰色。

何よりも驚いたのが【侵入者：肌色の進化】で出てきた猫みたいな謎の生き物達が炊事をしていた。

その生き物達も同じ灰色。

？キーンツ！ コーエツ！！？

謎の生き物達はアタシに気がつくくと、また鶏のような鳴き声をあげてゾロゾロと近づいてきた。

アタシは台所を一気に突っ切って引き戸を開けた。

すると、その引き戸の先にはまた同じ台所と謎の生き物達がいた。

でも、さっきは正面にあった引き戸が左側にある。

アタシは駆け寄って引き戸を開けてみた。

(また台所だったらどうしよう……)

なんて思ったけれど、今度は江戸時代の街並みのような場所に出た。外にありそうな風景なのに、室内なのか空も道も見える建物も台所と同じ白色に近い灰色をしていた。

辺りを見渡しながらか歩いてみたけれど、どこもかしこも灰色をしている上に道が迷路のようになっていいるから抜け出せないような気分になった。

どうしようか立ち止まって考えていたら――

?パオーン!!??

(ん? 象……?)

鳴き声が聴こえた方を見ると、建物を分断するかのようにな等間隔に広い道が並んでいるのが見える。

一番手前の道まで歩いていくと、右側から象を筆頭に様々な動物の大群が押し寄せてきた。

サイや象の上に乗ったサル達は木の実や石などをアタシに向かって一斉に投げてきた。

慌てて反対へ逃げようと振り向いた瞬間――

左側からは鎧を着て馬に乗った軍隊がアタシに向かって大きな岩や槍を投げてきた。

挟まれたアタシは真っ直ぐ走った。

次の広い道に出ると、右側からホウキに乗った魔女や狼男など童話の登場人物達が現れた。

まるでハロウィンの仮装のような光景。

アタシに向かって色んな物を投げつけてきたけれど、何かはわからなかった。

反対側を見ると刀を持った日本兵のような人達があたしに向かって一斉に走ってきた。

捕まらないようにまた先の広い道へ走ると、今度はロボットに乗った宇宙人やエイリアンのような大群、迷彩服を着た軍人に黒い帽子と赤い服を着た兵隊……。

みんなあたしに向かって攻撃してくるけれど、何故か華やかな音楽を流しながら紙吹雪や紙テープを撒き散らしていた。

まるでパレードのように。

走っても走っても危ないパレードは終わらない。

（これも何かの実験なのだろうか……）

なんて考えている途中で目が覚めてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6780o/>

【アッチノ世界】

2011年10月28日18時15分発行